

植松・地尻遺跡

—店舗建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2005

安中市埋蔵文化財発掘調査団



植松・地尻遺跡全景



古代の土器



「評」の刻書土器

序

安中市は群馬県の西南部に位置し、碓氷川の流れに沿って存在する緑豊かな田園都市です。植松・地尻遺跡のある安中地区は碓氷川と九十九川に挟まれた宅地化が進んだ地域であるとともに、江戸時代の城下町と旧中山道の宿場町の面影を残した街でもあります。市名の「安中」は戦国時代にこの地域を治めた安中氏に由来するものであります。

今回の発掘調査は民間開発による店舗建設に伴うものであり、縄文時代から平安時代までの集落跡と官衙遺構が発見されました。なかでも、官衙遺構は、古代碓氷郡の役所あるいは東山道駅路に置かれた野尻駅家の可能性が高いことで注目されることになりました。遺跡のある地域は古代「野後郷」に相当し、この地名は現在でも「上野尻・下野尻」として現在も残って言います。また、東山道のルートについても遺跡付近を通っていたものと推定され、この地域が歴史的にも重要な場所であったことがうかがえられます。また、出土遺物の中から「評」と刻書された須恵器が発見されたことにより、古代地方行政区画である郡制以前に評制の施行が上野国において確認できる資料として、さらに考古文字資料として県内でも最古の一つに数えられるものとして古代史研究上極めて重要な発見となりました。

こうした歴史の遺産は、私たちの祖先の歩んできた姿を映すものであり、郷土の歴史として将来へと残していく必要があります。そのためにも今回の成果が、郷土の歴史を学習するために活用されることを願う次第であります。

最後に、発掘調査に協力していただきました株式会社ヤマダ電機様をはじめ、発掘調査に従事していただいた方々、調査に際して有益なご助言、ご指導をいただいた多くの方々には厚く御礼申し上げたいと存じます。

平成17年3月

安中市埋蔵文化財発掘調査団
団長 高橋重治

例　言

1. 本書は株式会社ヤマダ電機が実施した店舗建設に伴う植松・地尻遺跡（略称D-18）の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2. 本遺跡は安中市安中二丁目字植松2484-1外3筆に所在する。本遺跡は当初「植松遺跡」と呼称されてきたが、遺跡の範囲が地尻まで広がると予想されることから、隣接する小字名も付け報告では正式名称として「植松・地尻遺跡」と変更した。

3. 確認調査は平成13年度国庫補助金及び県費補助金の交付を受けて安中市教育委員会が実施した。本調査及び遺物整理は原因者負担により、安中市教育委員会が組織する安中市埋蔵文化財発掘調査団（団長　高橋重治）が実施した。

4. 調査期間

確認調査 平成13年10月2日～平成13年10月9日

本調査 平成13年11月1日～平成13年12月26日

整理期間 発掘調査終了後～平成17年3月31日までの間断続的に実施。

5. 確認調査は安中市教育委員会文化振興課文化財係主任千田茂雄、同主任深町　真、同主事井上慎也が担当した。本調査は千田（安中市埋蔵文化財発掘調査団）、深町（同）、井上（同）、日沖剛史（山武考古学研究所、調査員派遣）が担当した。

6. 遺物整理は井上が担当し、各種遺構図の作成・トレースと遺物の実測・トレース、図版作成は井上、平出紀子、筑井美佐子、伊田百合子、吉澤栄子、高瀬敦子が行った。なお、遺物実測、遺物観察表作成は繩文・弥生時代の遺物及び古墳～平安時代の土器の一部、その他の遺物は井上が行い、古墳～平安時代の遺物及び遺物観察表の一部は（有）毛野考古学研究所に委託した。

7. 本書の編集は井上が行った。本文の執筆は弥生時代の土器については深町、それ以外を井上が行った。また、調査時の所見については日沖氏の協力を得た。

8. 遺構の写真撮影は、深町、日沖、千田、井上が行った。遺構の航空写真是山武考古学研究所に委託して行った。遺物の写真撮影は、古代の遺物は日沖、それ以外を井上が行った。

9. 遺構の実測は深町、井上、日沖、鬼形敦子、伊藤佳奈子が行った。

10. 発掘調査における記録、出土遺物は安中市教育委員会で保管している。

11. 発掘調査及び遺物整理の期間中次の方々にご指導、ご協力をいただいた。記して感謝の意を表します（敬称略・順不同）。

大工原　豊　長谷川一郎　長井正欣　坂爪久純　小野和之　鳥羽政之　中沢　悟　巾　隆之　小宮俊久
若狭　徹　桜岡正信　間口功一　高島英之　綿貫邦男　森田秀策　松島榮治　松田　猛　神谷佳明
西田健彦　飯島義雄　壁　伸明　小林　修　深澤敦仁　梅澤克典　笠原仁史　中里正憲　群馬県教育
委員会文化課（当時文化財保護課）　山武考古学研究所（有）毛野考古学研究所（株）関東創建

12. 発掘調査及び整理作業従事者

伊田百合子　伊藤佳奈子　鬼形敦子　小林寿八　高瀬敦子　田島かつ子　田島せい子　田中利江

田村信子　筑井美佐子　遠間宰吉　戸塚里子　中島けさよ　萩原治枝　萩原みつ江　半田あい

平出紀子　丸岡民子　宮口千尋　矢島柳子　横塚松枝　吉澤栄子　吉田和雄

目 次

序

例言

凡例

I 調査の経緯と経過	1	VI 成果と問題点	66
II 調査の方法と経過	2	1 古墳時代～奈良・平安時代の 土器群の変遷について	66
III 遺跡の地理的・歴史的環境	4	2 古代建物群の性格と 遺跡の推定範囲	69
IV 層序	8	3 古代稚木群の歴史的背景	73
V 遺構と遺物	10	4 「評」と刻書された須恵器について	75
1 概要	10	写真図版	
2 繩文時代の遺構と遺物	10		
3 弥生時代の遺構と遺物	10		
4 古墳時代～奈良・平安時代 の遺構と遺物	15		

凡 例

1 遺構の実測図は1/80を基本としたが、遺構の大きさにより1/40とした。

2 遺構図中の北マークは磁北である。

3 遺物実測図の縮尺は次のとおりである。

縄文土器・弥生土器・石器：1/4 土師器・須恵器：1/4

瓦・土製品・銅製品・鉄製品：1/2

4 遺物実測図のスクリーントーンは坯外面はスス、蓋外側は自然釉の範囲を示す。

5 土層説明中での記号、略称は次のとおりである。

土層名称及び量の基準：新版標土色帖による。

色調<：より明るい方向を示す（暗<明）

しまり、粘性 ◎：あり ○：ややあり △：あまりない ×：なし

混入物の量 ◎：大量（30～50%）○：多量（15～25%）△：少量（5～10%）

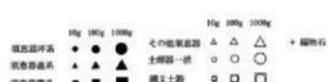
※：若干（1～3%）

混入物 R P：ローム粒子（溶け込んだ状態） R B：ロームブロック（固まりの状態）

Y P：板鼻黄色軽石

6 ピットの深さ ○ 0～19cm ● 20～39cm △ 40～59cm ■ 60cm以上

7 遺物重量分布



8 掘図中のPは土器、Sは石器及び鍬を示す。

I 調査の経緯と経過

平成13年9月4日、安中市地域開発対策委員会を通して株式会社ヤマダ電機から店舗新築工事に係る埋蔵文化財の照会があった。事業計画地は周知の埋蔵文化財包蔵地内（市No.336）であったため、工事を実施する場合には埋蔵文化財の保存措置を講じる必要があることを会社側へ回答した。その後、会社側と市教育委員会との協議により、事業計画地内の埋蔵文化財確認調査を実施することになった。確認調査の結果、事業計画地には住居址と大形土坑が多数し、遺物も多数出土したことから、遺跡が存在することが判明した。また、発見された遺構、遺物から、古代碓氷郡と東山道との関連性が強い公的施設の可能性が強い遺構群が存在する遺跡と考えられることから、再度、会社側と埋蔵文化財の取り扱いについて協議を行なった。しかし、事業計画の変更は困難で遺跡地を回避することはできないことから、事業計画地全域を対象に発掘調査を実施し、記録保存の措置を講じることになった。発掘調査は、会社側の依頼により安中市教育委員会が組織する安中市埋蔵文化財発掘調査団（団長高橋重治）が実施することになり、同年10月、会社側と埋蔵文化財発掘調査委託契約を締結し、同年11月1日から発掘調査を開始した。

本調査開始後、複数の大形掘立柱建物が整然と配置されていたことと建物群を区画する柵列の存在が明らかとなったことで、遺跡が古代東山道の駅家である「野後駅」あるいは古代碓氷郡の「野後郷」に存在したとされる郡家（郡衙）の一部である可能性が高遺構とが判明した。こうした遺跡は類例が少なく、極めて重要であることから、遺跡の保存を会社側へ申し入れ、保存についての協議を行うことになった。すでに計画も進み開店日も決定したため、現段階では計画の変更は無理とのことであったが、建物の設計変更があつたため、工事方法によって遺跡の一部が保存されることになり、工事においても慎重に行なうことで遺跡への影響を最小限にすることになった。このことについては、発掘終了後に会社側と市教育委員会との間で遺跡の保存に関する覚書を取り交わすことで遺跡の保存が図られることになった。また、発見された遺跡の内容について広く市民へ周知させることを目的に、新聞発表を行い、同年12月23日に現地説明会を実施し公開した。

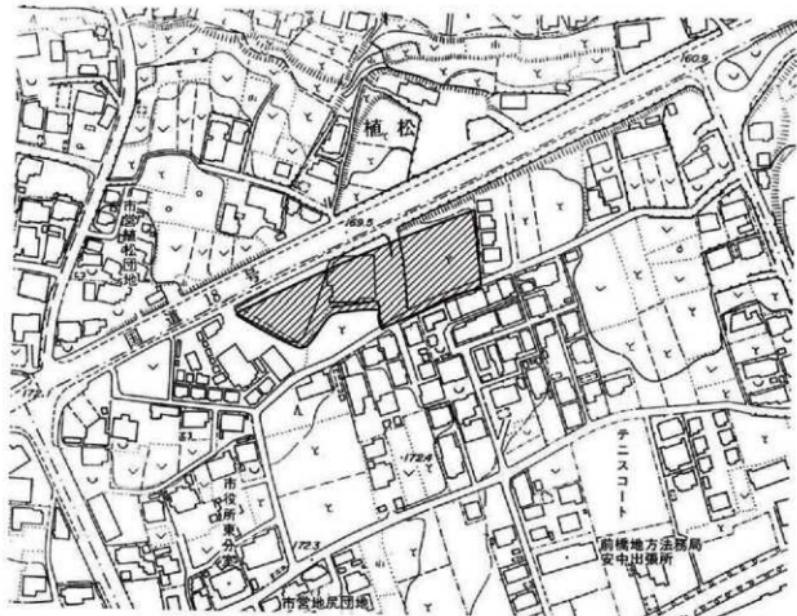
II 調査の方法と経過

確認調査は平成13年10月2日から10月9日まで実施した。調査は建て替え部分を対象としたが、旧店舗部分についてはすでに厚く削平されていたため、調査対象から除外し、旧店舗の東側部分（現況が畠）を対象に幅2mのトレンチを3本設定した。バックホーによりIV層上面まで掘削し、遺構確認を実施した結果、各トレンチから弥生時代から平安時代までの住居址、土坑等の遺構及び遺物が多数発見されたため、本調査は建物予定地全域を対象とした。

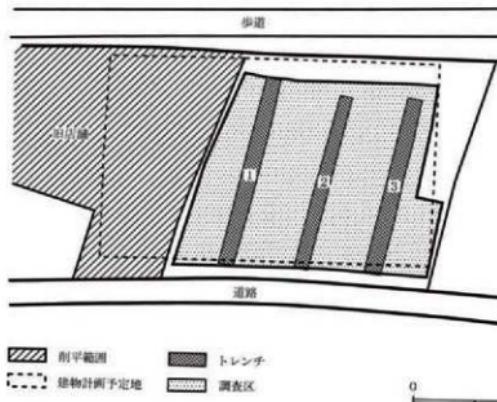
グリッドの設定は、4m×4mでグリッドを北西隅を基点とし、北から南へアルファベットでA、B、C…、西から東へ算用数字で1、2、3…、小グリッドをさらに2m×2mに4分割（北西隅からアルファベット小文字でa、b、c、d）と呼称した。なお、基準点については建物の位置を基準としたため、国家座標との取り付けはしていない。

発掘調査は、平成13年11月1日より開始し、同年12月26日までの間実施した。調査区全面を掘削するには土置き場の確保が困難であることから、遺構の配置状況により調査区を南北に分割して、切り返し調査を行うことにした。表土はバックホーでIII層上面まで掘削し、その後、人力で遺構確認を行った。北側調査区では表土掘削を急いだあまり、一部IV層上面まで掘削したところもあり、掘削により遺構の一部が破壊されてしまったものも存在した。調査は調査区北側から開始した。この部分は縄文時代から平安時代までの住居址等の遺構が多数確認され、全てについて調査を実施した。しかし、調査区南側では本遺跡が公的施設であるとの重要性から、古代の遺構群に主眼をおくこととなり、確認された古墳時代の住居址については、これらの遺構の調査によって重要な古代の遺構群が壊されてしまう恐れがあることと住居址が工事によって影響が及ばないとことから、確認のみで現状保存とした。確認された遺構については、従来の調査方法と安中市で実施している独自の調査方法及び手順で行った。住居址では「分層16分割法」によって層毎に精査を行い、土坑及びピット（柱穴）やその他の遺構については、範囲を確認後、半截し、土層を記録した後完掘する手順を基本とした。土層断面及び微細図等の遺構図の作成には「ビニール転写法」を用い、原寸大に記録した。遺構の測量にはラジコンヘリコプターによって空中から垂直にビデオ撮影した画像をデジタル編集し、その画像を出力（1/40を基本）して、現地で遺構の細部を確認しながらトレースする方法で遺構図を作成した。写真撮影は調査の進捗に併せて行い、全景写真等はラジコンヘリコプターで撮影した。

遺物整理は調査終了後より平成17年3月31日までの間断続的に実施した。遺物の水洗・注記→分類・接合・復元→実測・トレース・遺物観察表作成→写真撮影→図版作成の順で行い、並行して遺構図面の整理・作成→トレース→図版作成と写真整理・選別（遺構・遺物）→写真のパソコンへの取り込み→写真図版作成の順で行った。遺物写真撮影にはデジタルカメラ（Nikon COOLPIX775 200万画素）を使用し、編集作業の効率化を図った。なお、各種図版の作成及び編集（レイアウト）作業全般にわたってパソコン等の情報処理機器を使用して作業の効率化を図り、データを全てデジタル化した（OS：Microsoft Windows XP 主な使用ソフト：（株）ジャストシステム一太郎12・花子9・三四郎9及びAdobe Illustrator9.0・Photoshop Elements）。



国道18号



第1図 調査区設定図

III 遺跡の地理的・歴史的環境

1 地理的環境

植松・地尻遺跡は安中市安中二丁目字植松・地尻に所在する。本遺跡は碓氷川と九十九川に挟まれた碓氷川中位段丘面（安中面）上に存在し、この段丘の北側、北東斜面と端部に差し掛かる場所に位置する。本遺跡は安中市役所の東、国道18号と旧中山道に挟まれた市街地に位置する。周辺には東に安中城が存在するほか、地尻遺跡、同II遺跡、同III遺跡、上野尻遺跡等、さらに旧中山道のルートと重なると推定される推定東山道駅路が存在する。

2 歴史的環境

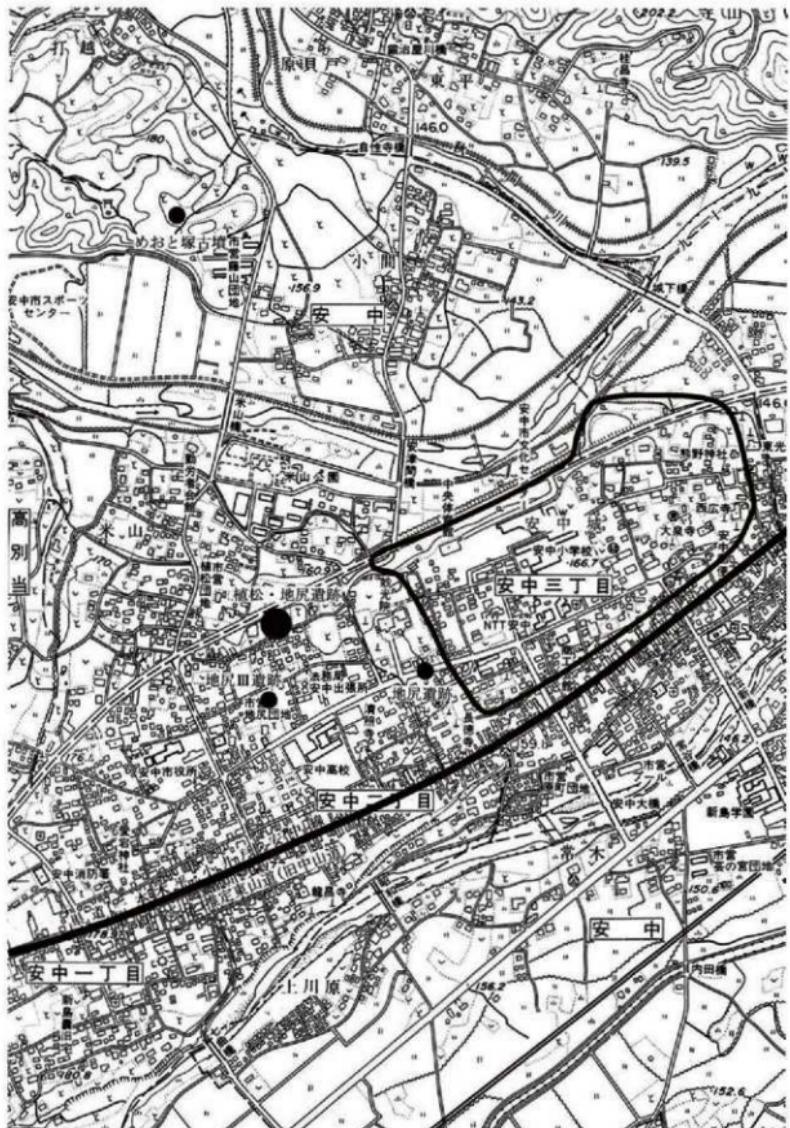
本遺跡の周辺遺跡と各時代の概要について述べる。旧石器時代の遺跡は確認されていない。縄文時代の遺跡は本遺跡で草創期と推定される有舌尖頭器と中期の土坑と遺物が確認されている。地尻遺跡では中期の土坑と遺物が確認されている。西町・谷津遺跡では中期と後期の土器が出土している。発見されている遺跡は少ないが、安中城周辺等にも縄文時代の集落が存在するものと推測される。

弥生時代の遺跡は本遺跡で中期後半の住居址と遺物が確認されている。中宿在家遺跡では遺物包含層中で後期後半の土器が出土している。三本松遺跡では中期前半の壺が出土している。山峰遺跡、下原・賽神遺跡では後期後半から古墳初頭の集落が確認されている。古墳時代では本遺跡で多数住居址が発見されたが、同じ台地上では遺跡数が少なく、集落規模も小さい。本遺跡周辺には古墳が多数分布し、安中4号墳、安中7号墳等が存在する。本遺跡の南側上位段丘には堀谷戸遺跡、西殿遺跡、下原・賽神遺跡では奈良～平安時代の集落が存在する。中世では安中城が存在する。

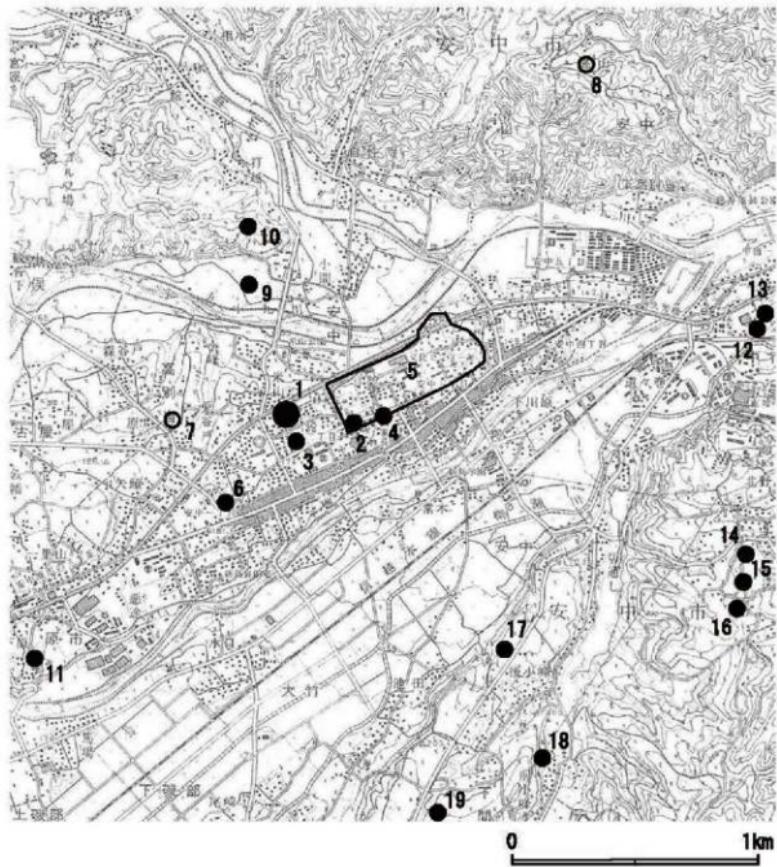
本遺跡一帯は古代碓氷郡の「野後郷」に比定され、東山道駅路が通過し、「野後駅」が存在する地域である。また、碓氷郡の郡家（郡衙）が存在したと言われる場所とも言われ、碓氷郡のなかでも中心的な地域と考えられている。こうした性格を示すものとして、地尻遺跡では古墳時代末から奈良時代初頭（飛鳥時代）の集落跡が発見され、畿内の土器を真似た暗文土器及び須恵器円面鏡といった特殊遺物が出土している。地尻III遺跡では平安時代を中心とする集落跡が発見され、集落を横切る溝が確認された。市役所敷地内において確認調査を実施した木宿遺跡では、集落跡は確認されなかったが、浅間B軽石に覆われた畠が発見され、骨蔵器の蓋と推定される遺物も出土した。当初、東山道駅路部分と推定された上野尻遺跡では確認調査を実施したが、駅路を直接証明する遺構や遺物は確認できなかった。確認された溝は中世の頃の溜池から安中城へと延びる用水路と考えられる。なお、植松・地尻遺跡の北西、高別当地区からは瓦塔の破片が採集されている。

市内中央部（安中台地）では清水遺跡、嶺・下原遺跡等で奈良時代から平安時代の集落跡が発見され、鍛冶ヶ嶺遺跡では官衙的な奈良時代の大形掘立柱建物群が発見されている。

九十九川流域一帯では浅間B軽石で覆われた平安時代後期の水田址が多数確認されたことにより、本流域が古代の集落の経済基盤であった場所と考えられている。



第2図 遺跡位置図



第3図 周辺遺跡分布図

	遺跡名	旧	縄文				弥生			古墳				奈良	平安	中世	近世	備考
			草	早	前	中	後	晩	中	後	前	中	後					
1	植松・地尻遺跡	*			△			○			◎	○	◎	○	○	△	△	本報告
2	地尻・地尻II				△								○	○	△	△	△	安中城関連・館址
3	地尻III												○	◎				集落址
4	西町・谷津														△	△	△	安中城関連
5	安中城													◎	◎			城郭
6	上野尻												△	△	△			中世の大溝（水路）
7	高別当瓦塔出土土地												△	*	*			
8	桃山瓦塔出土土地																	
9	大島田															△		水田址
10	めおと塚古墳												◎					安中14号墳
11	悪途東				△								◎					古墳
12	中宿在家								*					○	◎	○		水田址・館址
13	中宿在家II													○	◎	○		水田址・館址
14	野殿北星敷															◎		館址
15	西殿												○	○	○			集落址
16	堀谷戸												○	◎	◎	△		集落址
17	三本松				○								○	○				中期壺出土
18	山峰							*					○	○				集落址
19	下原・賽神								○	○			○	○		○		集落址

◎：大規模な遺跡（集落跡・古墳等） ○：中規模な遺跡（住居址・牧閑連等）

△：小規模な遺跡（土坑・溝等） *：遺物が出土した遺跡

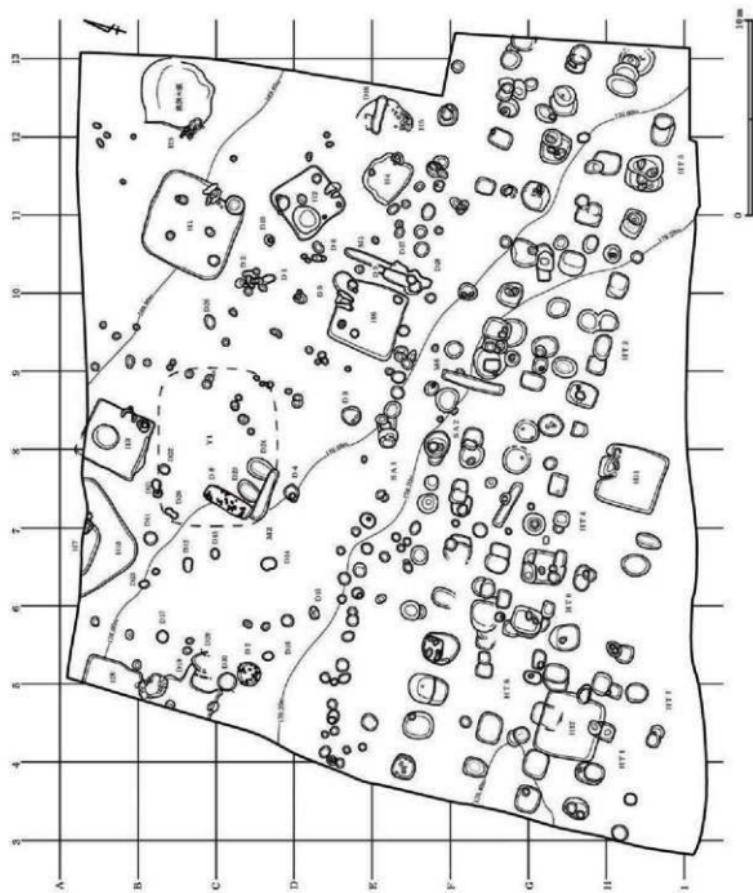
第1表 遺跡一覧表

IV 層序

植松・地尻遺跡の基本層位は、第4図のとおりである。浅間A軽石（1783年:As-A）と浅間B軽石（1108年:As-B）の純層は部分的に観察された。縄文時代の遺構と遺物はIV層、弥生時代以降の遺構と遺物はIII層から検出された。



第4図 基本層序柱状図



第5図 植松・地尻遺跡全体図

V 遺構と遺物

1 概要

植松・地尻遺跡は周知の埋蔵文化財包蔵地（市№336）内に存在する縄文時代から平安時代までの複合遺跡である。発見された主な遺構は縄文時代中期の土坑、弥生時代中期後半の住居址、古墳時代後期の住居址、古代（古墳時代終末～平安時代）の区画施設をもつ大形掘立柱建物址、住居址等である。本遺跡の中心となるのは古墳時代と古代の遺構であり、特に古代の遺構はその性格から古代「碓氷郡」に関係する官衙の性格をもつ施設として注目される。

2 縄文時代の遺構と遺物

縄文時代の遺構（第28図）は土坑1基（D-29号土坑）を検出した。

縄文時代の遺物（第7図・第8図）は、遺構外から縄文土器、有舌尖頭器、打製石斧、剥片等が出土した。遺物は調査区南西に集中があり、他時期の住居址覆土中にも混入が認められた。土器は加曾利E3式を主体とする。

有舌尖頭器（第8図18）確認調査によってⅢ層から出土した。頁岩製で直接打撃及び押圧剥離調整によって両面加工が施されている。先端を一部欠く。基部は返しが明瞭ではなく、凸基状である。草創期の所産と考えられる。

打製石斧（第8図20）H-6号住居址覆土から出土した。大形礎から横長剥片を剥離し、裏面及び表面を直接打撃によって整形している。調整の具合から打製石斧の未成品とも考えられるが、弥生時代の大形打製石斧の可能性も考えられる。

3 弥生時代の遺構と遺物

1. 遺構

Y-1号住居址（第6図）

調査区北側で住居址1軒を検出した。C-7グリッド周辺で遺物が集中する範囲を確認したため、住居址として認識した。平面プランは不明瞭であるが、梢円形であったと推定される。大きさは8.1m×6.1mと推定される。柱穴は不明だが、床面にはビットが認められる。炉は不明である。住居址東側で遺物の集中が認められた。

2. 遺物

住居址と遺構外から中期後半の良好な土器群が検出された。

Y-1号住居址出土の土器（第7図）壺、甕、高杯が出土した。これらは竜見町式期の特徴を示すものである。3は壺で、口縁部、頸部を残存する。口縁部は「く」の字状に強く外反しながら立ち上がる

器形を呈している。調整は口唇部にヨコナデ、口縁部から頸部にかけては刷毛目を残す。文様は頸部に3条の沈線を施す。4は甕で、胴部の一部を欠損する。文様としては口唇部に繩文を施し、頸部に3本を単位とする櫛描文を施す。調整は口縁部に刷毛目、胴部に条痕を残し、底部に指頭圧痕を残す。内面には口縁部はヨコナデ、胴部には刷毛目、底部には範磨きを残す。5は高坏で、坏部と脚部の接合部には段を有する。表面と坏部の内面には赤色塗彩を施す。調整は外表面及び坏部内面は範磨き、脚部には刷毛目を残す。6は壺の口縁部の破片である。口唇部、口縁部に繩文を施し、口縁端部に沈線波状文を施す。調整はヨコナデを残す。7は壺の頸部で繩文を地文とし、沈線を施す。8は壺の頸部で4本の平行沈線がある。9は壺の頸部で繩文を施す。調整は器面は刷毛目を残し、内面はヨコナデを残す。10は甕の胴部で条痕文を施す。調整は刷毛目を残す。11は甕の胴部で条痕文を施す。調整は器面に刷毛目を残し、内面は範磨きを残す。12は甕の胴部で、調整は刷毛目を残す。

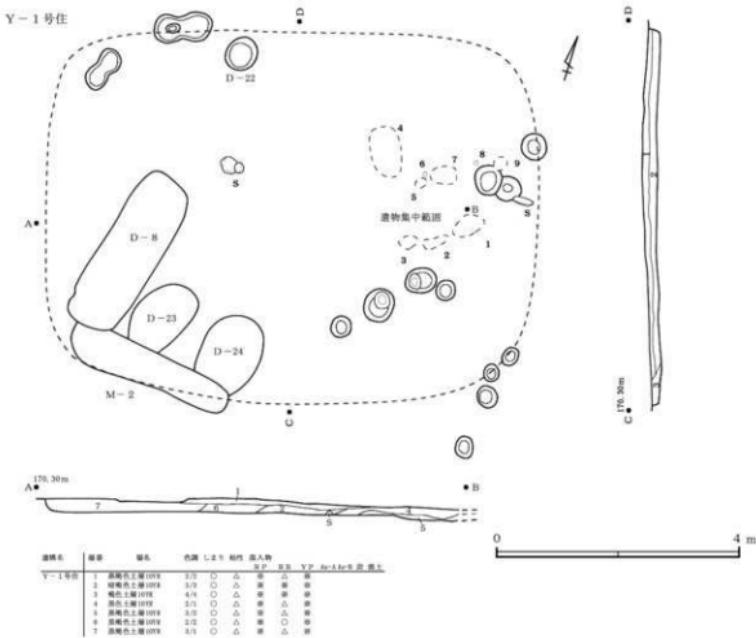
遺構外出土の土器（第8図）1は甕の口縁部から胴部にかけての被片で、文様は頸部に4本を単位とする櫛描廉状文（左回り）を施す。調整は口縁部にヨコナデ、胴部に横刷毛、条痕文を残す。内面は口縁部にヨコナデ、胴部に刷毛目を残す。2は壺の口縁部で、文様は口縁端部に繩文を充填したあと、2条の波状文を施す。調整は器面・内面に横ナデを残す。3は鉢の口縁部で、器面・内面とも赤色塗彩を施す。調整は器面にヨコナデ、内面にヘラミガキを残す。4は壺の口縁部で、文様は摩消繩文で充填し、2条の波状文を施す。調整は器面はヨコナデ、内面はヘラミガキを残す。5は壺の口縁部で、文様は2条の沈線文を施す。

調整は器面はヨコナデ、内面はヘラミガキを残す。6は壺の口縁部から頸部で、文様は口縁部に2条の波状文、頸部に1条の沈線を施す。調整は器面・内面にヨコナデを残す。7は甕の口縁部から頸部で、文様は口縁端部に刻目、頸部に5本を単位とする櫛描廉状文（右回り）を施す。調整は口縁端部下にヨコナデ、内面はヘラミガキを残す。8は甕の口縁部で、文様は口縁端部に刻み目を施す。調整は口縁端部下にヨコナデがあり、それより下には刷毛目を残す。内面はヘラミガキを残す。9は壺の頸部で、繩文で充填した後、3条の沈線を施している。調整は内面にヨコナデを残す。10は壺の胴部で、文様は方形沈線を施す。調整は内面にヘラミガキを残す。11は壺の胴部で、文様は繩文を施した後に直線と波状の沈線を引いている。調整は内面にヨコナデを残す。12は甕の胴部で、条痕文を施す。調整は内面にヨコナデを残す。13は甕の胴部で、条痕文を施す。調整は内面に刷毛目を残す。14は壺の胴部で、条痕文を施す。調整は内面に刷毛目を残す。15は壺の胴部で、条痕文を施す。調整は内面にヨコナデを残す。16は壺の胴部から底部で、調整は器面・内面とも刷毛目を残す。17は甕の底部で、調整は器面はヨコナデ、内面は刷毛目を残す。炭化物が付着している。

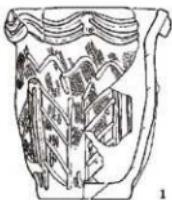
これらの土器は竜見町式期に相当する。

弥生時代の石器（第8図）

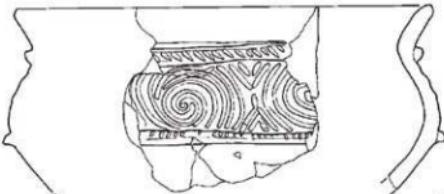
磨製石鎌（19）トレンチから磨製石鎌が1点出土した。基部が欠損している。全面研磨され、穿孔が認められる。石材は珪質準片岩である。



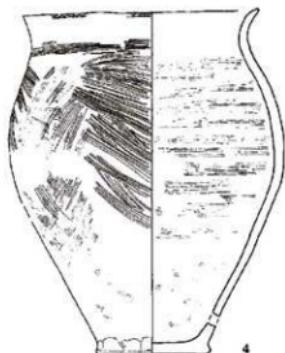
第6図 Y-1号住居址実測図



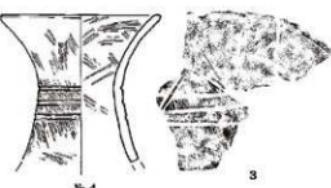
D-29



トレンチ2



No.2



No.4



No.4



No.9



No.9



No.4



No.9



No.5



No.5

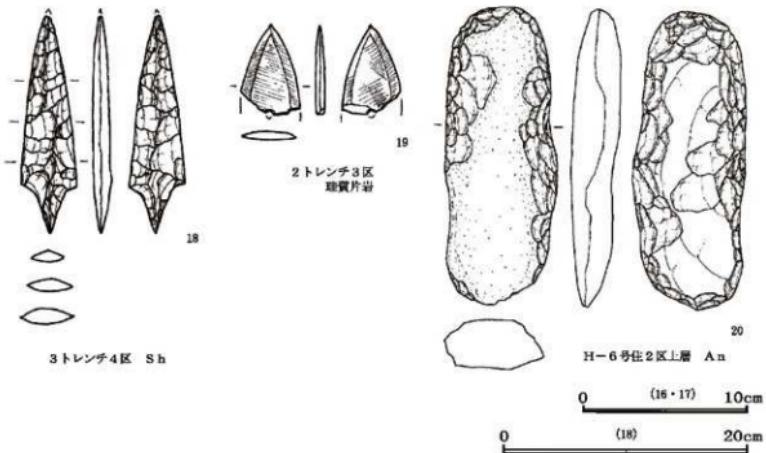
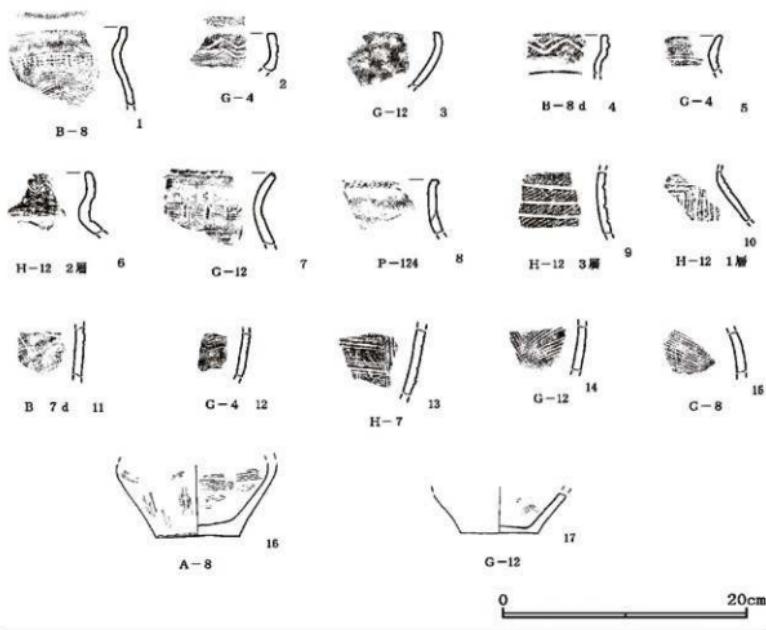


No.5

Y-1号住

0 20cm

第13図 H-9号・H-11号・H-12号住居址実測図



第14図 古代建物群配置図

4 古墳時代～奈良・平安時代の遺構と遺物

1. 遺構

(1) 住居址 (第9図～第13図)

古墳時代

住居址：7軒 (H-1号、2号、3号、4号、6号、(7号)、10号住居址)

平面形：平面正方形が主体である。規模は3～4mでやや小形のものが多い。柱穴が存在するものと存在しないものもある。主軸はほぼ東方向である。

竈：住居址東に設置されるもの4軒、北に設置されるものが1軒である。竈の構造は粘土で袖が造られている。全ての竈は壊されていた。竈出土の遺物は破片が多く、焼される際に混入したものと考えられる。

貯藏穴：確認できたものでは竈右脇2軒、左脇が1軒、両脇1軒である。

床下土坑：H-2号住居址で2基、H-3号住居址で1基確認された。平面円形で深さ約1mである。

遺物出土状況：住居址覆土中から大量の土師器と少量の須恵器が出土した。主な器種は壺、小形甕、甕、瓶等である。覆土の土器は小破片がほとんどであり、完形個体は主に床面で確認された。

H-1号住居址では住居址西壁際で編み物石が多数出土した。

H-2号住居址では竈周辺で完形の甕が3点確認された。

H-6号住居址では住居址覆土、床面及び竈から、完形個体を含む大量の土師器（壺、甕）が出土した。また、覆土には大量の大形甕が廃棄されていた。

古墳時代終末～奈良時代初頭

住居址：1軒 (H-11号住居址)

平面正方形で、一辺が3.2mである。住居址北に竈が設置されている。柱穴は確認されなかった。竈は壁内側に粘土で造られている。竈右脇に貯藏穴が存在する。住居址は人為的にロームを大量に含む土（4層）で埋め戻されたと考えられ、他の住居址（黒色土）とは異なる土層であった。覆土下部から、土師器、須恵器、編み物石、礫が出土したが、出土量は少なかった。なお、4層上面で摘みが擬宝珠形をした須恵器蓋が出土した。土層の状況、出土遺物から判断して、短期間に埋め戻されたと考えられる。住居址周辺の地面が住居址覆土と類似するローム混じりの土で整地されていることが確認されていることから、古代の建物群に先行する住居址と思われる。

平安時代

住居址：4軒 (H-5号、8号、9号、12号住居址)

H-12号住居址は、平面正方形で一辺が3.4mである。住居址東に竈が設置されている。竈は地山を掘り窪めたもので、簡単な作りである。柱穴及び貯藏穴は確認されなかった。遺物は破片が多く、須恵器を主体とする。竈内から羽釜片が出土した。この住居址はHT-1号掘立柱建物址の柱穴を壊して作られている。H-5号、8号、9号は竈のみの検出であり、範囲及び規模は不明である。

住居名	平面形状	規模	転輪	床	主軸方向	上坑 竈	竈脇 床下	主柱穴	位置	構造	天井	支脚	備考	
H-1 中形正方形	4.6 4.6 0.2	無	N-97°-E	右	不明	東／中央	A							
H-2 小形正方形	3 2.8 0.2	無	N-127°-E	左	2	無	南東／南寄り	A						I 縄文陶石集中
H-3 小形正方形	3.2 3.3 0.3	無	N-98°-E	右	1	無	東／南寄り	A						I 縄文3号遺跡
H-4 小形正方形	2.2 2.1 0.2	無	N-110°-E	無		無	南東／中央	A						I 縄文に台石
H-5	—	—	—	不明	—	不明	南東	C						I 縄文のみ
H-6 小形正方形	3.5 3.4 0.4	無	N-4°-E	左右	無	北／中央	A							I 土塀根(旅根の上に囲?)遺物大財出土
H-7 小形	(2.8) (2.0)	0.7	N-95°-E	無		不明	東	A						(1) H-7住 < H-10住
H-8 大形長方形	(1.4) 6.8 0.5	無	N-85°-E	無		不明	東／中央	C						IV
H-9	—	—	—	無	—	不明	南東	C						IV 縄文のみ
H-10 中形長方形	(5.0) (4.0)	0.5	不明	—		不明	不明	—						I H-7住と重複
H-11 小形正方形	3.2 3.2 0.6	無	N-1°-E	右	無	北／中央	A							II 埋め戻し生層
H-12 小形正方形	3.4 3.2 0.3	無	N-88°-E	無	無	東／中央	E							V P101・102 < H-12住

凡例

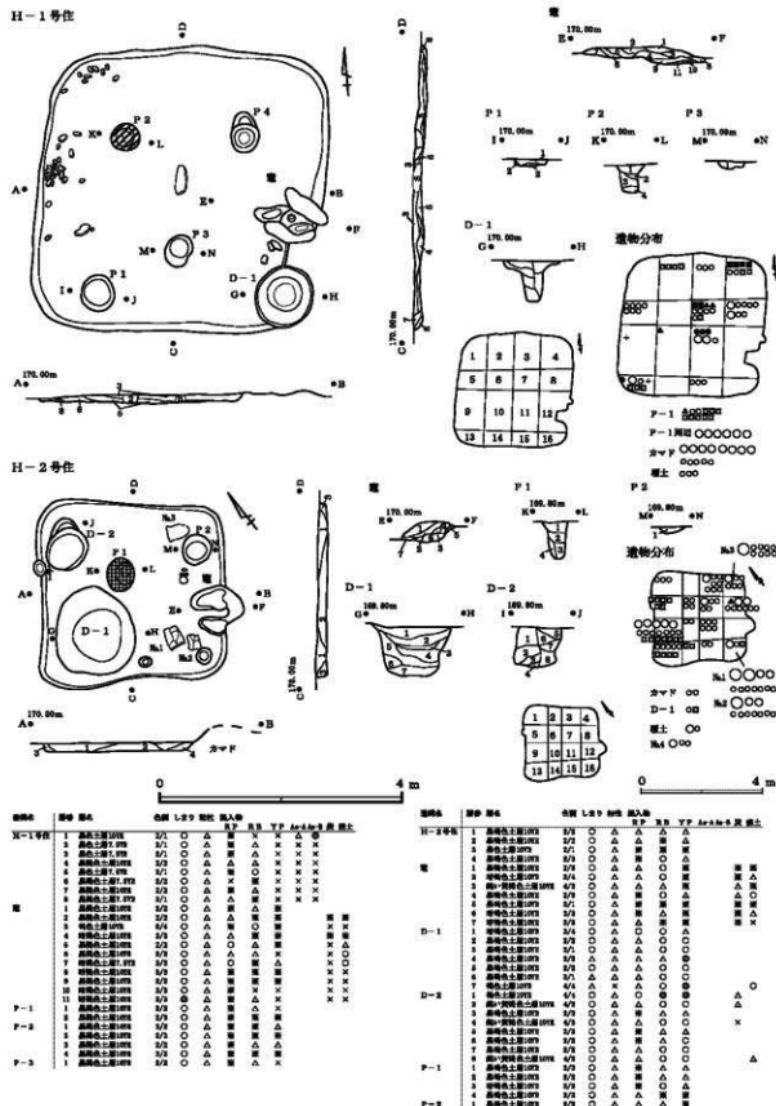
平面状態 大形：6m以上 中形：4～6m 小形：4m以下

竈構造

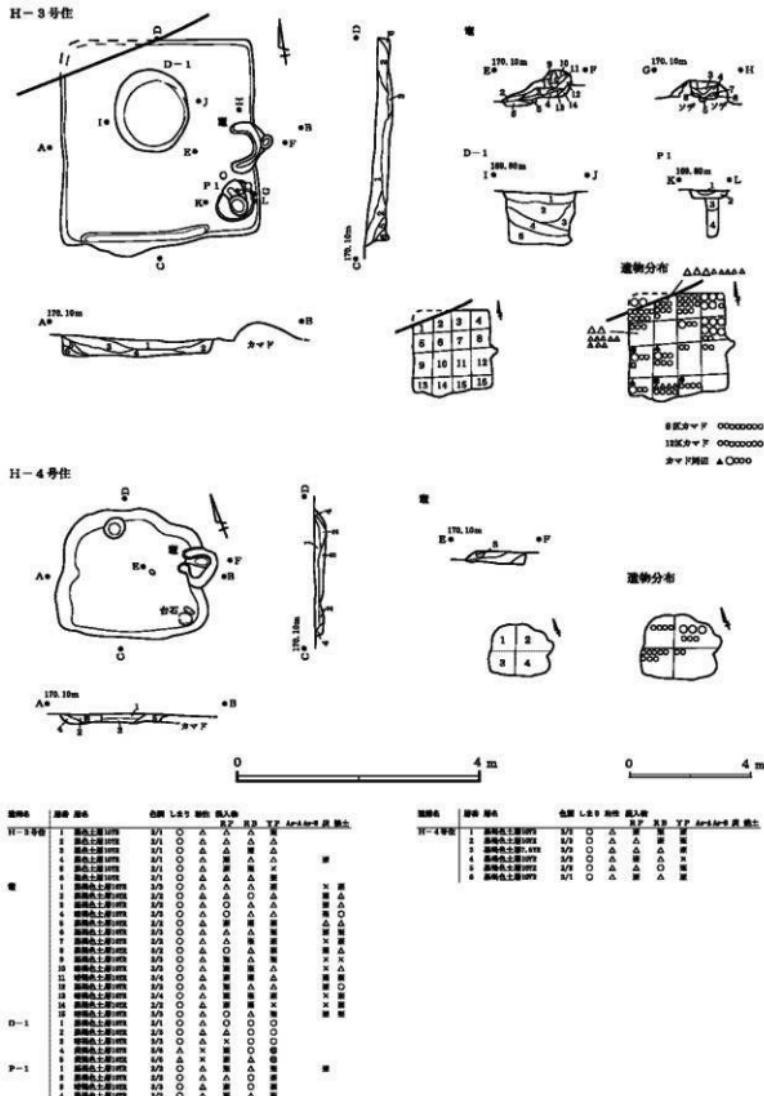
A：ローム+黒色土 B：ローム+黒色土+袖芯河川礫 C：ローム+黒色土+河川礫

D：地山削り出し+ローム+袖芯河川礫 E：地山削り出し+ローム+袖芯土

第2表 住居址観察表

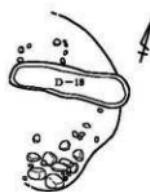


第9図 H-1号・H-2号住居址実測図

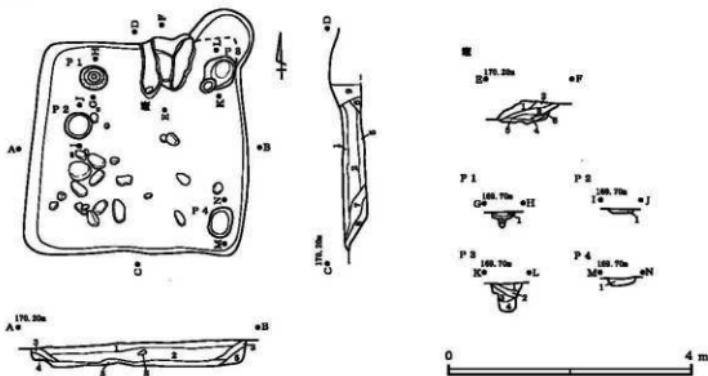


第10図 H-3号・H-4号住居址実測図

H-5号住

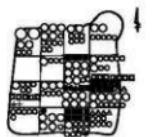
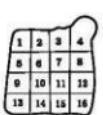


H-6号倅



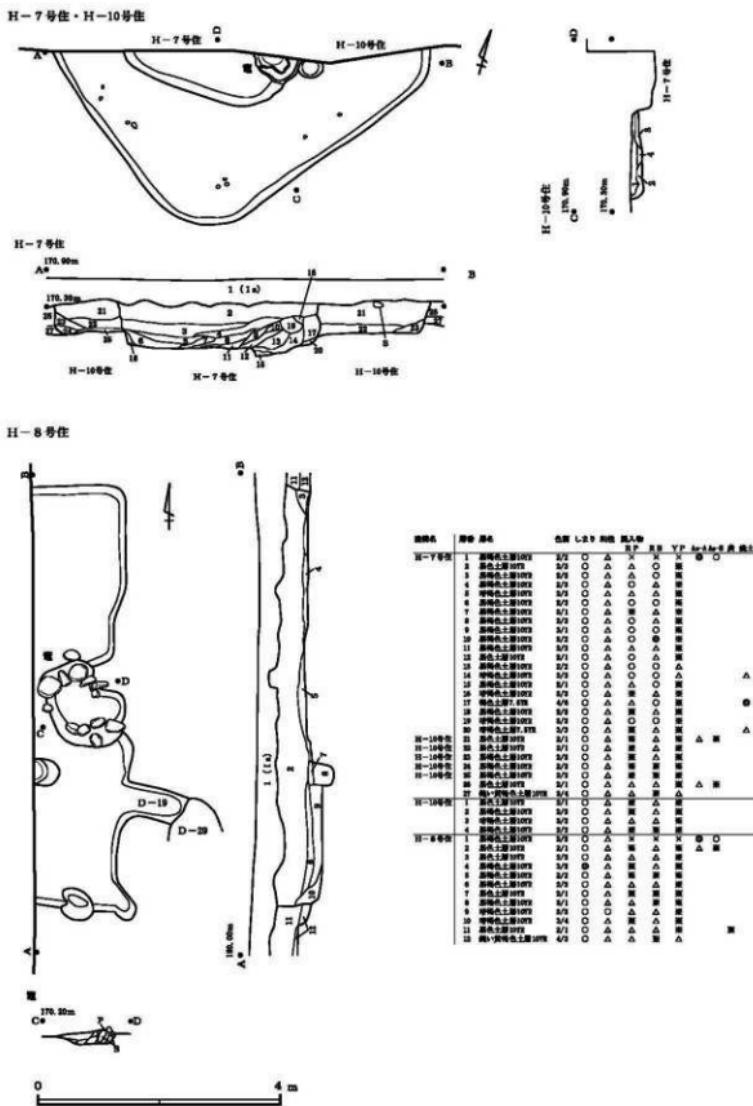
植物分布

品種名	品種番号	生长期										生长期	生长期
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10		
H-4等級	1	高麗菜上部葉	5/1	○	△	×	△	△	△	△	△	△	△
	2	高麗菜上部葉	5/1	○	△	×	△	△	△	△	△	△	△
	3	高麗菜上部葉	5/1	○	△	×	△	△	△	△	△	△	△
	4	高麗菜上部葉	5/1	○	△	×	△	△	△	△	△	△	△
	5	高麗菜上部葉	5/1	○	△	×	△	△	△	△	△	△	△
	6	高麗菜上部葉	5/1	○	△	×	△	△	△	△	△	△	△
	7	高麗菜上部葉	5/1	○	△	×	△	△	△	△	△	△	△
	8	高麗菜上部葉	5/1	○	△	×	△	△	△	△	△	△	△
	9	高麗菜上部葉	5/1	○	△	×	△	△	△	△	△	△	△
	10	高麗菜上部葉	5/1	○	△	×	△	△	△	△	△	△	△
H	1	高麗菜上部葉	5/1	○	△	×	△	△	△	△	△	△	△
	2	高麗菜上部葉	5/1	○	△	×	△	△	△	△	△	△	△
	3	高麗菜上部葉	5/1	○	△	×	△	△	△	△	△	△	△
	4	高麗菜上部葉	5/1	○	△	×	△	△	△	△	△	△	△
	5	高麗菜上部葉	5/1	○	△	×	△	△	△	△	△	△	△
P-1	1	高麗菜上部葉	5/1	○	△	×	△	△	△	△	△	△	△
	2	高麗菜上部葉	5/1	○	△	×	△	△	△	△	△	△	△
	3	高麗菜上部葉	5/1	○	△	×	△	△	△	△	△	△	△
	4	高麗菜上部葉	5/1	○	△	×	△	△	△	△	△	△	△
	5	高麗菜上部葉	5/1	○	△	×	△	△	△	△	△	△	△
P-2	1	高麗菜上部葉	5/1	○	△	×	△	△	△	△	△	△	△
	2	高麗菜上部葉	5/1	○	△	×	△	△	△	△	△	△	△
P-3	1	高麗菜上部葉	5/1	○	△	×	△	△	△	△	△	△	△
	2	高麗菜上部葉	5/1	○	△	×	△	△	△	△	△	△	△
P-4	1	高麗菜上部葉	5/1	○	△	×	△	△	△	△	△	△	△
	2	高麗菜上部葉	5/1	○	△	×	△	△	△	△	△	△	△

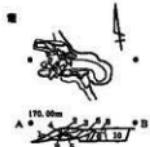
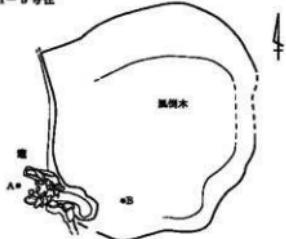


0 4 m

第11図 H-5号・H-6号住居址実測図

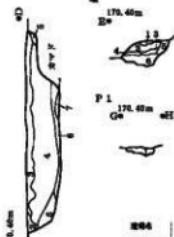
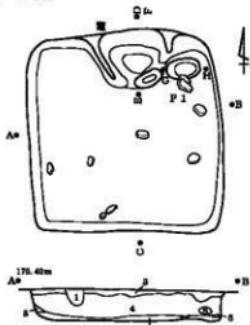


H-9号住



測量点	座標名	高さ	L.S.T	分生	植生	N.P	Y.P	Ar-Ak	根土
11-9号地盤	1 風倒木上地盤	5/3	○	△	○	△	△	△	△
	2 風倒木上地盤	5/3	○	△	○	△	△	△	△
	3 風倒木上地盤	5/3	○	△	○	△	△	△	△
	4 風倒木上地盤	5/3	○	△	○	△	△	△	△
	5 風倒木上地盤	5/3	○	△	○	△	△	△	△
	6 風倒木上地盤	5/3	○	△	○	△	△	△	△
	7 風倒木上地盤	5/3	○	△	○	△	△	△	△
	8 風倒木上地盤	5/3	○	△	○	△	△	△	△
	9 風倒木上地盤	5/3	○	△	○	△	△	△	△
	10 風倒木上地盤	5/3	○	△	○	△	△	△	△

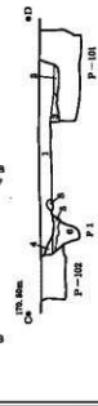
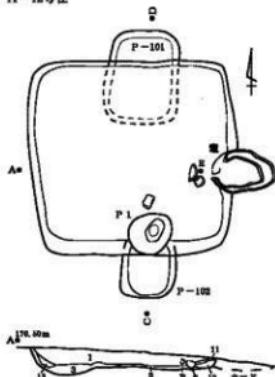
H-11号住



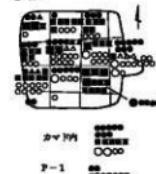
測量点	座標名	高さ	L.S.T	分生	植生	N.P	Y.P	Ar-Ak	根土
11-11号地盤	1 風倒木上地盤	5/3	○	△	○	△	△	△	△
	2 風倒木上地盤	4/4	○	△	○	△	△	△	△
	3 風倒木上地盤	4/4	○	△	○	△	△	△	△
	4 風倒木上地盤	4/4	○	△	○	△	△	△	△
	5 風倒木上地盤	4/4	○	△	○	△	△	△	△
	6 風倒木上地盤	4/4	○	△	○	△	△	△	△
	7 風倒木上地盤	4/4	○	△	○	△	△	△	△
	8 風倒木上地盤	4/4	○	△	○	△	△	△	△
	9 風倒木上地盤	4/4	○	△	○	△	△	△	△
	10 風倒木上地盤	4/4	○	△	○	△	△	△	△
	11 風倒木上地盤	4/4	○	△	○	△	△	△	△
	12 風倒木上地盤	4/4	○	△	○	△	△	△	△
	13 風倒木上地盤	4/4	○	△	○	△	△	△	△
	14 風倒木上地盤	4/4	○	△	○	△	△	△	△
	15 風倒木上地盤	4/4	○	△	○	△	△	△	△
	16 風倒木上地盤	4/4	○	△	○	△	△	△	△



H-12号住



測量点	MP	SD	名前	L.S.T	分生	植生	N.P	Y.P	Ar-Ak	根土
H-12号地盤	1 風倒木上地盤	5/3	○	△	○	△	△	△	△	△
	2 風倒木上地盤	5/3	○	△	○	△	△	△	△	△
	3 風倒木上地盤	5/3	○	△	○	△	△	△	△	△
	4 風倒木上地盤	5/3	○	△	○	△	△	△	△	△
	5 風倒木上地盤	5/3	○	△	○	△	△	△	△	△
	6 風倒木上地盤	5/3	○	△	○	△	△	△	△	△
	7 風倒木上地盤	5/3	○	△	○	△	△	△	△	△
	8 風倒木上地盤	5/3	○	△	○	△	△	△	△	△
	9 風倒木上地盤	5/3	○	△	○	△	△	△	△	△
	10 風倒木上地盤	5/3	○	△	○	△	△	△	△	△
	11 風倒木上地盤	5/3	○	△	○	△	△	△	△	△
	12 風倒木上地盤	5/3	○	△	○	△	△	△	△	△
	13 風倒木上地盤	5/3	○	△	○	△	△	△	△	△
	14 風倒木上地盤	5/3	○	△	○	△	△	△	△	△
	15 風倒木上地盤	5/3	○	△	○	△	△	△	△	△
	16 風倒木上地盤	5/3	○	△	○	△	△	△	△	△



4 m

0 4 m

第13図 H-9号・H-11号・H-12号住居址実測図

(2) 古代の建物群（第14図～第27図）

調査区南側において、多数の大形土坑やピットが発見され、その配列から掘立柱建物群7棟と柱穴列2カ所が確認された。柱穴は、古墳時代の住居址と柱穴同士の重複が著しく、現地での確認は困難であり、柱穴が整然と並ぶことは確認できたが、柱穴の配列による掘立柱建物址の特定はできず、調査終了後、建物址の特定は柱穴の配列、土層堆積、柱間の距離、主軸等の状況から、図面上で復元した。

側柱で底がつくものは2棟、総柱2棟、側柱のみ3棟である。柱穴は楕円形を呈し、直徑が約1mにも及び通常の柱穴に比べ大形である。大形の柱穴は掘方部分まで検出したもので、土層堆積状態から判断して、一度度掘った穴をローム混じりの土で硬めながら埋め戻し、その後、柱穴を掘ったと思われ、実際の柱穴の大きさは20～30cm程度と推定される。建物址は東西方向に沿って、軸線上に並び、主軸がほぼ真北方向である。

掘立柱建物址（第15図～第24図）

HT-1号掘立柱建物址（第15図・第16図）

梁行3間、桁行5間以上で南側に底がつく大形側柱建物である。建物の主軸はほぼ南北方向である。確認状況から、建物は西へ延びると推定される。この建物の下には古墳時代後期の住居址が数軒存在（未調査）したため、住居址覆土と重複する柱穴の検出状態は困難な状態であり、図面上で建物を推定した。

身舎の柱穴は、底の柱穴に比べて大形である。柱痕を残す柱穴では、柱を建てる際に及び柱の抜き取りも認められまた、柱穴の底面に礫が集中するもの（P-69）も認められた。柱穴からは古墳時代後期の遺物の混入が多く認められたが、出土遺物に中には古墳時代終末から奈良時代にかけての蓋（摘みが擬宝珠形）、暗文土器が含まれていた。なお、出土遺物の時期や柱穴の検出状況から少なくとも奈良時代以降（8世紀代）の所産と考えられるが、建物の柱穴（P-101・102）の一部が、H-12号住居址（平安：10世紀代）によって壊されていることから、この建物の存続時期の下限はこの時期と考えられる。

HT-2号掘立柱建物址（第17図・第18図）

梁行2間、桁行3間で大形総柱建物である。建物の主軸はほぼ南北方向である。南北方向の柱間の間隔がやや広い。この建物の下には古墳時代の住居址が数軒存在する。建物を構成する柱穴の周辺にもピットが多数検出されていることから、他に建物が存在していた可能性が高い。柱穴からは古墳時代後期の遺物の混入が多く認められたが、出土遺物の中には奈良時代（8世紀代）の蓋、环、盤、皿等が含まれていた。本建物の時期は奈良時代以降の所産と考えられる。

HT-3号掘立柱建物址（第19図・第20図・第22図）

梁行3間、桁行3間で大形総柱建物である。柱穴の配列から、調査区東へ延びる可能性も考えられるが、ここではこの規模として認識した。この建物の下には古墳時代後期の住居址が数軒存在したため、この建物の周辺にも多数のピットが確認されていることから、他に建物が存在していた可能性が高い。柱穴から古墳時代後期の遺物の混入が多く認められたが、出土遺物の中には平安時代の遺物が含まれていた。本建物の時期は平安時代の所産と考えられる。

HT-4号掘立柱建物址（第21図・第22図）

梁行2間、桁行3間で底付きの側柱建物である。柱穴の間隔が不揃いで、柱穴の配置にも課題があるため、建物としては検討を要する。この建物の下からは古墳時代の住居址が数軒存在する。柱穴からは古墳時代後期の遺物の混入が多く認められたが、この建物に関連する遺物は認められなかった。

HT-5号掘立柱建物址（第23図）

梁行1間、桁行2間である。HT-1号・HT-6号掘立柱建物址と重複する。柱穴は浅く、平面楕円形である。

HT-6号掘立柱建物址（第23図）

梁行1間、桁行1間である。HT-1号・HT-5号掘立柱建物址と重複する。柱穴は浅く、平面隅丸長方形である。

HT-7号掘立柱建物址（第24図）

柱穴が2基発見された。一方が柱間1間であると推定される。建物として認識するには状況証拠に乏しいが、土坑は柱穴の形態をもつこと、対になるハの字に配置される土坑があることにより、建物の存在を仮定した。柱穴（P-81）から「評」と刻書された須恵器蓋が出土した。

柱穴列（第25図～第27図）

SA-1号柱穴列（第25図・第26図）

建物群の北側では、一列に並ぶ柱穴が検出された。確認したのは約35mである。ほぼ東西方向に延びている。確認状況から調査区外へ伸びているものと推定される。柱穴は平面円形で大きさに均一性が認められる。柱の間隔がほぼ均一であることから建物群を区画する柵あるいは塀といった構造物であったと推定される。一部、柱の間隔が広い部分も確認できたことから、出入り口が存在し、門等の可能性が考えられる。

SA-2号柱穴列（第27図）

SA-1号柱穴列の南側に並行して検出された。ピットの大きさもSA-1号柱穴列より大きく、間隔も広い。SA-1号柱穴列と並行することから、同時期あるいは回廊の一部であった可能性も考えられる。

（3）土坑（第28図・第29図）

掘立柱建物址の柱穴とされる大形土坑とは区別される土坑が多数検出された。平面円形と長方形に分けられる。時期不明のものがほとんどだが、覆土の状況から古代あるいは近世以降の所産と考えられる。

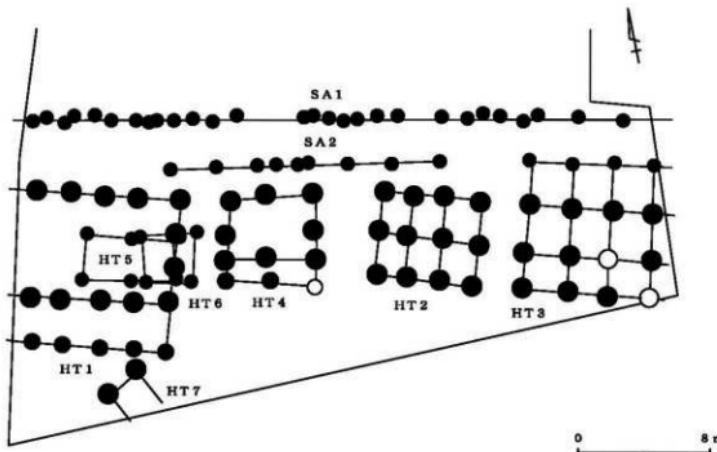
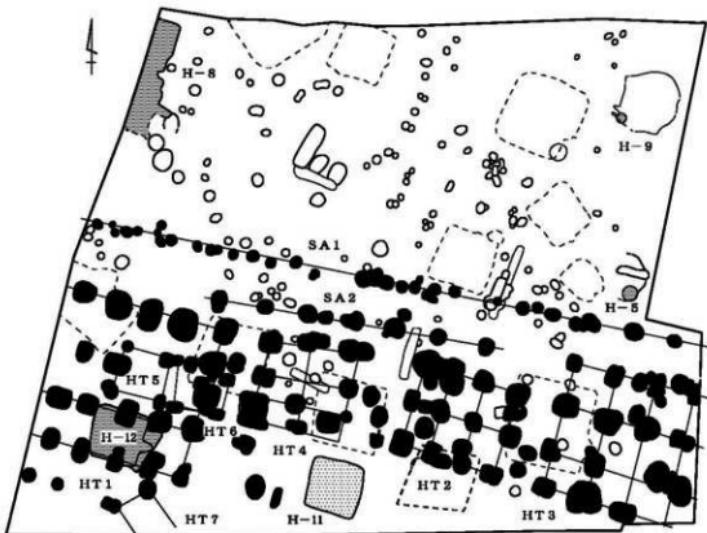
（4）溝

調査区全域で耕作溝が確認された。土坑の中にも一部含まれている。覆土に浅間A輕石を大量に含む土坑も存在する。中世あるいは近世以降の所産と考えられる。

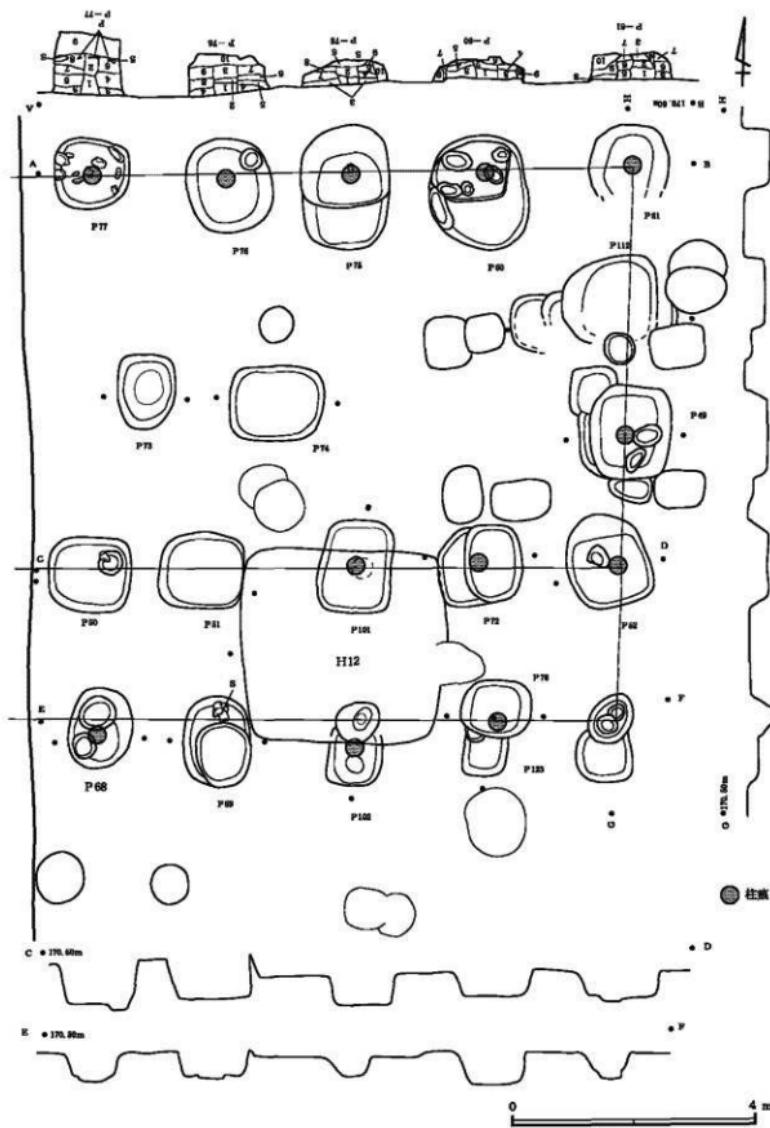
(单位: m)

遺構名	柱行	梁行	規模 (芯芯·m)		梁行柱間	梁行柱間	柱穴形態	柱穴規模	柱穴深さ	備考
			東西	南北						
HT-1	4間以上	3間(底含4間)	10.000以上	9.12(底含)	E2.4-2.3-2.1-2.3W	N2.2-2.2-2-2-底2.6S	圓孔方形	長軸1.2~1.9 短軸0.8~1.4	0.3~0.7	底付柱建物
HT-2	3間	2間	6.28	5.04	W1.9-2.0-2.2E	N2.4-2.5S	圓孔方形	長軸1.2~1.5 短軸0.9~1.2	0.3~0.8	側柱建物
HT-3	3間以上	3間	7.90	7.64	W2.6-2.5-2.6E	N2.7-2.9-2.4S	圓孔方形	長軸1.0~1.6 短軸0.8~1.2	0.4~0.8	側柱建物
HT-4	2間	2間(底含3間)	5.64	4.21	W2.8-2.5E	N2.5-1.8-1.3S	圓孔方形	長軸0.8~1.2 短軸0.7~1.1	0.5~0.8	底付側柱建物
HT-5	2間	1間	5.84	2.66	W2.8-3.1E	—	円形方形	長軸0.5~1.0 短軸0.5~0.7	0.2~0.3	側柱建物
HT-6	1間	—	2.90	2.90	—	—	圓孔方形・円形	長軸0.8~1.0 短軸0.5~0.6	0.3~0.4	側柱建物
HT-7	不明	1間以上	—	—	—	2.2	圓孔方形	長軸1.0~1.2 短軸0.6~1.0	0.5	剖面土器出土

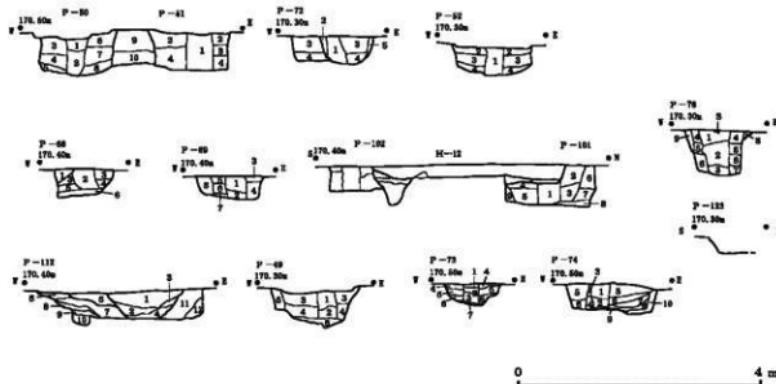
第3表 柱立柱建物址観察表



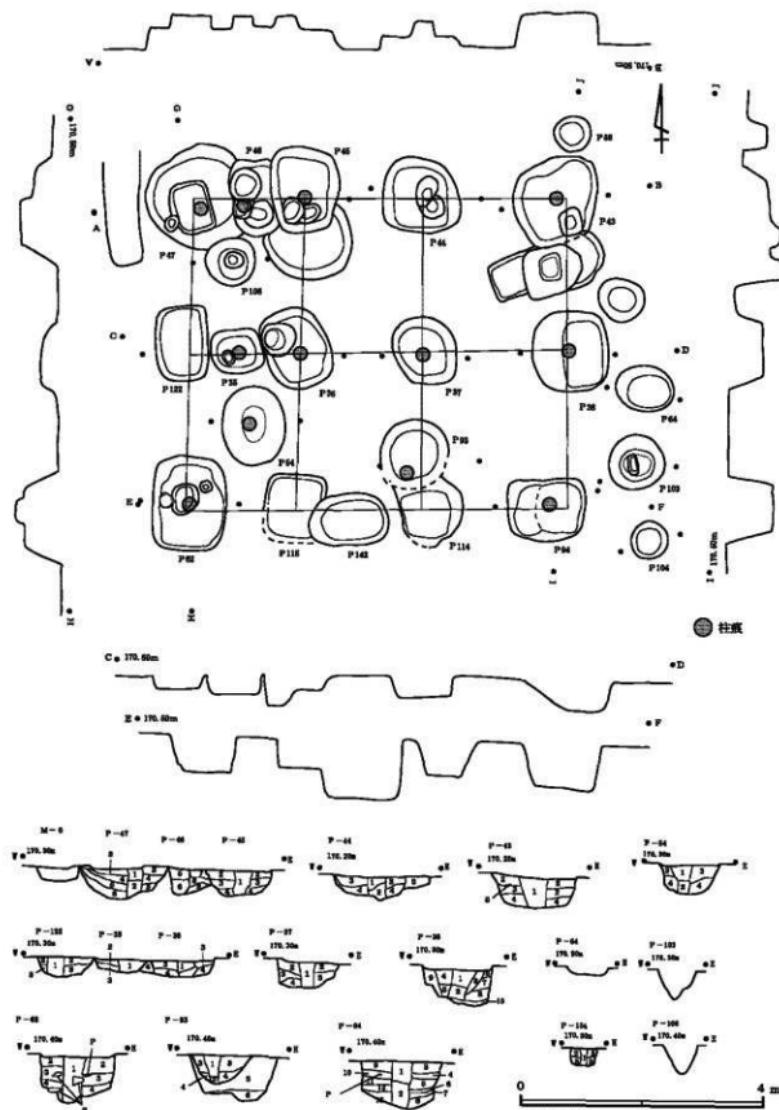
第14図 古代建物群配置図



第15図 HT-1号掘立柱建物址実測図(1)

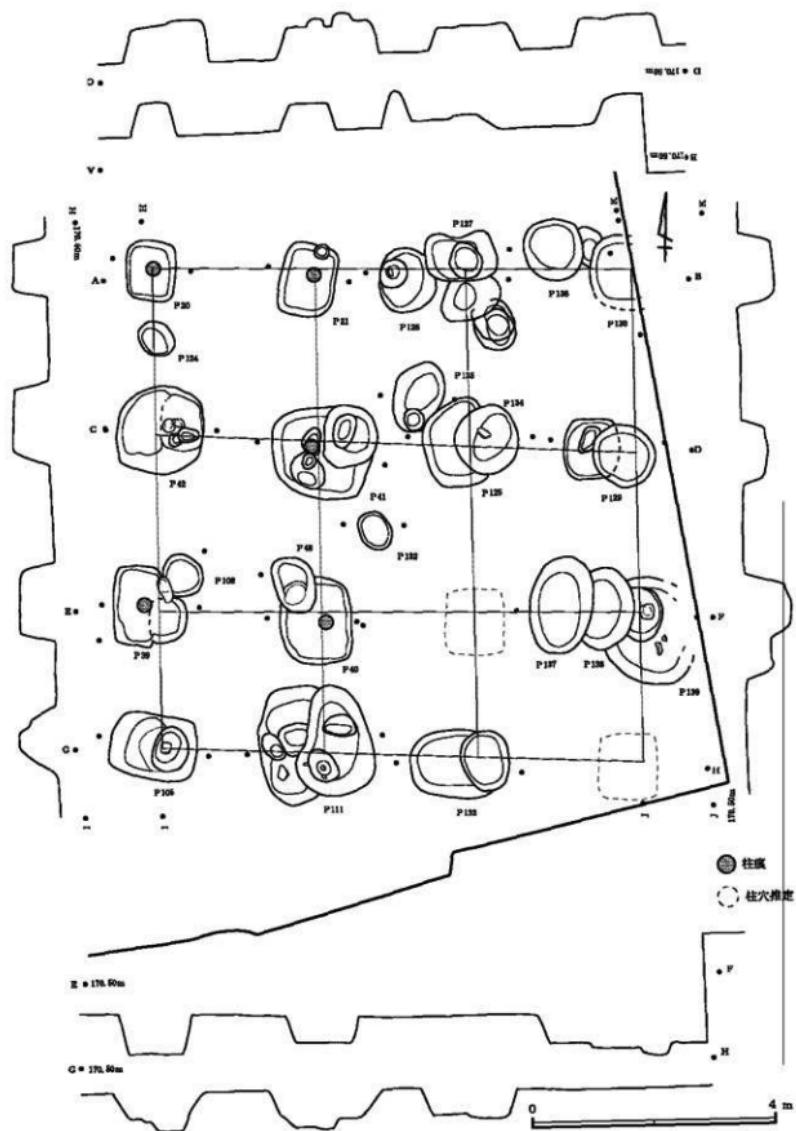


第16圖 HT-1号掘立柱建筑物址実測圖(2)

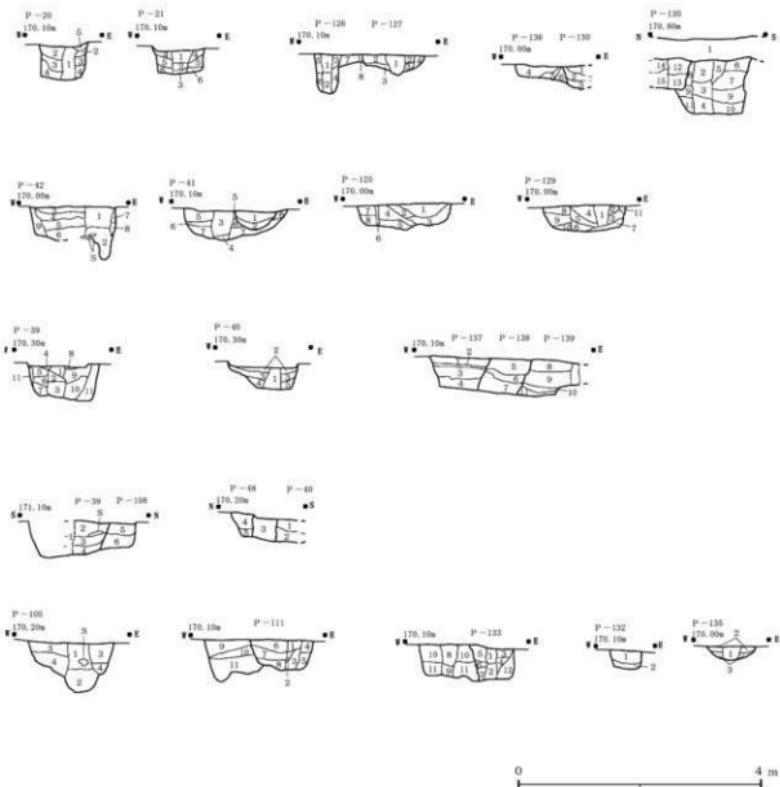


第17図 HT-2号掘立柱建物址実測図(1)

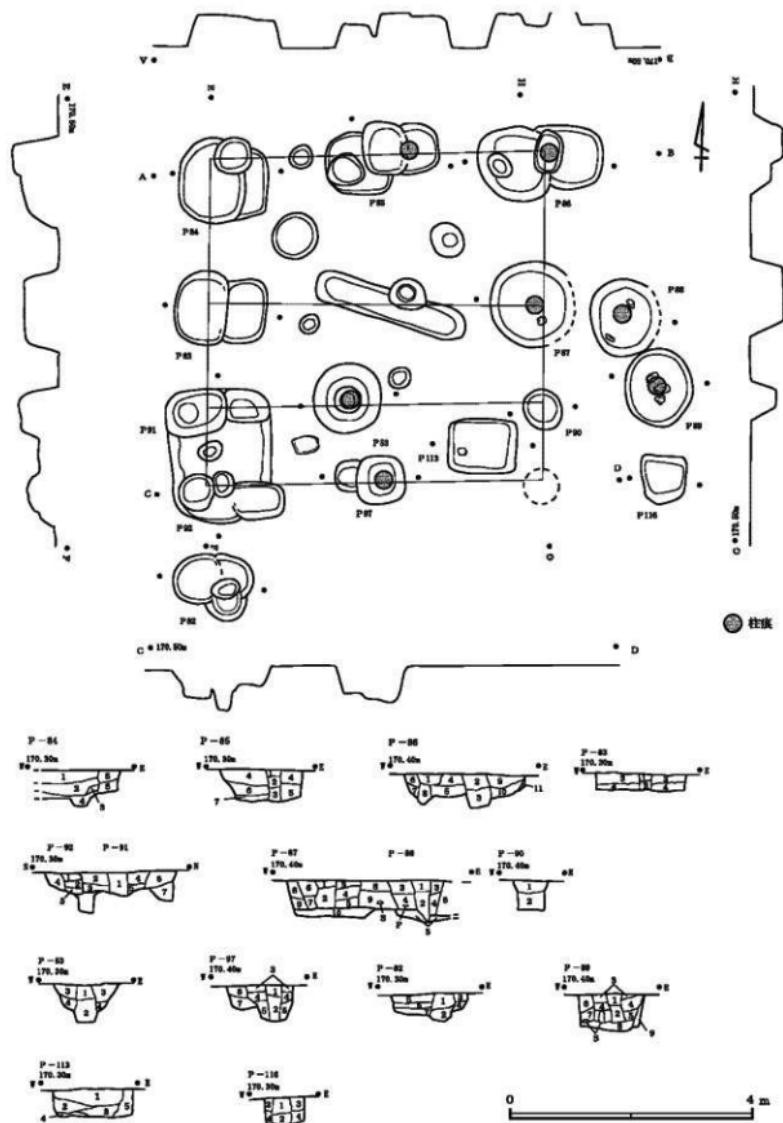
第18図 HT-2号掘立柱建物址実測図(2)



第19図 HT-3号掘立柱建物址実測図(1)

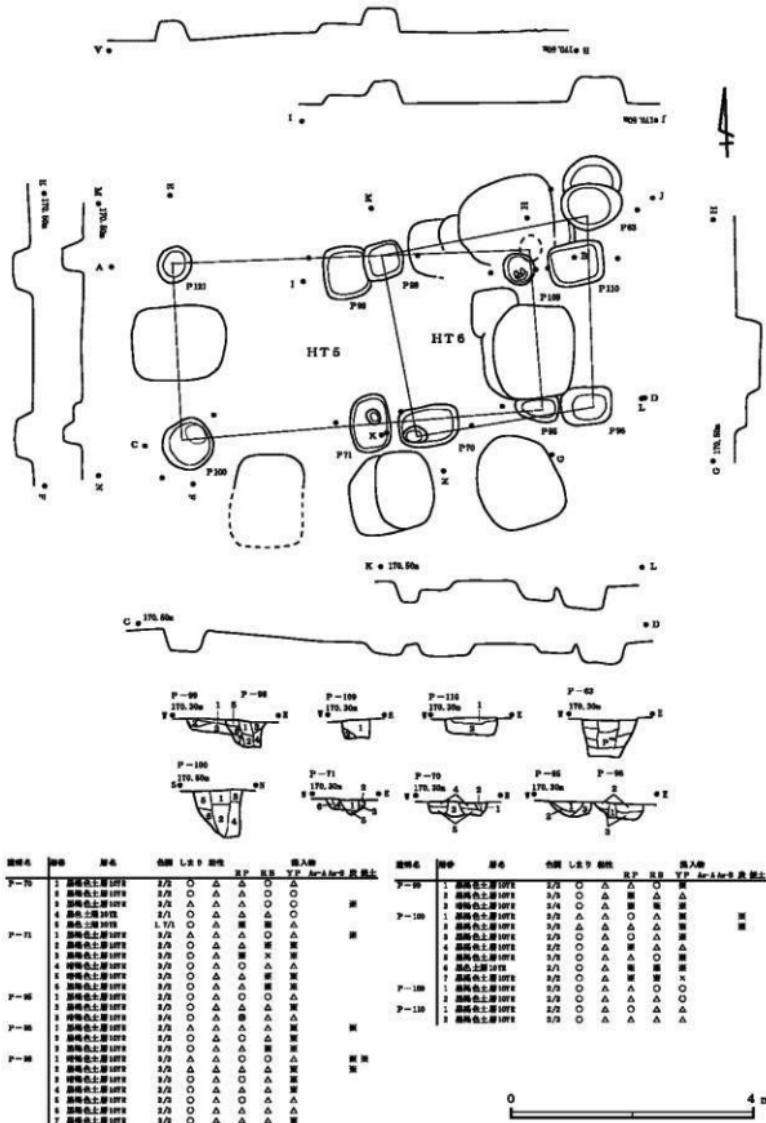


第20図 HT-3号掘立柱建物址実測図(2)

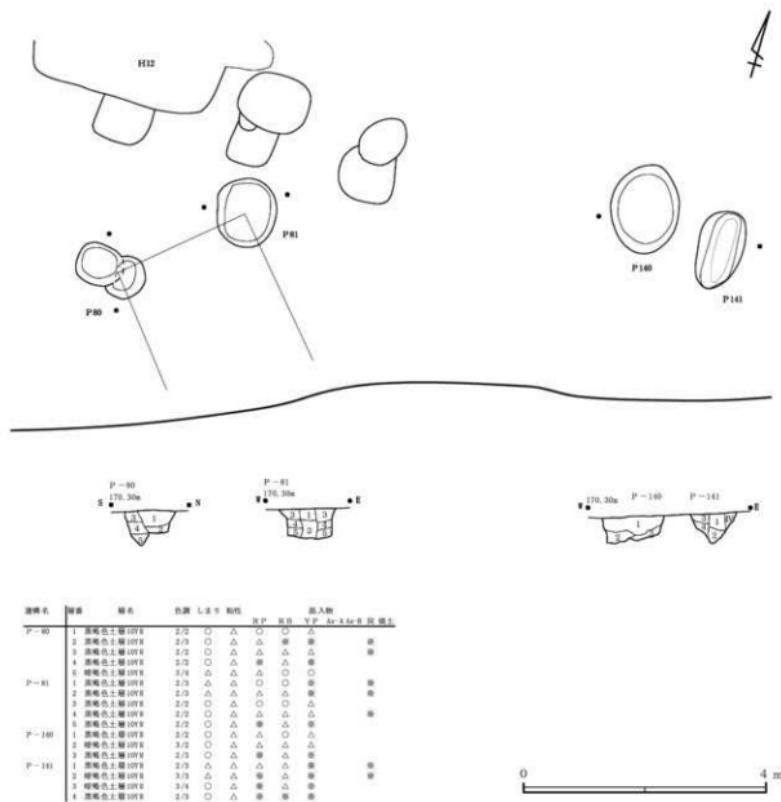


第21図 HT-4号掘立柱建物址実測図

第22図 HT-3号・HT-4号掘立柱建物址土層説明

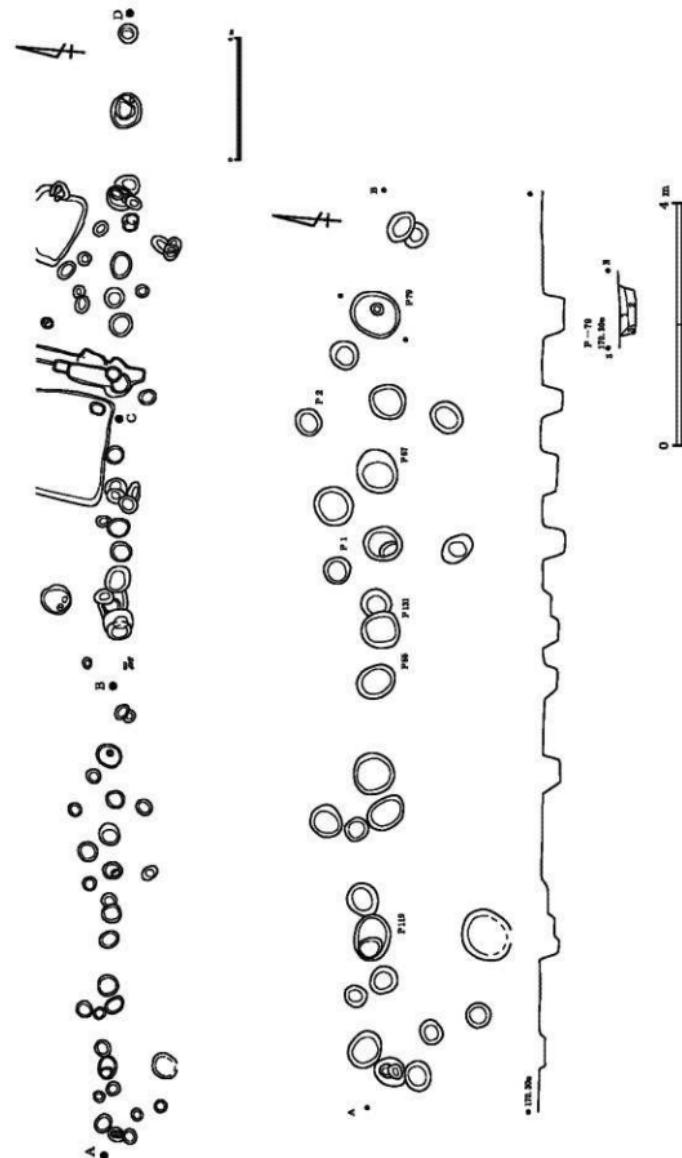


第23図 HT-5号・HT-6号掘立柱建物址実測図

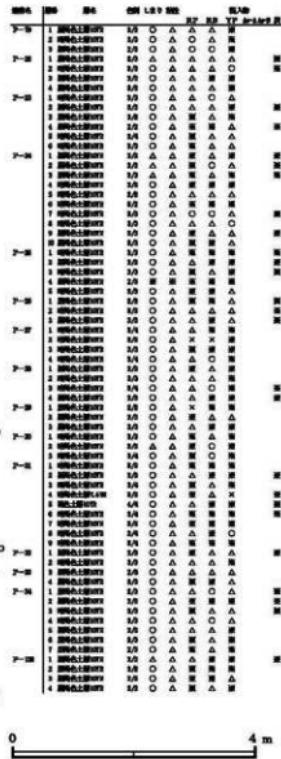
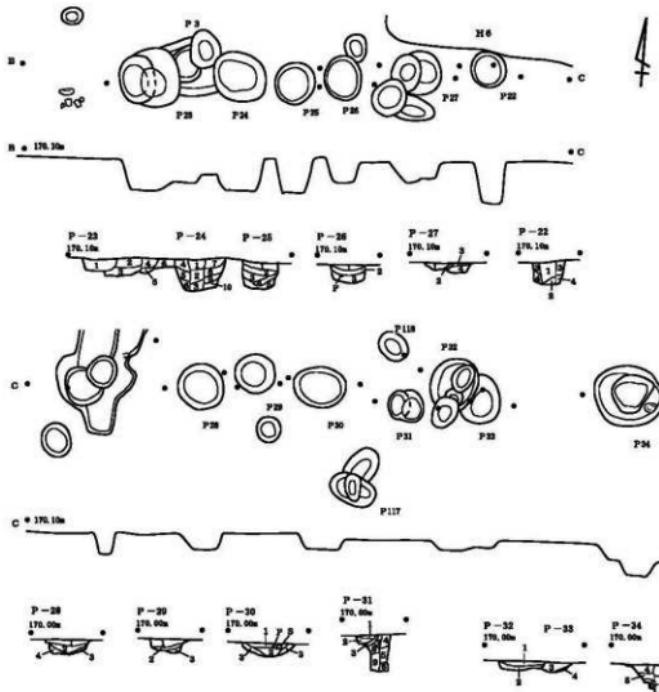


第24図 HT-7号掘立柱建物址実測図

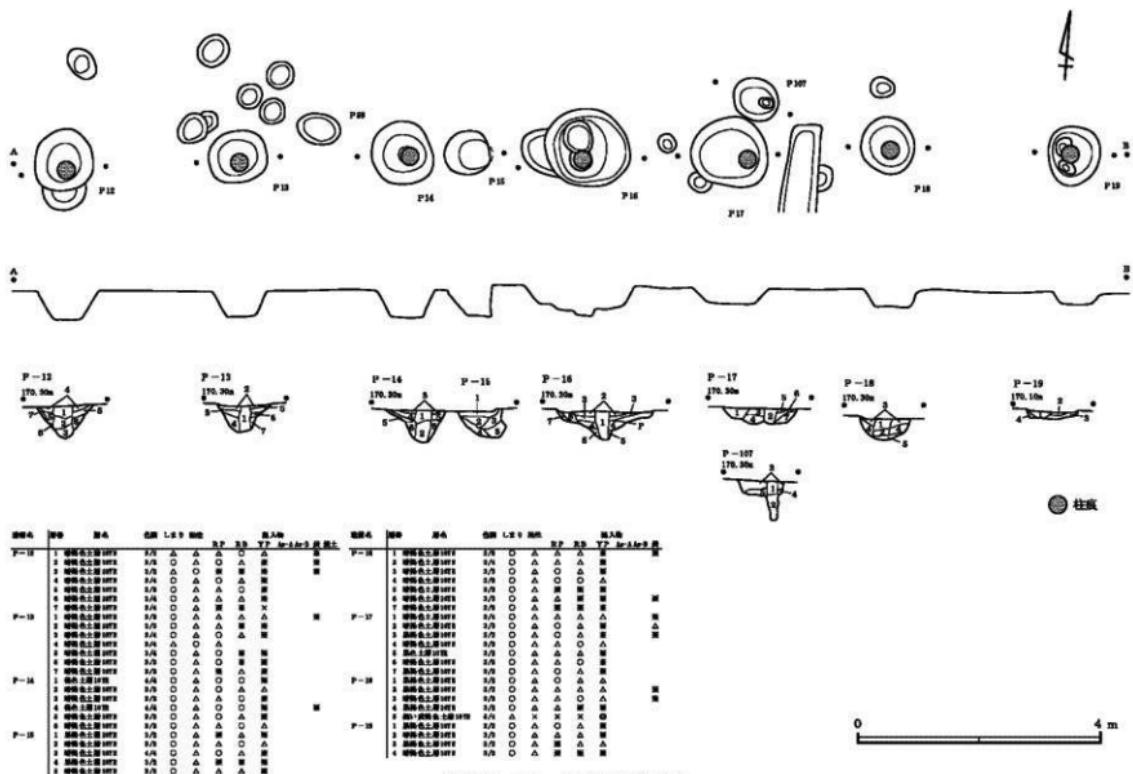
S A - 1 号生穴列



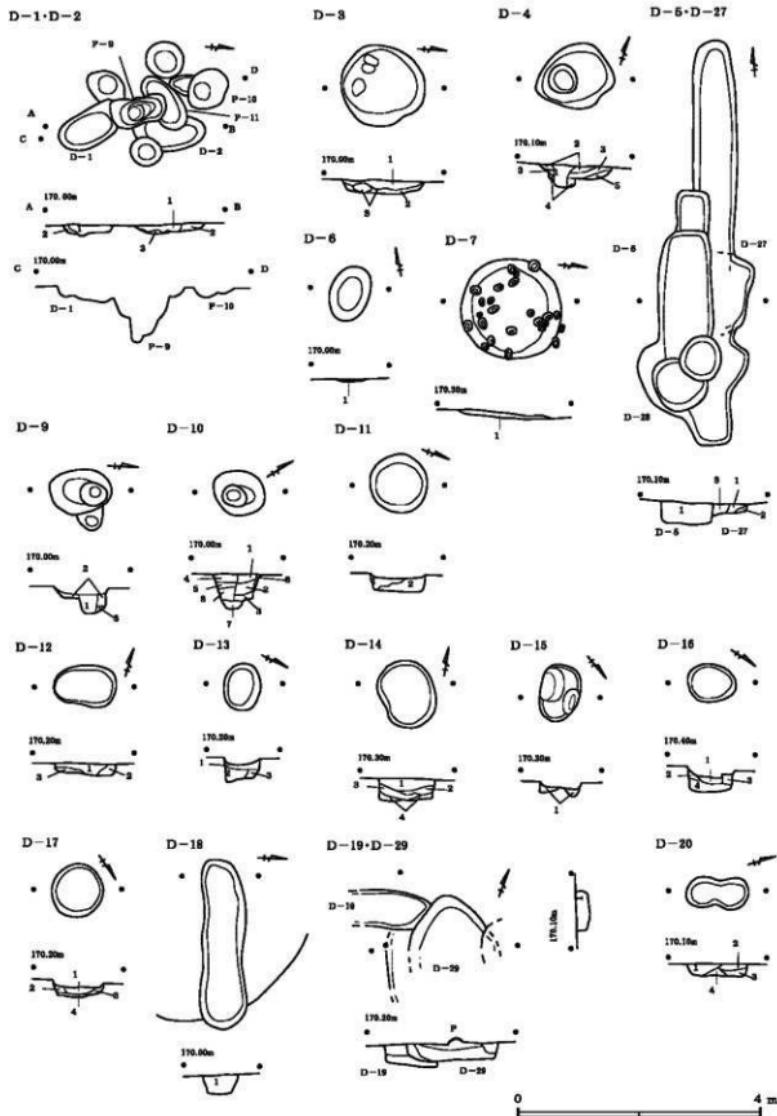
第25图 S A - 1号柱穴列剖面图(1)



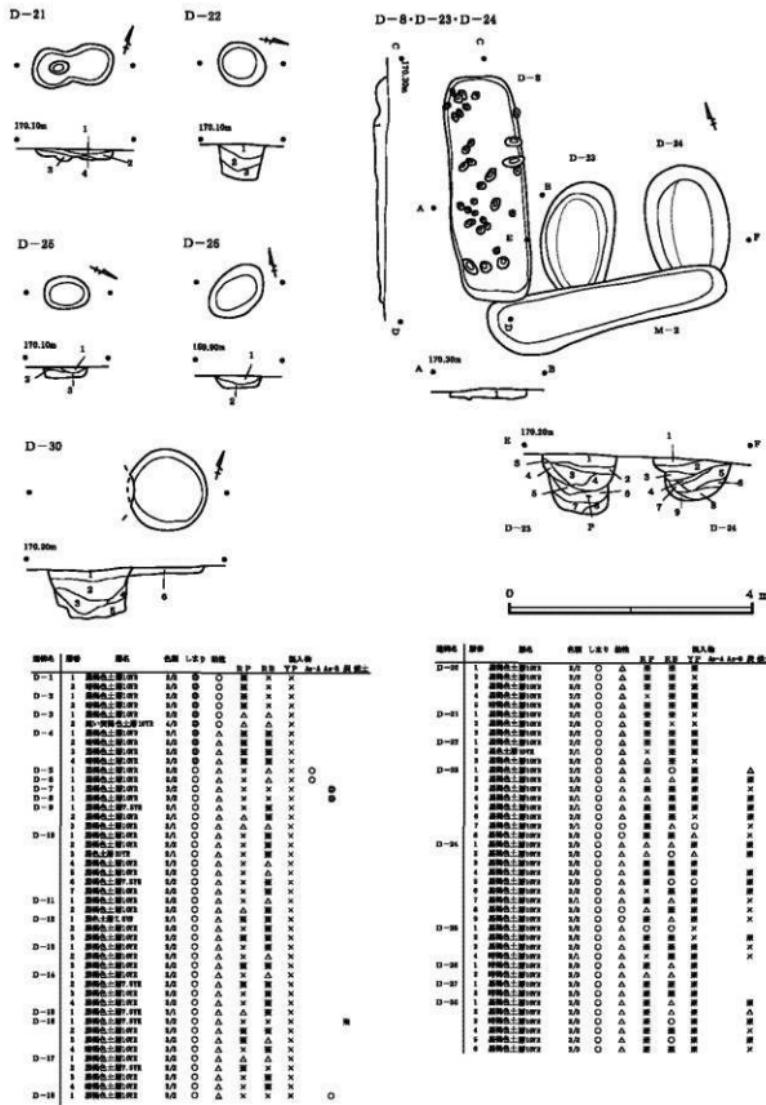
第26図 S A-1号柱穴列実測図(2)



第27図 SA-2号柱穴実測図



第28図 土坑実測図(1)



第29図 土坑実測図(2)

2. 遺物

(1) 遺物分布状況（第29図・第30図）

遺構以外から出土した遺物の分布は、第29図のとおりである。器種別の重量分布で示した。調査区北側は遺構と重複する部分も多いが西側に分布の偏りが認められる。一方、調査区南側の古代建物群の範囲内では、大量の遺物が出土した。特に掘立柱建物址付近での出土が目立った。遺物は古代の須恵器、蓋、甕類が多く、土師器は古墳時代のものを主体とする。重量分布から甕系が多い傾向が認められた。

特殊遺物の分布（第30図）では、原位置をとどめているものは少ないが、古代の建物群の内側を中心に出したことから、遺物と建物群との関連性が考えられる。巡方とドングリ形銅製品はHT-1号掘立柱建物址の範囲から出土した。

(2) 住居址出土の遺物（第32図～第35図）

古墳時代

土師器の壺、小形甕、甕、瓶を主体とする土器群である。須恵器は少ないがH-3号住居址では、甕が出土した。壺は須恵器模倣壺である。口縁部と体部の境に段をもつ。口縁部が外反する。外面は口縁部は笠撫で、体部は笠削りが多用され、内面は撫でによって整形されている。甕は口縁部が「く」の字状に外反し、長胴化する。上半部は縱方向の笠削り、下半部は斜方向の笠削りによって整形されている。内面は横方向の笠撫でが施されている。

H-6号住居址では須恵器模倣壺が2点出土している。有段口縁を主体とするが、内面底部に箇ミガキが施される。甕は内面刷毛目で調整が施されるものもある。

古墳時代後期の6世紀後半の土器群に相当する。

古墳時代終末

H-11号住居址出土の土器 土師器は壺と甕、須恵器は壺と蓋である。蓋は摘みが擬宝珠形となり、返しをもつ。擬宝珠形の蓋は、都城及び官衙等で多数出土し、時期と分布が限定された形態であり、地方での出土は少ないものである。蓋の形態から7世紀終末から8世紀初頭の土器群に相当する。

平安時代

H-9号住居址出土の土器 瓢出土の甕は外面を回転笠削りによって調整されている。4～7は混入遺物である。

H-12号住居址出土の土器 土師器の「コ」の字口縁をもつ甕、須恵器の高台付椀と羽釜が出土している。平安時代後期（10世紀代）の土器群に相当する。

(3) 掘立柱建物址出土の遺物（第35図・第36図）

HT-1号掘立柱建物址 柱穴2基から須恵器蓋と土師器の暗文土器（壺）が出土した。蓋は摘みが擬宝珠形をする。暗文土器は内面に放射状の箇ミガキと底面に螺旋状の箇ミガキが観察される。暗文の状況から8世紀初頭段階に相当する。

HT-2号掘立柱建物址 柱穴から須恵器壺、高台付椀、蓋、盤、土師器の暗文土器が出土した。壺は底部笠切り技法である。蓋は摘みが擬宝珠形である。蓋の表面に記号「凸」と思える刻書がある。出土遺物はいずれも官衙的な性格をもつものである。これらの遺物は7世紀終末から8世紀初頭の段階に相

当する。この建物周辺の柱穴からは、須恵器高台付椀（平安時代9世紀代）と住居覆土から混入した須恵器蓋（古墳時代後期）が出土した。

H T - 3 号掘立柱建物址 柱穴から須恵器坏、無頬蓋、器種不明の須恵器と瓦が出土した。坏は底部が籠切り技法である。建物周辺の柱穴からは底部が回転糸切り痕が残る坏と瓶（平安時代後期10世紀代）が出土した。

H T - 4 号掘立柱建物址 柱穴から「×」と刻書された須恵器蓋が出土した。摘み部は欠損していたが、擬宝珠形であったと思われる。

H T - 7 号掘立柱建物址 柱穴から「評」と刻書された須恵器蓋が出土した。摘みが擬宝珠形をするのが特徴である。形態的特徴から7世紀終末段階に相当すると考えられる。刻書文字は蓋内側中央部に先端が尖った櫛状工具で刻書されている。

柱穴（ピット）出土の土器 確認された7棟の掘立柱建物址以外の柱穴（ピット）から、古墳時代から平安時代までの土師器、須恵器等が出土した。古墳時代後期の土器が多いこと、建物群の柱穴が住居址覆土を掘り込んでいることにより、ほとんどが混入遺物と考えられる。

（4）遺構外出土の遺物（第36図～第38図）

坏・椀類（第36図）

第36図1～17は坏である。7は土師器坏である。口縁部が内側に屈曲する。古墳時代終末に帰属する。8～17は須恵器坏である。全て輪轂による回転横ナデ調整で、底面がやや突出あるいは平坦があり、底部切り離しが手持ちヘラ切り（8・9）、回転ヘラ切り（10～14）、回転糸切り（15）がある。16・17は擬高台付の坏で16は高台が外側へ開き気味に付く在地系のタイプで、17は高台が内側に付く都城でみられる非在地系のタイプである。第37図1～4は高台付椀（1）、高台付皿（2・3）、高台付坏（4）である。4は盤状の坏に直立する足の高い高台が付く。「盤B」に分類される形態である。

調整技法の特徴により、古墳時代後期（第36図12）、7世紀後半（第36図8～11、27）、8世紀代（第36図13～16、第37図1・4）、9世紀代（第37図2・3）に大別できる。

盤・高盤（第37図）

5～7は須恵器の盤である。皿及び大形坏としても分類される器種であるが、形状から脚が付く高盤の可能性も考えられる。輪轂整形による回転横ナデで、口縁部にカエリがあり、外側に屈曲するもの（5・7）と直線状に開くものがある（6）。形態的特徴から8世紀後半から9世紀前半に帰属すると考えられるが、7世紀代に遡る可能性もある。

8・9は高盤である。脚部のみであり、坏（盤）の形状は不明であるが、形態的特徴から7世紀後半に帰属すると考えられる。

蓋（第38図）

蓋は全て須恵器で幅が10cm以下（小型）とそれ以上（大型）に大別できる。摘みが擬宝珠形（1～5、7～23）と環状のもの（6・13）、さらに端部にカエリがあるもの（1～6）と下方へ折れるもの（7～13）に分けられる。擬宝珠形でカエリのあるタイプは飛鳥地方の都城を中心として分布し、7世紀後半に帰属するものと考えられる。8～12は8世紀代後半で県内に分布する「スカリ沢」タイプに類似する。本遺跡の特徴として、摘みが環状をするものに加え、擬宝珠形をしたものが多い。

壺・蓋（第38図）

表採資料であるが須恵器の広口壺とその蓋が出土した。緑色系の釉薬が塗られている。8世紀後半に帰属すると考えられる。

羽釜（第38図）

遺構外から羽釜が出土した。輪轂により器面が整形される西毛地域に分布する「吉井型」である。

瓦（第38図）

平瓦及び軒丸瓦の破片で、布目、縄目が残る。瓦は少數出土したのみであったが、付近に瓦葺き建物（寺院あるいは公的性格のある掘立柱建物）が存在した可能性を示す資料として遺跡の性格を考えるために重要である。

（4）特殊遺物（第39図）

銅製品

腰金具の一種である巡方（1）とドングリ形の銅製品（2）が出土した。巡方は2枚を鍍ぎ合わせたうちの片方のみである。形態的特徴から8世紀中葉以降の特徴が認められる。ドングリ形銅製品は、上下に孔が穿つが貫通しているかは不明である。単独で機能したものではなく、何らかの装飾品の一部分と考えられるが、性格については類例が少ないとみる。

鉄製品

3は鉄斧、4は鉄塊（鉄板）である。2点とも鋸が著しい。出土層位が不明であるため、帰属時期は判然としないが古墳時代以降と思われる。しかし、出土状況から近世以降の可能性も考えられ検討を要する。

石製品

住居址及び柱穴から有孔円板と白玉が3点（5～7）出土した。石材は滑石である。古墳時代に帰属すると考えられる。荒削りによって成形した後、平面及び側面を研磨し、仕上げられている。中央には孔が穿つ。

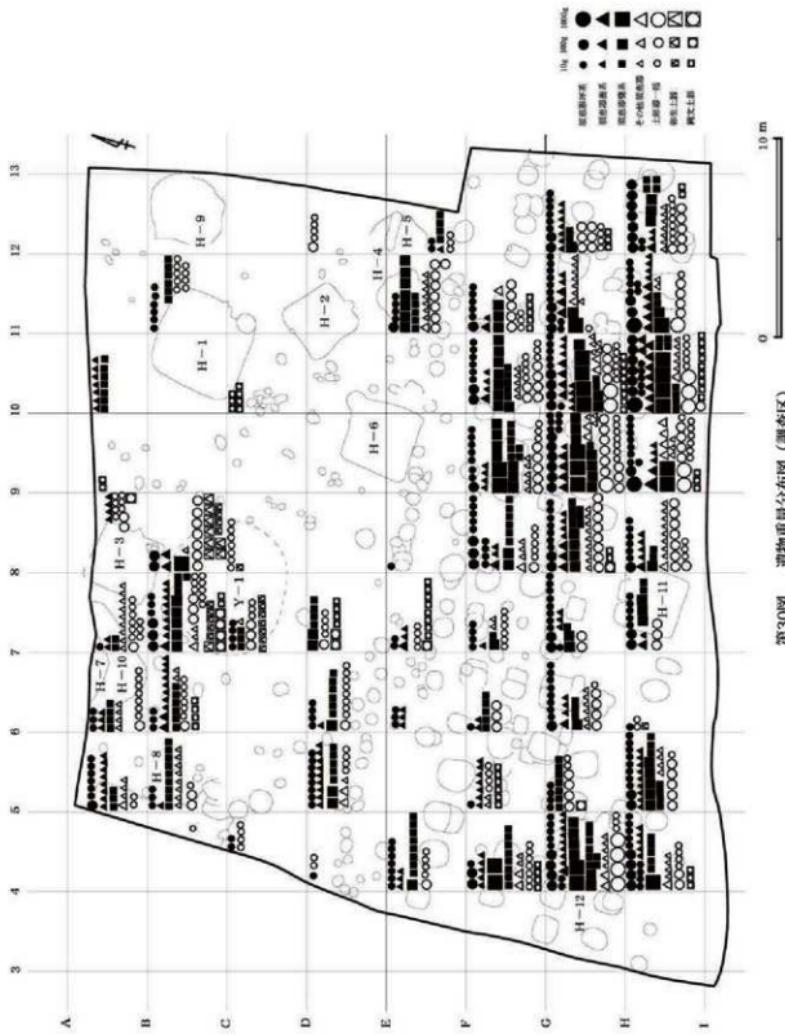
石錘

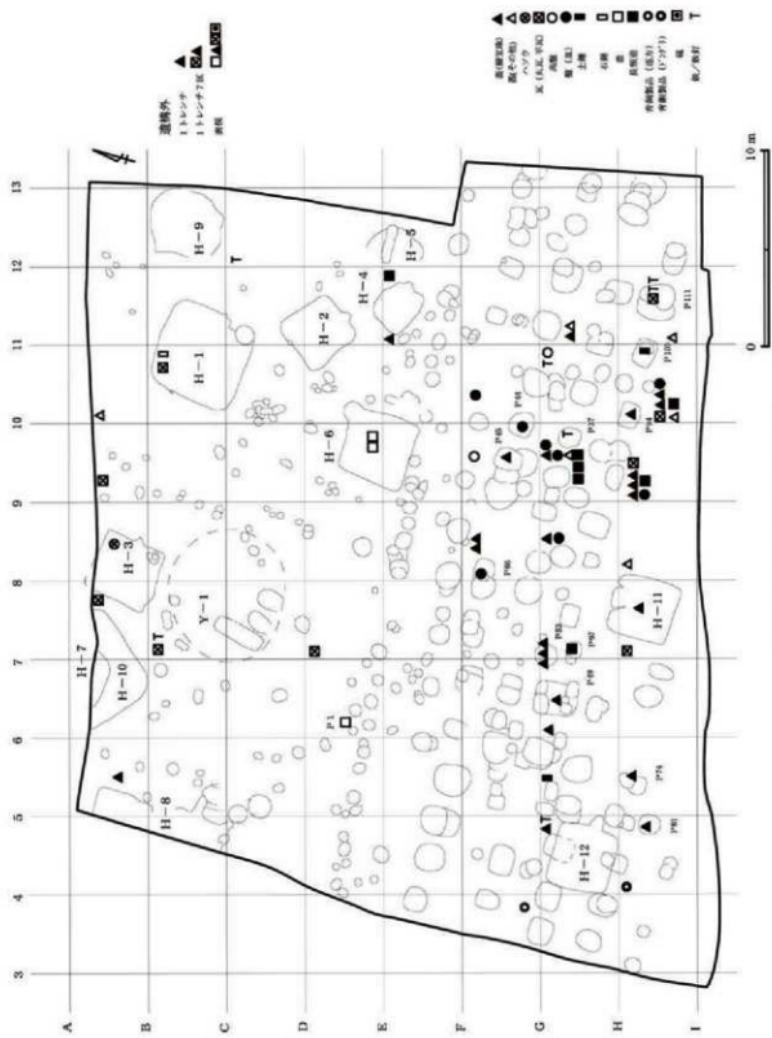
H-1号住居址から1点（8）出土した。扁平鑓の両端に切り目がある。石材は緑色片岩である。古墳時代に帰属するものと考えられる。

土錘

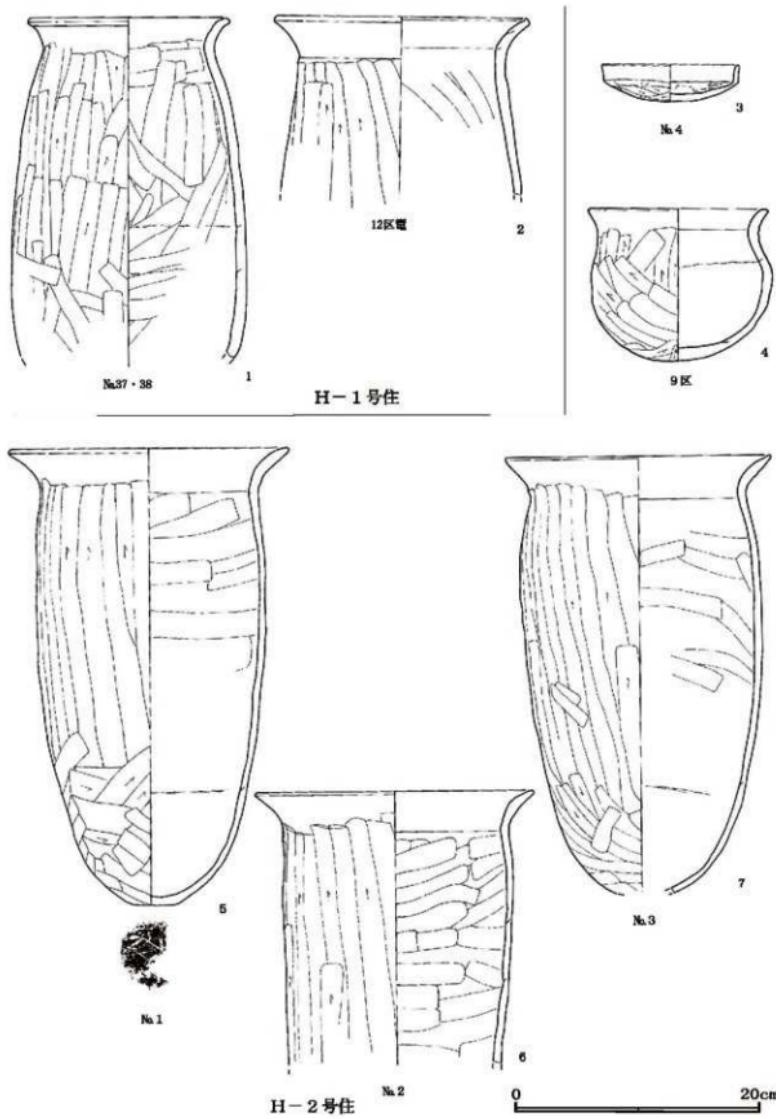
粘土製で2点（9・10）出土した。小型紡錘形を呈する。中心には孔が開く。石錘と同様、漁労に係わる網の錘と推定される。古代に帰属するものと考えられる。

第30圖 遺物重量分布圖（調查區）

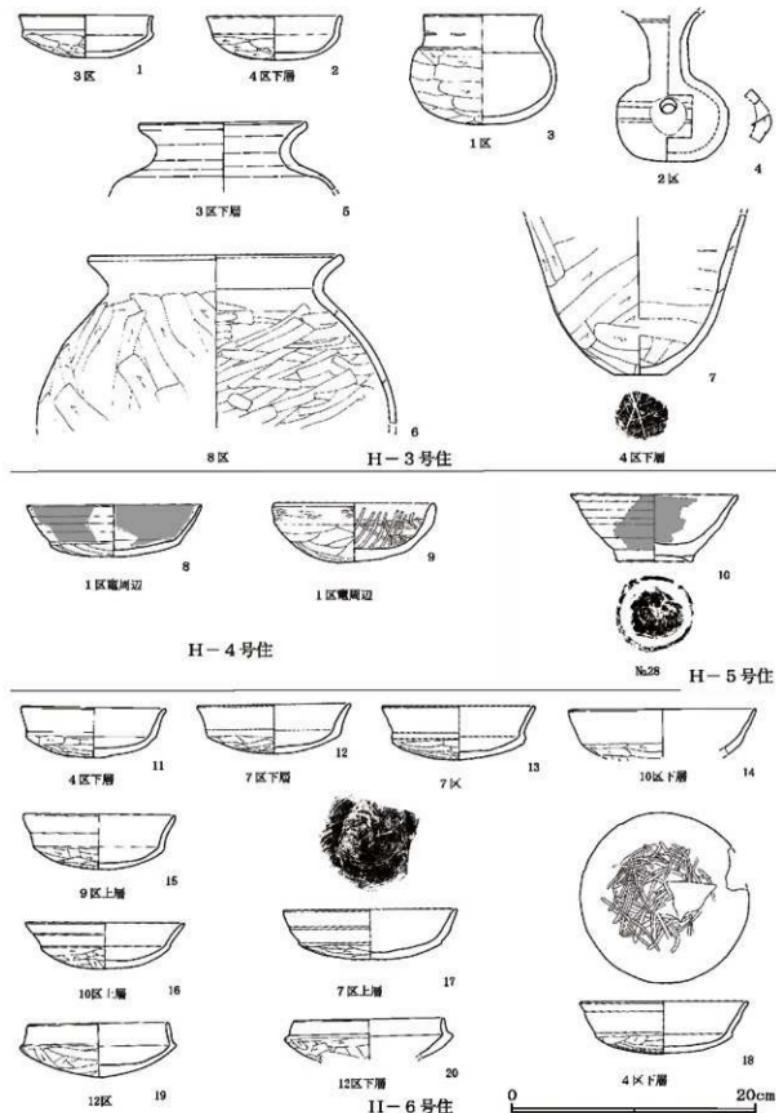




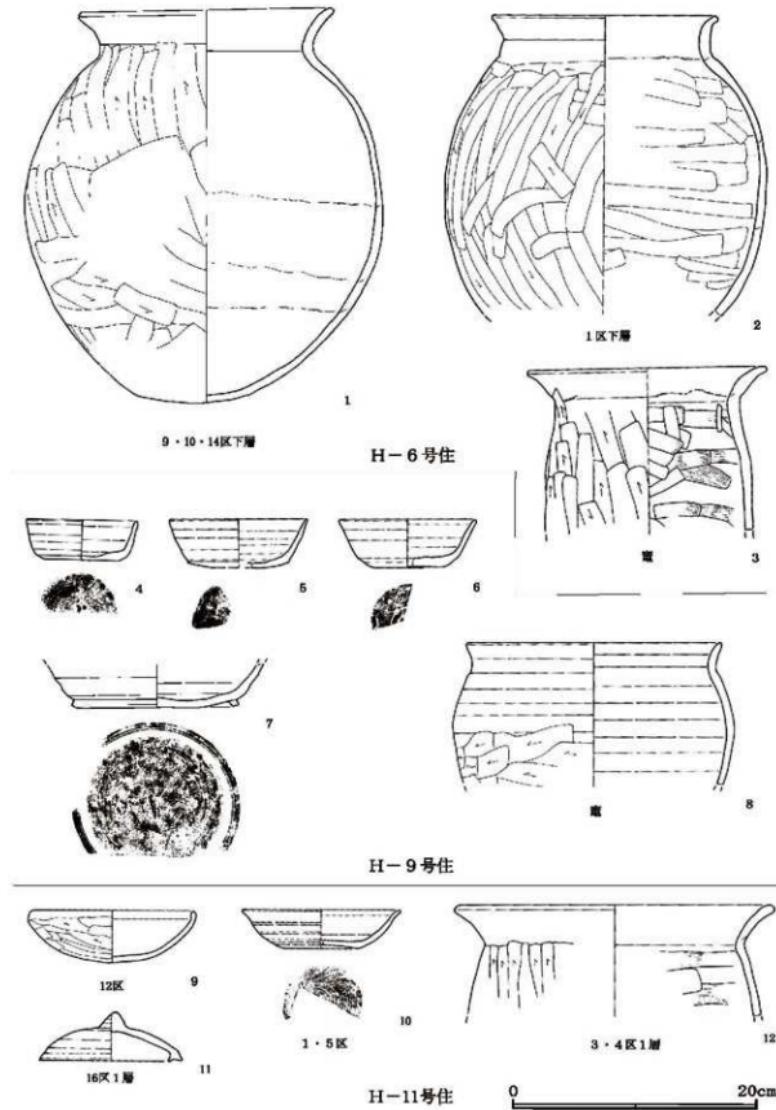
第31図 特殊遺物分布図（調査区）



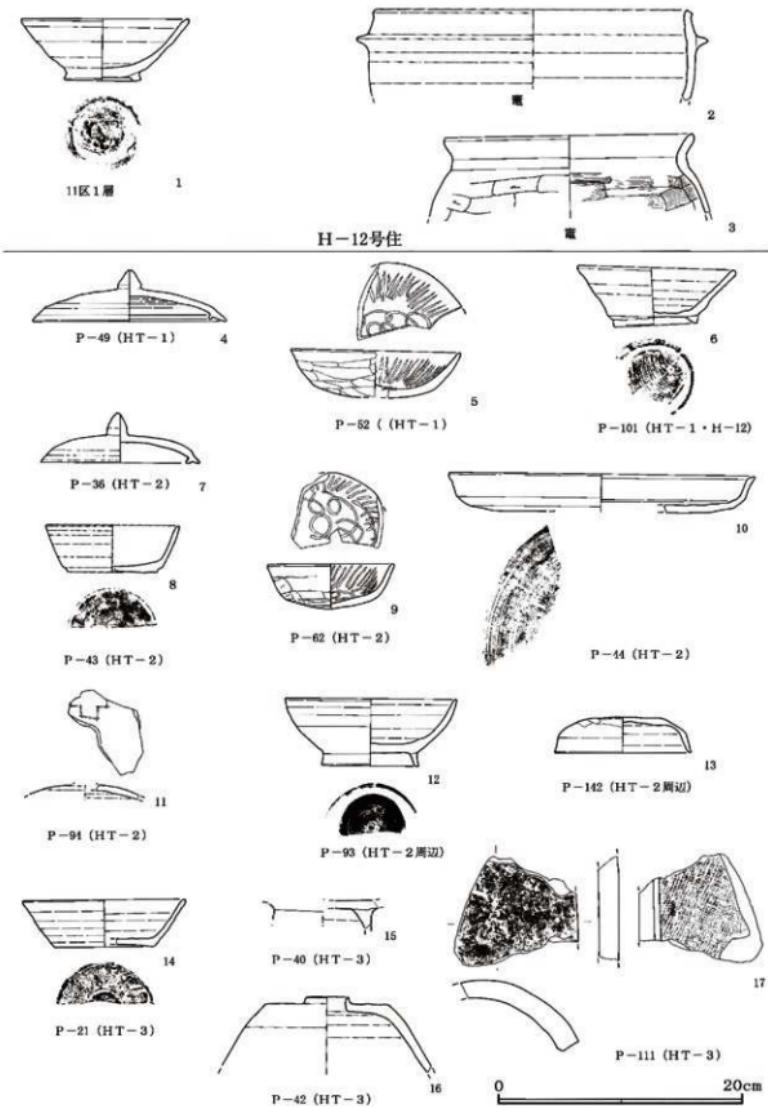
第32図 H-1・2号住居址出土の土器



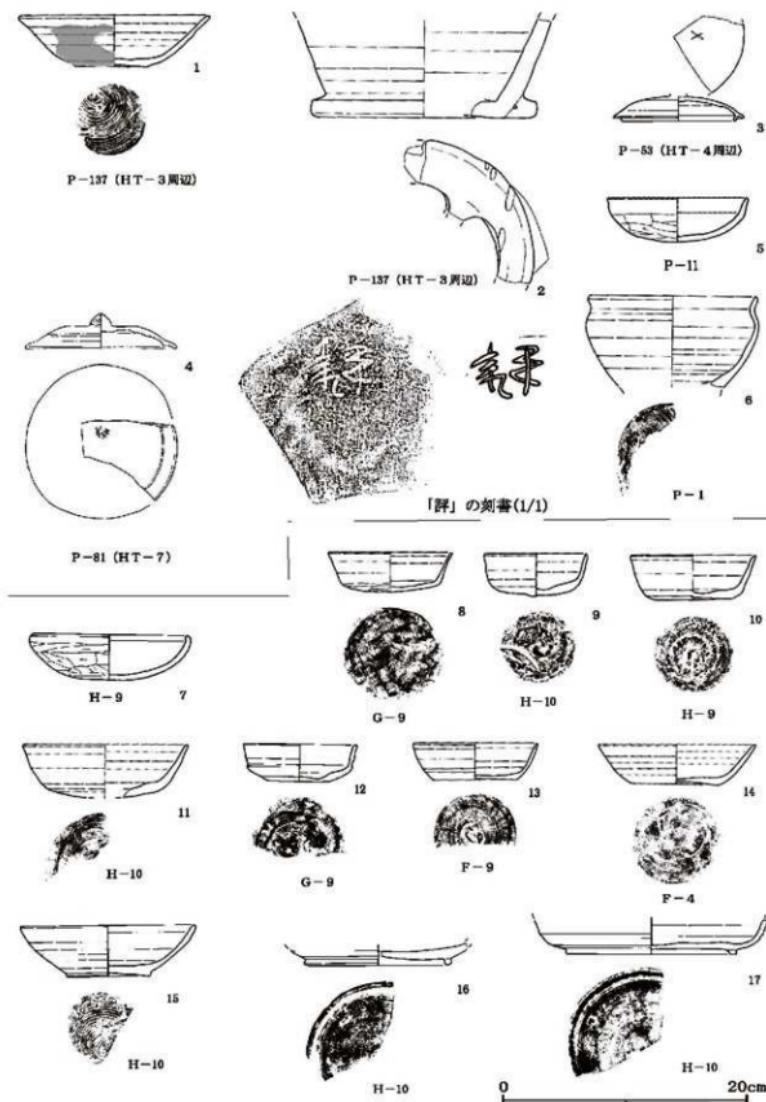
第33図 H-3・4・5・6号住居址出土の土器



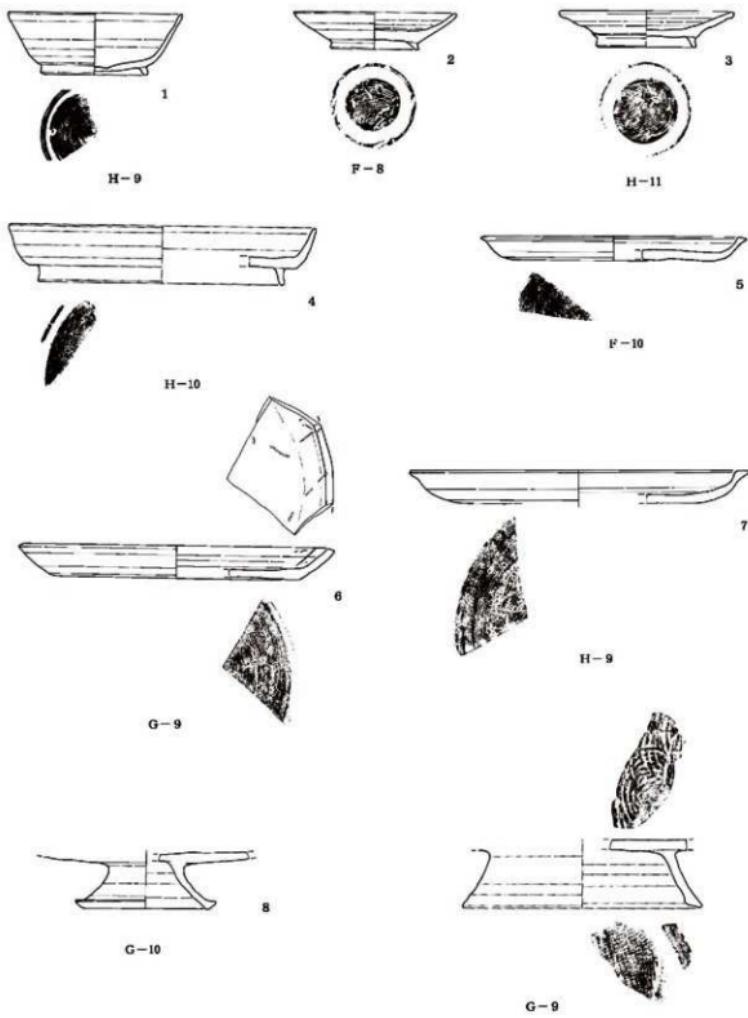
第34図 H-6・9・11号住居址出土の土器



第35図 H-12号住居址・掘立柱建物址出土の土器

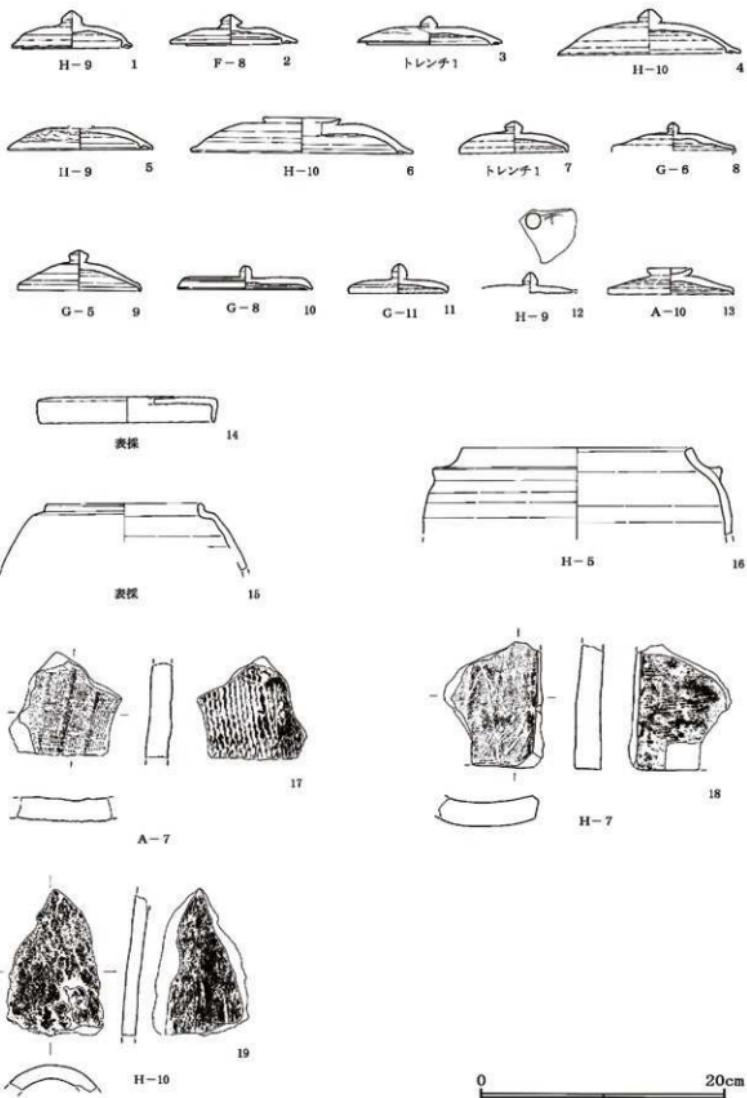


第36図 振立柱建物址・遺構外出土の土器（1）

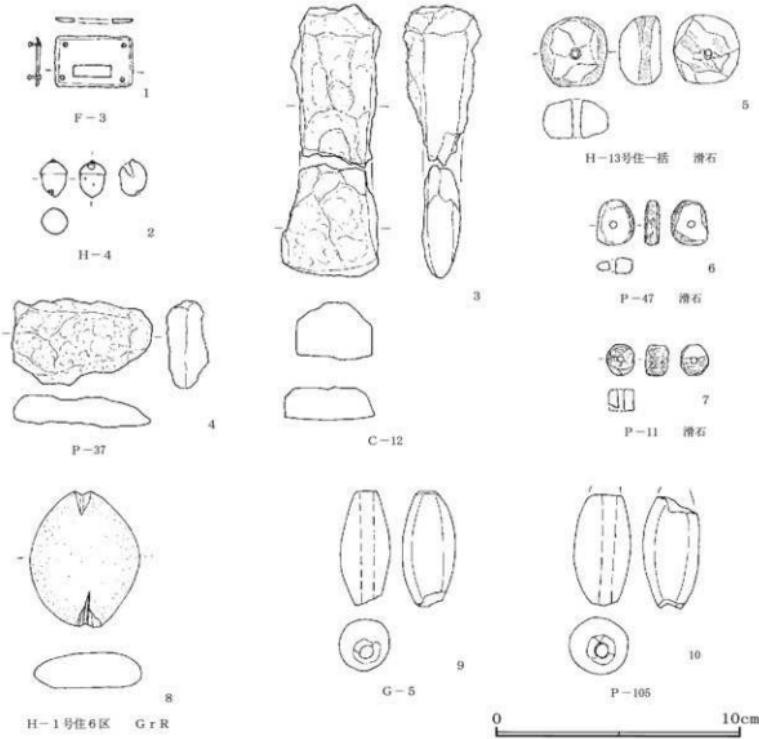


0 20cm

第37図 遺構外出土の土器（2）



第38図 遺構外出土の土器（3）・瓦



第39図 銅製品・鉄製品・石製品・土製品

成・整形技法の特徴										参考	
種別No.	番号	標名	区	解	種類	器種	口括	筋括	筋存	外面	
7回	3 Y-1	No.4		先生上器	壺		12.6	—	(13.0) 良好	口縫前面～筋部 細砂粒多量。砂	口縫部横刷毛。砂 頭部はまみ方向 筋目、筋部は 頭部に筋方向の刷毛且 3条の平行状態
4	No.2	先生上器	壺				18.6	9	27.8	やや軟	口縫部横刷毛。砂 頭部はまみ方向 筋目、筋部は 頭部に筋方向の刷毛且 3条の平行状態
5 Y-1	No.4	先生上器	壺				—	(7.4) 硬	口縫部横刷毛。砂 頭部はまみ方向 筋目、筋部は 頭部に筋方向の刷毛且 3条の平行状態		
6 Y-1	No.9	先生上器	壺				—	—	黑色	口縫部横刷毛。砂 頭部はまみ方向 筋目、筋部は 頭部に筋方向の刷毛且 3条の平行状態	
7 Y-1	No.9	先生上器	壺				—	—	良好	口縫部横刷毛。砂 頭部はまみ方向 筋目、筋部は 頭部に筋方向の刷毛且 3条の平行状態	
8 Y-1	No.4	先生上器	壺				—	—	—	口縫部横刷毛。砂 頭部はまみ方向 筋目、筋部は 頭部に筋方向の刷毛且 3条の平行状態	
9 Y-1	No.9	先生上器	壺				—	—	良好	口縫部横刷毛。砂 頭部はまみ方向 筋目、筋部は 頭部に筋方向の刷毛且 3条の平行状態	
10 Y-1	No.5	先生上器	壺				—	—	黑色	口縫部横刷毛。砂 頭部はまみ方向 筋目、筋部は 頭部に筋方向の刷毛且 3条の平行状態	
11 Y-1	No.5	先生上器	壺				—	—	黑色	口縫部横刷毛。砂 頭部はまみ方向 筋目、筋部は 頭部に筋方向の刷毛且 3条の平行状態	
12	No.5	先生上器	壺				—	—	良好	口縫部横刷毛。砂 頭部はまみ方向 筋目、筋部は 頭部に筋方向の刷毛且 3条の平行状態	
8回	1 B-8	先生上器	壺				—	—	黑色	口縫部横刷毛。砂 頭部はまみ方向 筋目、筋部は 頭部に筋方向の刷毛且 3条の平行状態	
2 G-4		先生上器	壺				—	—	黑色	口縫部横刷毛。砂 頭部はまみ方向 筋目、筋部は 頭部に筋方向の刷毛且 3条の平行状態	
3 G-12		先生上器	杯				—	—	良好	口縫部横刷毛。砂 頭部はまみ方向 筋目、筋部は 頭部に筋方向の刷毛且 3条の平行状態	
4 B-8		先生上器	壺				—	—	良好	口縫部横刷毛。砂 頭部はまみ方向 筋目、筋部は 頭部に筋方向の刷毛且 3条の平行状態	

件名	番号	構名	区	刷	種類	器種	口径	底径	高さ	成・整形技法の特徴		外観	裏	内面	備考
										① 塗成	② 色調				
8 団	5 G - 4				学生土器	壺	—	—	—	黒褐	微細な凹 凸模少數	③ 勾上 輪形	残存	口縁部破片 砂粒少數	ヨコナデ 2 個 の変形文 ヨコナデ
	6 H - 12				学生土器	壺	—	—	—	良好	浅黄褐	砂粒少數 砂粒多數	口縁部から頂部 に至る 状文 朱の沈線	口縁部破片 破片	口縁部から頂部 に至る 状文 朱の沈線
	7 G - 12				学生土器	壺	—	—	—	堅密	褐色	細粒砂	口縁部から瓶頸 部	口縁部破片 破片	口縁部から瓶頸 部
	8 P - 124				学生土器	壺	—	—	—	堅密	褐色	細粒砂多數	口縁部破片 破片	口縁部下に異 様な墨文 (右 図)	口縁部下に異 様な墨文 (右 図)
	9 H - 12				学生土器	壺	—	—	—	良好	相	細粒砂多數 砂粒少數	削痕	口縁部破片 破片	口縁部下に異 様な墨文 (右 図)
	10 H - 12	1			学生土器	壺	—	—	—	堅密	浅黄褐	細粒砂多數	口元	口縁部破片 破片	口縁部下に異 様な墨文 (右 図)
	11 B - 7				学生土器	壺	—	—	—	堅密	浅黄褐	細粒砂少數	口元	口縁部破片 破片	口縁部下に異 様な墨文 (右 図)
	12 G - 4				学生土器	壺	—	—	—	良好	褐色	細粒砂多數 砂粒少數	口元	口縁部破片 破片	口縁部下に異 様な墨文 (右 図)
	13 H - 7				学生土器	壺	—	—	—	良好	にがり質地	細粒砂多數	各面文	口縁部破片 破片	口縁部下に異 様な墨文 (右 図)
	14 H - 12				学生土器	壺	—	—	—	堅密	にがり質地	細粒砂多數 砂粒少數	各面文	口縁部破片 破片	口縁部下に異 様な墨文 (右 図)
	15 G - 8				学生土器	壺	—	(7.0)	—	堅密	浅黄褐	細粒砂多數	各面文	口縁部破片 破片	口縁部下に異 様な墨文 (右 図)
	16 A - 8				学生土器	壺	—	—	—	やや堅	褐色	砂粒多數	口元	口縁部破片 破片	口縁部下に異 様な墨文 (右 図)
	17 G - 12				学生土器	壺	—	(6.4)	—	やや堅	褐色	細粒砂多數	各面文	口縁部破片 破片	口縁部下に異 様な墨文 (右 図)

第5表 出土土器調査表(2)

成・整形技術の特徴												時期			
構造番号	遺跡名	区	層	輪鉄	笠鉄	口径	底径	器高	①他底	②色調	③始・上	残存	外・面	内・面	
3236	1 H-1 住	No.37・38	P-1	上部器 壺	(16.4)	-	-	普通	にふく・黒褐色	細砂粒・片岩少含	口輪部・黒色鉛 片	口輪部焼ナダ 輪部焼ナダ	輪部焼ナダ 輪部焼ナダ	輪部焼ナダ 輪部焼ナダ	6世紀後半
2	H-1 住	12	層	上部器 壺	20.8	-	-	普通	にふく・黒褐色	細砂粒・小礫含	口輪部～脚部 脚部焼ナダ	輪部焼ナダ 輪部焼ナダ	輪部焼ナダ 輪部焼ナダ	輪部焼ナダ 輪部焼ナダ	
3	H-2 住	No.4	上部器 壺	11.2	-	3.0	普通	にふく・黒褐色	細砂粒・片岩少含	口輪部・脚部 脚部焼ナダ	輪部焼ナダ 輪部焼ナダ	輪部焼ナダ 輪部焼ナダ	輪部焼ナダ 輪部焼ナダ		
4	H-2 住	9	上部器 小型壺	14.7	-	12.6	普通	にふく・黒褐色	細砂粒・片岩少含	脚部・底欠 含	口輪部焼ナダ 脚部～底部焼削	輪部焼ナダ 輪部焼ナダ	輪部焼ナダ 輪部焼ナダ	輪部焼ナダ 輪部焼ナダ	
5	H-2 住	No.1	上部器 壺	22.8	(3.5)	37.6	普通	明示無	細砂粒・チヤー トヨ・片岩少含	底部1/2欠 脚部焼ナダ 脚部焼ナダ 脚部焼ナダ	輪部焼ナダ 輪部焼ナダ 輪部焼ナダ	輪部焼ナダ 輪部焼ナダ 輪部焼ナダ	輪部焼ナダ 輪部焼ナダ 輪部焼ナダ		
6	H-2 住	No.2	上部器 壺	22.9	-	-	普通	明示無	細砂粒・チヤー トヨ・片岩少含	脚部1/2～底 部欠	輪部焼ナダ 輪部焼ナダ	輪部焼ナダ 輪部焼ナダ	輪部焼ナダ 輪部焼ナダ		
7	H-2 住	No.3	上部器 壺	21.6	-	-	普通	にふく・黒褐色	細砂粒・片岩少含	底部欠 含	輪部焼ナダ 輪部焼ナダ	輪部焼ナダ 輪部焼ナダ	輪部焼ナダ 輪部焼ナダ		
3336	1 H-3 住	3	上部器 壺	10.9	-	3.6	普通	普通	細砂粒・石英少含 黑色點斑少含	口輪部焼ナダ 脚部焼ナダ	輪部焼ナダ 輪部焼ナダ	輪部焼ナダ 輪部焼ナダ	輪部焼ナダ 輪部焼ナダ	6世紀後半	
2	H-3 住	4	下部	上部器 壺	11.0	-	3.6	普通	普通	細砂粒・チヤー トヨ・黑色點斑 含	口輪部焼ナダ 脚部焼ナダ	輪部焼ナダ 輪部焼ナダ	輪部焼ナダ 輪部焼ナダ		
3	H-3 住	1	上部器 小型壺	9.6	-	9.1	普通	普通	細砂粒・石英少含 黑色點斑少含	口輪部焼ナダ 脚部焼ナダ	輪部焼ナダ 輪部焼ナダ	輪部焼ナダ 輪部焼ナダ	輪部焼ナダ 輪部焼ナダ		
4	H-3 住	2	下部	上部器 壺	-	3.6	-	薄元	普通	細砂粒・チヤー トヨ・黑色點斑 含	口輪部焼ナダ 脚部焼ナダ	輪部焼ナダ 輪部焼ナダ	輪部焼ナダ 輪部焼ナダ		
6	H-3 住	8	上部器 壺	(21.0)	-	-	普通	普通	にふく・黒褐色	細砂粒・片岩少含	口輪部～脚部 脚部焼削	輪部焼ナダ 輪部焼ナダ	輪部焼ナダ 輪部焼ナダ		
7	H-3 住	4	下部	上部器 壺	-	4.1	-	普通	にふく・黒褐色	細砂粒・チヤー トヨ・片岩少含	1/2	輪部～底部焼削	輪部焼ナダ		
8	H-4 住	1	上部器 壺	14.2	-	4.3	普通	にふく・黒褐色	細砂粒・黑色鉛 少含	1/2	輪部本體斜 斜面焼削	輪部本體斜 斜面焼削	輪部本體斜 斜面焼削	本体工具による焼ナダ	
9	H-4 住	1	上部器 壺	13.3	-	4.9	普通	にふく・黒褐色	細砂粒・石英少 黑色點斑少・小 礁少含	1/2	口輪部焼削 脚部焼削	輪部～底部焼削 脚部焼削	輪部～底部焼削 脚部焼削	輪部～底部焼削 脚部焼削	

種別 番号	遺構名	区	解	編	器種	口径	底径	高さ	①地盤	空色調	③始	十	残存	成・整形法の特徴		内・面	時期
														外 面	内 面		
3385	H-5号住	h28			須弥壇	13.6	6.3	遊元	从白	細砂粒・小穂少 含	11.1正形	回転焼ナデ	本口状工具による回転焼ナデ 縦端部・底端部のみ回転焼ナデ 縦的・口縁部～体部の一部に施す に補充したものと想定される	口	9世紀後半		
11	H-6号住	4	下解		土師器	环	11.9	—	4.1	普通	梗	細砂粒・片岩少 含	11.1正形	回転焼ナデ	本口状工具による焼ナデ 台脚付	口	6世紀後半
12	H-6号住	7	下解		土师器	环	12.5	—	4.1	普通	梗	細砂粒含	1/3	口縁部焼ナデ	本口状工具による焼ナデ	口	
13	H-6号住	7	下解		土师器	环	12.5	—	4.4	普通	梗	細砂粒・黑色系 物少含	口縁部 2/3欠	口縁部焼ナデ	本口状工具による焼ナデ 口縁部焼ナデ 体部ナデ	口	
14	H-6号住	10	下解		土師器	环	13.2	—	—	普通	梗	細砂粒含	口縁部 本口状工具による焼ナデ 口縁部	本口状工具による焼ナデ	口		
15	H-6号住	9	上解		土师器	环	12.4	—	4.5	普通	梗	細砂粒・黑色系 物少含	11.1正形	口縁部本口状工具による焼ナデ 口縁部～底部断面	本口状工具による焼ナデ	口	
16	H-6号住	10	1		土師器	环	13.0	—	3.8	普通	梗	に5.5黄 細砂粒含	口縁部 4/5欠	口縁部本口状工具による焼ナデ 口縁部～底部断面	本口状工具による焼ナデ	口	
17	H-6号住	7	上解		土师器	环	14.1	—	4.1	普通	梗	に5.5黄 細砂粒・黑色系 少含	口縁部 本口状工具による焼ナデ 口縁部	本口状工具による焼ナデ 口縁部～底部断面	本口状工具による焼ナデ 口縁部	木口状工具による焼ナデ 口縁部	(南日)
18	H-6号住	4	下解		土師器	环	13.8	—	4.2	普通	オーバーブ 梗	細砂粒含	11.1正形	口縁部・底部断面	本口状工具による 焼ナデ 黒色免焼	口	
19	H-6号住	12	上解		土师器	环	11.7	—	4.5	普通	梗	に5.5黄 細砂粒・小穂少 含	11.1正形	口縁部・底部断面	本口状工具による 焼ナデ	口	
20	H-6号住	12	下解		土师器	环	12.2	—	—	普通	梗	黒褐色 細砂粒含	口縁部 本口状工具による焼ナデ 口縁部～底部断面	本口状工具による 焼ナデ 黑色免焼	口		
1	H-6号住	9-10-14	下解		土師器	集	20.7	—	32.3	普通	梗	細砂粒・チャ ト少・片岩少含	1/2	前部・底部断面	本口状工具による焼ナデ 口縁部焼ナデ 前部～底部断面	口	
3482	H-6号住	1	下解		土師器	集	18.4	—	—	普通	梗	細砂粒・黑色系 物少含	1/2	前部・底部断面	本口状工具による焼ナデ 口縁部焼ナデ 前部～底部断面	口	

成・整形技法の特徴												時期			
番号	遺跡名	区	層	種類	器種	口径	底径	器高	①他底	②色調	③始上	残存	外・面	内・面	
3496	3 H-6 男性 屋			土器	甕	(19.4)	—	普通	—	口縁部・黑色	口縁部～脚部	脚部削り	口縁部木口状工具による削り	脚部木口状工具による削り	6世紀後半
4	H-9 男性			刮削器	片	(9.1)	(6.0)	3.3	通用	黑色	細砂粒・黑色粒	少含	口縁部・脚部	脚部削り	7世紀後半～8世紀前半
5	H-9 男性 No8			刮削器	片	(11.2)	(8.2)	(4.0)	通用	灰	細砂粒・石英少含	口縁部～底部	脚部削り	脚部削り	8世紀前半
6	H-9 男性 No8			刮削器	片	(11.2)	(6.0)	3.9	通用	灰	細砂粒・黑色粒少含	片	口縁部～脚部	脚部削り	脚部削り
7	H-9 男性 No6			刮削器	高台付	—	13.6	—	通用	灰	細砂粒・黑色粒	少含	口縁部～脚部	脚部削り	8世紀前半
8	H-9 男性 No6*			土器	甕	(20.8)	—	—	催化燒	褐色	細砂粒・黑色粒	少含	口縁部～脚部	脚部削り	9世紀前半
9	H-11 男性 12			土器	片	13.5	—	4.3	普通	明茶褐	細砂粒・チヤー	1/4	口縁部	口縁部	7世紀後半
10	H-11 男性 1-5			刮削器	片	(12.9)	5.8	3.2	通用	灰白	細砂粒・チヤー	少含	口縁部～脚部	脚部削り	平安(個人)
11	H-11 男性 16	1		刮削器	板状灰	9.8	—	3.2	通用	灰白	細砂粒・黑色粒	少含	口縁部～脚部	脚部削り	7世紀後半
12	H-11 男性 3-4	1		土器	甕	(25.9)	—	—	普通	褐	細砂粒・チヤー	少含	口縁部～脚部	脚部削り	8世紀後半
3591	1 H-12 男性 11	1		刮削器	高台付	(13.7)	6.3	5.1	通用	褐灰黄	細砂粒・チヤー	1/3	口縁部～脚部	脚部削り	9世紀後半～10世紀前半
2	H-12 男性			刮削器	柄垂	(26.1)	—	—	催化燒	褐灰黄	細砂粒・チヤー	1/2	口縁部～脚部	脚部削り	9世紀後半～10世紀前半
3	H-12 男性			土器	甕	(29.3)	—	—	普通	明茶褐	細砂粒・チヤー	1/2	口縁部～脚部	脚部削り	9世紀後半～10世紀前半

編目 No	遺跡名	区	層	輪鉄	出撃	口径	底径	器高	①地底	②色調	③始・土	成・整形技法の特徴			時期
												遺物名	底径	器高	
254 4	P-49			製鉄器	鍛玉造	(15.7)	丸み付	4.3	遺元	灰白	細部付・黒色鉻 物少・含	1/3	残存	内面	7世紀後半
5	P-52			打削器	外(圓)	(13.8)	—	(3.8)	普通	板	細部付・黒色鉻 物含	1/4	口部削痕ナデ	底部～首部強削 底付	8世紀前半
6	P-60			製鉄器	高台輪	12.9	6.9	5.2	酸化焰	にぶい薄橙 細部付・チヤー	4/5 ト・縫合	5/5・縫合ナデ	底部下端強削・強削 底付	底付強削文	9世紀後半
7	P-36			製鉄器	鍛玉造	11.0	—	3.4	遺元輪	灰色	細部付・黒色鉻 物少・含	完形	9/9・縫合ナデ	底部回転強削・強ナ デ	7世紀後半
8	P-43			製鉄器	高台輪	(10.9)	(7.2)	3.9	遺元	灰黄	細部付・チヤー	1/3	回転強ナデ	底部強削・強切	8世紀前半
9	P-62			打削器	外(圓)	(10.3)	—	3.6	普通	板	細部付・チヤー ト・含	1/3	口部削痕ナデ	底部～首部強削 底付	8世紀前半
10	P-44			製鉄器	鍛玉(直)	(25.0)	(16.0)	3.1	遺元	灰	細部付・チヤー	1/4	回転強ナデ	底部下端強削・強削 底付	7世紀後半?
11	P-94			製鉄器	鍛玉造	—	—	—	遺元	灰	細部付・チヤー ト・少・黒色鉻物 少・含	1/4 1/2	回転強削リ 縫合・縫合強付ナデ 縫合ナデ	底部回転強切リ 縫合・縫合強付ナデ 縫合ナデ	7世紀後半
12	P-93			製鉄器	高台輪	(14.0)	7.8	5.6	遺元	灰	細部強付	1/2	回転強ナデ	底部下端強削・強削 底付	8世紀後半
13	P-142			打削器	环蓋	(11.2)	天井付	2.9	遺元	灰	細部付・チヤー	1/2	口部削痕・縫ナデ	天井部強削 縫合・縫合強付	6世紀後半
14	P-21			製鉄器	平	(13.3)	(8.0)	3.9	遺元	灰	細部付・チヤー ト・少・含	2/3	回転強ナデ	底部強削・強ナデ (火薬紙有)	8世紀代
15	P-40			製鉄器	高盤?	—	—	—	遺元	灰	細部付・含	底部一側部分	底部・脚部強削・縫ナデ	底部強削後やや壊れる 縫合ナデ	古代

第9表 出土土器観察表(6)

神奈 番 No.	遺物名	区	層	種類	器皿	口径 底径 高さ	口径 底径 高さ	法 量		成・整形法の特徴		時期		
								①地盤	②色調	③板	土			
16 P-42	須恵器	区	層	須恵器	壺	(3.4)	—	選元	灰	袖砂粒含 ト・小窓少含 チャート少含	口縁部～体部 袖砂粒・チヤー 袖砂粒・石英・ チャート少含	口縁部・底盤 底盤・側面切 削	9世紀後半 10世紀前半	
17 P-111	須恵器	丸瓦	長さ 幅	須恵器	壺	(8.9)	(10.2)	1.8	4.2	選元	萬葉 灰	袖砂粒・チヤー 袖砂粒・石英・ チャート少含	口縁部・底盤 底盤・側面切 削	9世紀後半 10世紀前半
1 P-337 3668	須恵器	丸瓦	長さ 幅	須恵器	壺	15.6	6.0	—	—	選元	萬葉 灰	袖砂粒・チヤー 袖砂粒・石英・ チャート少含	口縁部・底盤 底盤・側面切 削	9世紀後半 10世紀前半
2 P-337	須恵器	丸瓦	長さ 幅	須恵器	壺	—	—	(18.4)	選元	選元	萬葉 灰	袖砂粒・チヤー 袖砂粒・石英・ チャート少含	口縁部・底盤 底盤・側面切 削	9世紀後半 10世紀前半
3 P-333	須恵器	圓筒形壺	高さ	須恵器	壺	(10.7)	—	—	選元	灰白	袖砂粒・チヤー 袖砂粒・少含	1/4 1.5 横み少 デ「×」字状の輪刺 削	9世紀後半 10世紀前半	
4 P-381	須恵器	圓筒形壺	高さ	須恵器	壺	(12.3)	袖砂粒 高さ	2.9	選元	灰白 横	袖砂粒・黑色系 物粒含	1/4 1.5 横み少 デ 宝珠輪及び足付 削	9世紀後半 10世紀前半	
5 P-11	土師器	壺	高さ	土師器	壺	11.5	—	3.6	普通	灰褐色 リード	袖砂粒・黑色系 物少含	1/4 1.5 横み少 デ 口縫部横ナード 削	9世紀後半 10世紀前半	
6 P-1	須恵器	壺	高さ	須恵器	壺	(13.8)	—	—	選元	灰白	袖砂粒含 物少含	1/4 1.5 横み少 デ 口縫部横ナード 削	9世紀後半 10世紀前半	
7 H-9 G	土師器	壺	高さ	土師器	壺	13.0	—	3.7	普通	灰	袖砂粒・黑色系 物少含	1/4 1.5 横み少 デ 口縫部横ナード 削	9世紀後半 10世紀前半	
8 G-9 G	須恵器	壺	高さ	須恵器	壺	(9.30)	5.0	3.1	選元	灰灰黄 灰黃	袖砂粒含 物少含	1/4 1.5 横み少 デ 口縫部横ナード 削	9世紀後半 10世紀前半	
9 H-00G	須恵器	壺	高さ	須恵器	壺	(8.5)	5.7	3.6	選元	灰黃 灰黃	袖砂粒・黑色系 物少含	1/4 1.5 横み少 デ 口縫部横ナード 削	9世紀後半 10世紀前半	
10 H-9 G	須恵器	壺	高さ	須恵器	壺	10.1	6.3	3.6	選元	灰白	袖砂粒・黑色系 物少含	1/4 1.5 横み少 デ 口縫部横ナード 削	9世紀後半 10世紀前半	
11 H-00G	須恵器	壺	高さ	須恵器	壺	(13.4)	(8.2)	(4.4)	選元	灰	袖砂粒・チヤー 袖砂粒含 物少含	1/4 1.5 横み少 デ 口縫部横ナード 削	9世紀後半 10世紀前半	
12 G-9 G	須恵器	外蓋	高さ	須恵器	壺	10.1	0.8	3.2	選元	灰白	袖砂粒・黑色系 物少含	1/4 1.5 横み少 デ 口縫部横ナード 削	9世紀後半 10世紀前半	
13 F-9 G	須恵器	壺	高さ	須恵器	壺	(10.2)	7.0	3.0	選元	灰白	袖砂粒・黑色系 物少含	1/2 1.5 横み少 デ 口縫部横ナード 削	9世紀後半 10世紀前半	

成・整形技法の特徴												時期	
構造番号	遺跡名	区	層	輪鉢	笠鉢	口沿	底径	器高	外周尺	内	残存		
268	14 F-4 G			製陶器	灰	12.8	7.2	3.1	甕元	細砂粒・チャート・黒色粘土	11.5光形 底部下端削り 底部輪底糸切り	回転・模ナメ	8世紀後半
15	H-10 G			製陶器	灰	(14.2)	6.9	4.3	甕元	灰白	細砂粒含	回転・模ナメ	8世紀
16	H-10 G			製陶器	高台付	—	(12.1)	—	甕元	灰白	細砂粒含	回転・模ナメ 底部下端削り 底部輪底糸切り	8世紀前半
17	H-10 G			製陶器	高台付	—	(13.8)	—	甕元	灰	細砂粒・黑色粘土含	底部輪底糸切り 底部輪ナメ	7世紀後半
378	1 H-9 G			製陶器	高台付	(14.2)	(8.7)	5.1	甕元	灰	細砂粒・黑色粘土含	底部輪ナメ 底部輪底糸切り 底部輪ナメ	8世紀後半
	2 F-8 G			製陶器	高台付	13.2	7.2	3.0	甕元	灰	細砂粒・チャート少含	底部輪ナメ 底部輪底糸切り 底部輪ナメ	9世紀後半
3	H-11 G			製陶器	高台付	(14.2)	8.2	3.0	甕元	灰白	細砂粒・チャート少含	底部輪ナメ 底部輪底糸切り 底部輪ナメ	8世紀後半
4	H-10 G			製陶器	高台付 (窓)	(25.0)	(20.1)	4.7	甕元	灰	細砂粒・チャート少含	口輪部～底部 底部輪底糸切り 底部輪ナメ	8世紀後半
5	F-10 G			製陶器	窓(直)	(21.6)	(16.6)	2.0	甕元	灰	細砂粒・黑色粘土・小窓少含	口輪部～底部 底部輪底糸切り 底部輪ナメ	8世紀後半
6	G-9 G			製陶器	窓(直)	(25.8)	(20.7)	2.6	甕元	灰白	細砂粒・黑色粘土片	口輪部～底部 底部輪ナメ	8世紀後半
7	H-9 G			製陶器	窓(直)	(27.6)	(19.1)	2.7	甕元	灰白	細砂粒・黑色粘土片	口輪部～底部 底部輪底糸切り 底部輪ナメ	8世紀後半
8	G-10 G			製陶器	窓(直)	—	(11.5)	—	甕元	灰	細砂粒・黑色粘土含	口輪部～底部 底部輪底糸切り 底部輪ナメ	7世紀後半
9	G-9 G			製陶器	窓(直)	—	(19.5)	—	甕元	灰白	細砂粒・右英少・チャート少・黒色粘土含	口輪部～底部 底部輪底糸切り 底部輪ナメ	8世紀後半

第11表 出土器觀察表(8)

成・整形技法の特徴												時期				
No.	番号	遺跡名	区	層	輪鉢	出模	口径	底径	器高	①地底	②色調	③始土	残存	外・面	内・面	
385	1	H-9 G			製陶器	模写灰	(9.8)	輪み付	3.1	縫元	黄灰	細砂粒・チャート少・黒色変物	1/4	回転削り 天井端部削り 縫付 デ	回転削り 天井端部削り 縫付	7世紀後半
2	F-8 G				製陶器	模写灰	10.3	輪み付	2.5	縫元	灰白	細砂粒・黒色灰	元形	回転削り 宝珠彫み貼付	回転削り 天井端部削り 縫付	
3	1-1-2				製陶器	模写灰	1.8	高さ	1.8			細砂粒・黒色灰	少含	自然削り	自天井端部の半分以上は焼成が異なる	
4	H-10 G				製陶器	模写灰	(11.8)	輪み付	2.3	縫元	灰白	細砂粒・チャート少・黒色灰少	1/5	旋削り 宝珠彫み貼付	回転削り 天井端部削り 縫付	
5	H-9 G				製陶器	模写灰	1.4	高さ	0.9			細砂粒・黒色灰	少含	旋削り	自天井端部の半分以上は焼成が異なる	
6	H-10 G				製陶器	模写灰	14.9	輪み付	3.7	縫元	灰	細砂粒・黒色灰	1/2	回転削り 天井端部削り 縫付	回転削り 天井端部削り 縫付	
7	1-1-2				製陶器	模写灰	1.9	高さ	1.1	縫元	灰白	細砂粒・チャート少含	1/4 極み火	回転削り 枕左・方向への丸削り	回転削り 天井端部削り 縫付	
8	G-6 G				製陶器	模写灰	(12.0)	—	(12.0)	縫元	灰白	細砂粒・チャート少含	1/3	回転削り 天井端部削り 縫付	回転削り 天井端部削り 縫付	7世紀前半~8世紀前半
							(18.2)	輪み付	2.9	縫元	黄灰	細砂粒・チャート少含	1/2	回転削り 天井端部削り 縫付	回転削り 天井端部削り 縫付	
							6.3	高さ	0.6					回転削り 天井端部削り 縫付	回転削り 天井端部削り 縫付	
							1.4	高さ	0.9	—	灰白	細砂粒・チャート少含	2/3 天井端部削り 縫付	回転削り 天井端部削り 縫付	8世紀後半	
							—	輪み付	—	縫元	黄灰	細砂粒・チャート少含	2/3 天井端部削り 縫付	回転削り 天井端部削り 縫付		
							—	高さ	0.9	—	黄灰	細砂粒・チャート少含	2/3 天井端部削り 縫付	回転削り 天井端部削り 縫付		

出土土器観察表(9)

博団番 No.	遺構名	区	層	種類	器形	口径	底径	器高	成・整形技法の特徴			時期	
									①焼成	②色調	③胎土		
3889	G—4 G			須恵器	横立碗 蓋	(10.0)	横み付 高さ	3.3	還元 灰	黒 褐色	微化粧・チャ一 ト少含	1/4 1.4 回転窯倒り 天井端部回転窯ナ ゲ 天井端部は下方へ折れる 宝珠彫み底付	8世紀後半
10	G—8 G			須恵器	横立碗 蓋	(11.0)	横み付 高さ	1.0	還元 灰	黒 褐色	微化粧・石英少 含	1/4 1.4 回転窯倒り 天井端部回転窯ナ ゲ 天井端部は下方へ折れる 宝珠彫み底付	
11	G—11 G			須恵器	横立碗 蓋	(8.1)	横み付 高さ	1.0	還元 灰	黒 褐色	微化粧・含	1/8 1.2 回転窯倒り 天井端部回転窯ナ ゲ 天井端部は下方へ折れる 宝珠彫み底付	
12	H—9 G			須恵器	横立碗 蓋	—	横み付 高さ	—	還元 灰	黒 褐色	微化粧・含	1/8 1.2 回転窯倒り 1×字状の縫跡 宝珠彫み底付	
13	A—10 G			須恵器	直立碗 蓋	(10.2)	横み付 高さ	1.1	還元 灰	黒 褐色	微化粧・黑色化 少含	1/3 1.3 回転窯ナデ 井端部は下方へ折れる	
14	表鏡			須恵器	直立碗 (天端)	(14.2)	天井付 高さ	2.1	還元 灰	黒 褐色	微化粧 少含	1/3 ロクロ懐形 井端部は天井端に下方へ折れ る	
15	表鏡			灰陶器	直立碗 器	(12.9)	—	稍良	灰質 オヨイブ	黒 褐色	口縁部～体部 少含 片	回転窯ナデ 灰軸に貫入する	8世紀後半
16	H—5 G			須恵器	直立碗 蓋	(18.7)	—	酸化焰	1.55、渦巻 縞模様	黒 褐色	口縁部～体部 少含 片	回転窯ナデ 底付	10世紀前半
17	A—7 G			平瓦	長さ (8.5)	(9.1)	厚さ 幅	1.8	還元 灰	黒 褐色	微化粧・チャ一 ト少含 破片	円筒形目鏡	
18	H—7 G			平瓦	長さ (10.3)	(8.0)	厚さ 幅	2.2	還元 灰	黒 褐色	微化粧・チャ一 ト少含 破片	円筒形目鏡	

第13表 出土土器観察表(10)

測定 No	遺跡名	区	層	輪鉢	笠桶	口径	底径	器高	成・整形技法の特徴			時期
									①地底	②色調	③胎土	
38-39 19	H-10G			乳頭器	丸瓦	長さ 幅	厚さ	選元	黑色點物	灰オリーブ	白色 粒含 量少 り	自然軸多様に掛かる 荷着物あ 内 面

第14表 出土土器觀察表(11)

R.例()は推定値 < >は既存値

博団 No.	番号	遺構名	区	層	器種	形態	材質	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	特徴
8団	18	トレンチ3	4		有舌尖頭器	中林型	頁岩	57	17	6	4.6	押圧剝離調整
	19	トレンチ2	3		磨製石鏟	有孔	片岩	(28)	18	3	(1, 3)	
	20	H-6住	2	1	打製石斧	II(短冊～撥形)	安山岩	248	92	41	1139.3	未成品
39団	1	F-3 G			蓮方		銅製	21	32	(2)	4.8	小孔
	2	H-4 G・c			銅製品	ドングリ状	銅製	16		1	2.0	上下に有孔
	3	C-12G			鉄製品(鉄斧)			112	41	22	137.0	中央欠損
	4	P-37			鉄製品(板状)			35	56	12	37.0	
	5	H-13住			臼玉	円形	滑石	28	27	16	19.7	未成品
	6	P-47			白玉	円形	滑石	18	16	7	3.3	未成品
	7	P-11			白玉	梢円形	滑石	8	6	9	2.1	
	8	H-1住	6		石鍤	楕円形	緑色岩類	56	44	15	50.8	切目2
	9	G-5 G			土鍤			47		22	19.0	
	10	P-105			土鍤			(46)		23	(22.6)	片側欠損

第15表 銅製品・鉄製品・石製品・土製品観察表

VI 成果と問題点

1 古墳時代～奈良・平安時代の土器群の変遷について

植松・地尻遺跡では古墳時代から律令期へと移る土器群を含む古墳時代から平安時代までの土器群が確認された。

古墳時代及び奈良・平安時代の土器については、すでに県内においては編年基準（坂口・三浦1986等）が設定されている。市内で発見された土器群についても、この基準をもとにした編年の位置付けが遺跡毎に行われている。本遺跡の土器群は、遺構の性格により古墳時代と律令期に分けられ、さらに5期に大別できるものと考えられる。I期は古墳時代後期、II期は古墳時代終末～奈良時代初頭、III期は奈良時代、IV期とV期は平安時代に相当する。

ここでは5期に細別した土器群の特徴と編年の位置付けについて検討していきたい。

I期の土器群

古墳時代後期の土器群である。土師器は壺、小型甕、甕で構成され、須恵器は少なく甕、甕等でみられる程度である。土師器の特徴は以下のとおりである。

土師器の壺は、須恵器模倣壺を主体としており、口縁が直立するもの、口縁がやや外反するもの、有段口縁のもの、口縁が内側に屈曲するものとがある。また、口縁下の稜が鋸いものもある。調整は口縁部は横ナデ、体部は横方向の箝削りである。なお、碓氷川南側地域では、一部の壺の内面に放射状のヘラミガキを施す傾向が認められるが、本遺跡では施すものが少ない特徴が認められる。

土師器の小型甕は、口縁部がやや直立するものと外反するものがある。形状は胴部球状で、底部も丸い。調整は口縁部が横ナデ、胴部が横方向、縦と斜方向の箝削りである。

土師器の甕は、胴部が球状になるものと長胴化したものが共伴する。口縁部は「く」の字に外反する。調整は口縁部が横ナデで、胴部上半部が縦方向、下半部が斜方向の箝削りである。

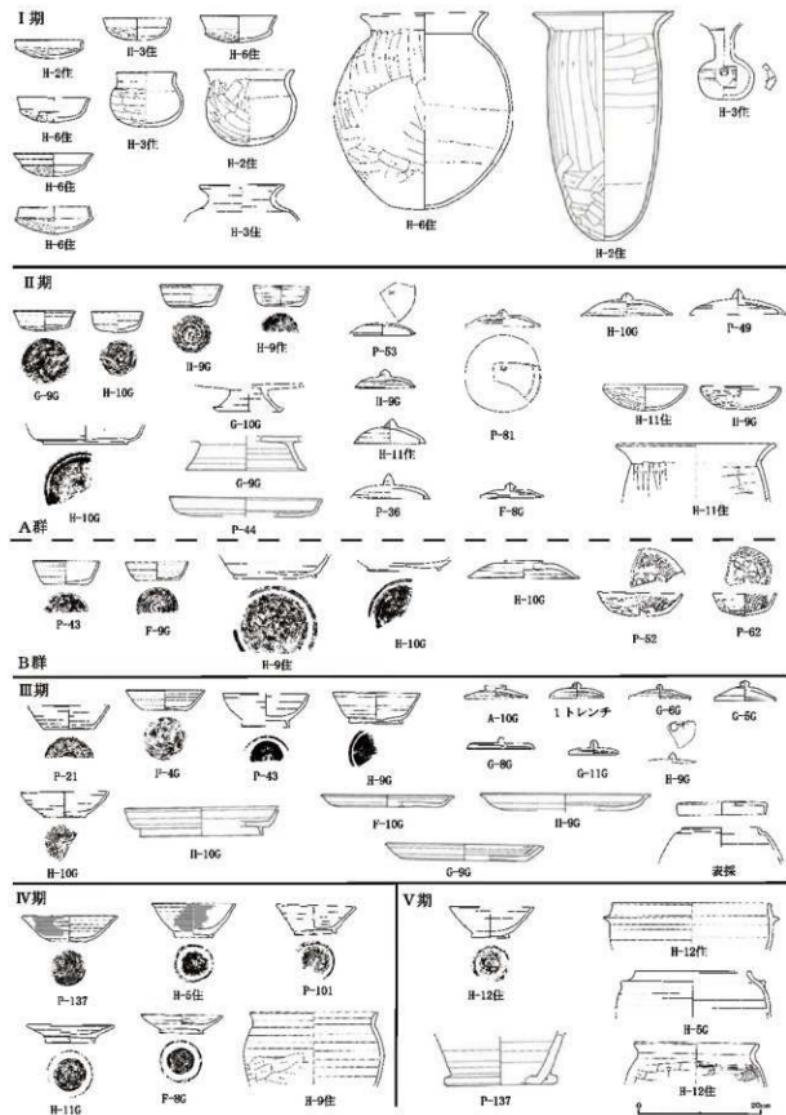
土師器の特徴と共伴する須恵器から古墳時代後期後半期（6世紀後半～7世紀初頭）に位置づけられると考えられる。

II期の土器群

古墳時代終末～奈良時代初頭の土器群である。在地系の土器群に加えて畿内の影響を受けた土器も認められる。土師器はI期と同様壺と甕類を主体とするが、須恵器は一般的な集落では少ない壺、蓋、高盤等の器種が認められる。II期の土器群は時期的な細別が可能であるが、県内では比較資料が少ないため、ここでは各土器をA群とB群のグループに分け一括した。

土師器の壺は、須恵器模倣壺から、丸底で体部が内湾するものと形態が変化する。体部箝削りが口縁部近くまで及び、口縁部の横ナデの幅が狭くなる。口縁部がやや内側に屈曲するのが特徴である。調整についてはI期の技法が残る。

土師器の甕は、I期の形態と同様、口縁部が「く」の字に外反し、胴部がやや張るものである。胴部の調整は幅の狭い箝削りが認められる。



第40図 古墳～奈良・平安時代の土器群

暗文土器（B群）は、畿内産の暗文坏を在地で模倣したものと思われる。坏の器形は在地の坏と須恵器を模倣した坏に分けられが、調整は横ナデと箇削りを用いている点で土師器坏の調整と類似する。内面にはやや間隔の広い放射暗文と底面に螺旋暗文が施されている。

須恵器の坏は、底部が丸底あるいは平底で底部から口縁部にかけてやや外反する。轆轤による回転横ナデによる整形で、底部の切り離しが手持ちヘラ切りと回転ヘラ切りが認められる。高台付坏はA群が畿内系、B群が在地系である。

須恵器の蓋は、摘みが擬宝珠形（A群）、環状（B群）に分けられる。両群とも端部にカエリがある。擬宝珠形の摘みには括があるものと無いものが認められる。また、摘みの形状は擬宝珠形から環状へと変遷し、カエリについても内側部がやや直立気味となるのものから、低くなる変遷が迫れる。

須恵器の高盤はA群とした。脚部が小さいものと幅広となるものがある。

II期の土器群は畿内系の土器群を主体とする特徴が認められる。須恵器胎土の肉眼観察では在地産である可能性が高いと考えられ、秋間地区に分布する窯跡群で製作されたものと推定される。

A群の土器群は須恵器の坏、蓋等の形態が畿内編年の飛鳥II～IV期の基準資料に類似する点で、7世紀後半～8世紀初頭に位置づけられると考えられる。この時期は「飛鳥時代」に相当する。B群の土器群はA群より後出すると考えられ、奈良時代前半（8世紀前半）に位置づけられると考えられる。坂口・三浦編年でA群はI・II段階、B群はIII・IV段階に相当する。

III期の土器群

奈良時代の土器群である。須恵器を主体とし、坏、椀、蓋、盤・高盤、甕等で構成される。II期と同様、畿内の影響を受けた土器群である。

須恵器の坏は、轆轤整形で口縁部が外反し、平底となる。高台が付き椀状となるものが出現する。また、「盤B」とされる皿状の坏に足の高い高台が付く特殊な形態も存在する。底部切り離し技法がヘラ切りから回転糸切りへと変化するのもこの時期の特徴である。

須恵器の蓋はII期と同様、摘みが擬宝珠形と環状のものに分けられる。II期との違いはカエリがなく、端部が下方に折れる点である。断面が水平となるものは「スカリ沢」タイプにみられる形態である。

須恵器の盤・高盤は、口縁部にカエリをもつのが特徴である。須恵器胎土の肉眼観察では在地産（秋間地区）が主体を占めると考えられるが、盤については、東海地方に分布する非在地系（猪投窯・湖西窯等）の可能性も考えられる。

土器群の年代は8世紀後半～9世紀前半に位置づけられる。坂口・三浦編年のIV・V段階に相当する。

IV期の土器群

平安時代の土器群である。須恵器が主体となり坏、高台梅、甕の他に高台皿が器種に加わる。土師器は甕類のみである。

須恵器坏、椀、皿は轆轤整形で底部切り離しが回転糸切りである。坏と椀は口縁部が大きく外反する。

土師器の甕は「コ」の字口縁となり、胴部が張るタイプである。

土器群の年代は須恵器の皿及び「コ」の字口縁の甕の存在から9世紀後半に位置づけられる。坂口・三浦編年のIX・X段階で相当する。

V期の土器群

平安時代の土器群である。IV期と同様、須恵器が主体となり、新たに須恵器の羽釜と瓶が器種に加わる。須恵器の羽釜は「吉井型」とされるものである。土師器の甕は「コ」の字口縁が崩れたものである。土器群の年代は羽釜の形態から10世紀前半に位置づけられる。坂口・三浦編年のXⅠ段階である。

まとめ

植松・地尻遺跡における土器群の変遷では、6世紀後半から7世紀初頭（古墳時代後期）の一群（I期）、7世紀前半から8世紀後半（古墳時代終末～奈良時代）の一群（II期とIII期）、9世紀後半から10世紀前半（平安時代）の一群（IV期とV期）といったグループ内での変遷が認められ、各グループとの間（7世紀前半、9世紀前半）と10世紀後半以降の土器群が極端に少ないことが判明した。

2 古代建物群の性格と遺跡の推定範囲

（1）建物群と出土遺物の特徴

植松・地尻遺跡で発見された建物群と出土遺物の特徴は次のとおりである。

1. 挖立柱建物址の柱穴は、堀方が直径1mを超える規模で通常の集落などで発見される掘立柱建物址の柱穴の規模と比較して大形である。
2. 挖立柱建物址の構造には、側柱建物と総柱建物がある。建物の規模は4間を超える大形建物も認められる。側柱建物には身舎の南側に庇が付く特殊なもの（HT-1・HT-4）もある。総柱建物（HT-2・HT-3）は倉庫等と考えられる。建物の屋根は瓦類の出土が少ないため、瓦葺きではなく板葺きが主体であった可能性が高い。こうした建物群は公的施設の可能性が高く、官衙遺跡で多数見受けられる。
3. 建物の配置が、ほぼ東西方向の軸線に沿って整然と並ぶことから、一定の方向性が認められる。建物群の北側には建物に並行して直線状に並ぶ柱穴列（SA1・SA2）が存在する。この柱穴列の北側には建物が確認されなかったことから、建物群を区画する施設（塀）の一つと考えられる。SA1と並行するSA2は、SA1と一体化した入口施設の可能性も考えられる。
4. 確認された建物群は建物の主軸、配置、重複関係から少なくとも3群以上に分けられる。
 - A群………大形掘立柱建物の側柱建物と総柱建物で構成される一群である（HT-1・HT-2・HT-3・HT-4とSA1・SA2）。
 - B群………小形掘立柱建物で構成される一群である（HT-5・HT-6）。
 - C群………主軸方向が全く異なる小形掘立柱建物（HT-7）
5. 区画施設の内側では、建物群の周辺で須恵器が多数出土した。器種では食膳具とされる蓋環、盤と貯蔵用の甕類が多い。一般的な集落とは異なり、土師器より須恵器が占める割合が高い特徴が認められる。
6. 一般の集落では少ない摘みが宝珠形をする須恵器蓋、須恵器甕、巡方、ドングリ形銅製品が出土している。また、「評」と刻書された須恵器蓋も出土している。

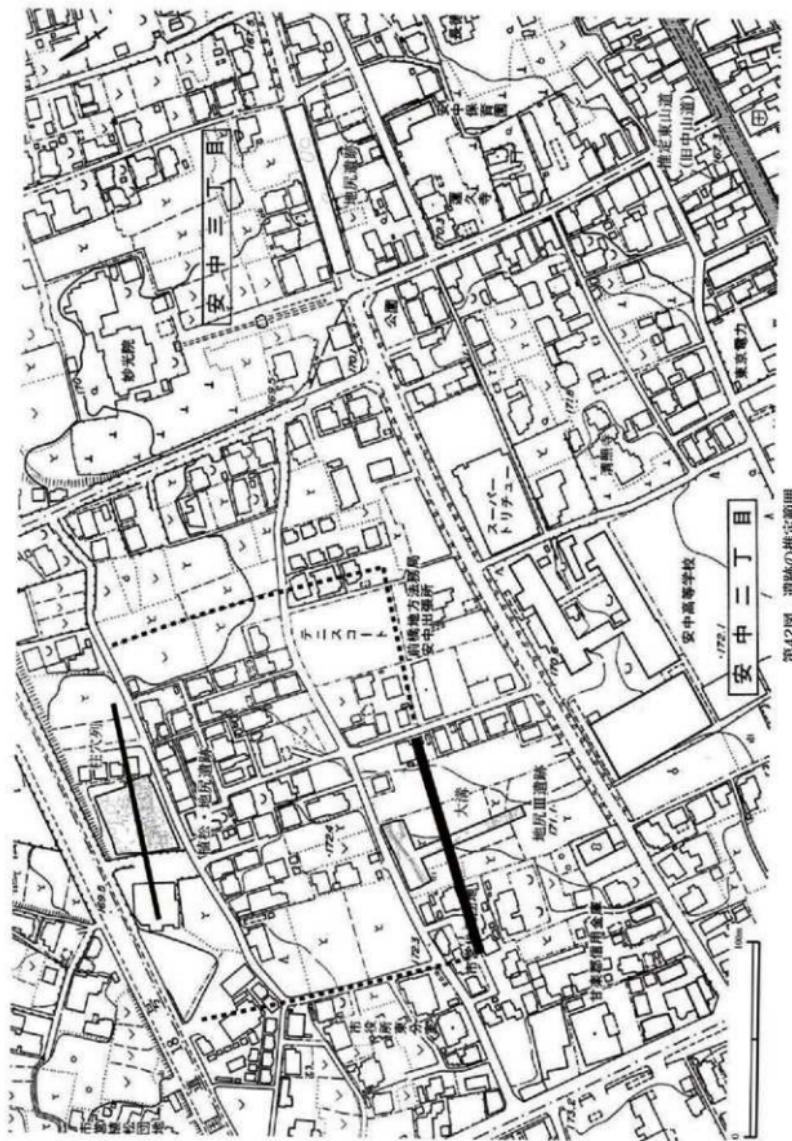
(2) 建物群の時期

建物群は大きく3群に分けられることは判明したが、各群との前後関係、建物の同時並存していたかといった時間差については、さらに検討する必要がある。また、確認できなかった建物も柱穴の分布状態から、各群のいずれかに関係するものと考えられる。したがって、ここでは建物群全体の存続時期を中心に検討する。

発見された建物群の時期を決める手掛かりとしては、H-11号住居址とH-12号住居址から上限と下限を想定することができる。H-11号住居址は、大形建物群の南に存在し、その周辺はローム混じりの土で整地された柱穴が存在しないエリアとなっている。この住居址は整地の際に埋め戻されたと考えられる。住居址の出土遺物は7世紀後半を主体とする。H-12号住居址はHT-1号掘立柱建物址の柱穴を壊して構築されている。住居址の出土遺物は10世紀前半を主体とする。この2軒の住居址によって、



第41図 地尻III遺跡・鍛冶ヶ嶺遺跡全体図(参考)



第42図 遺跡の推定範囲

建物群が7世紀後半から10世紀前半の間に存在した可能性が高いと考えられる。また、7世紀後半の遺物が多く、その中には「評」と刻書された土器や一般の集落では少ない須恵器の蓋や坏等が含まれていること、8世紀代の住居址は確認されなかったものの遺物は多数出土していること、建物群の北には9世紀後半の住居址が存在することにより、建物群は7世紀後半以降に構築され始め、9世紀前半には廃絶されたものと推測される。以上のことから、本遺跡の特徴である大形建物群としたA群は、8世紀代に機能していたものと考えられる。

(3) 遺跡の性格について

公的施設である可能性が高い建物群を多数確認した植松・地尻遺跡の性格について、現状では可能性として次のものが挙げられる。

1. 植松・地尻遺跡が存在する地域は、野後郷に比定され、古代碓氷郡家（郡衙）あるいは東山道駅路に設置された野後駅家の推定地とされる。したがって、郡家あるいは駅家に関連する施設の一部であった可能性。
2. 野後郷に居住した有力豪族の居宅であった可能性。
3. 寺院の可能性。

可能性として高いのは1と2である。なかでも遺跡周辺の歴史的背景から1の可能性が極めて高いと考えられる。3については出土遺物の中に寺院を思わせる仏具や土器等の遺物が確認されなかったことから、寺院である可能性は低い。

本遺跡が郡家あるいは駅家であるかについては、遺跡の全体像が現状では不明であること、碓氷郡内の東山道駅路が確認されていないこと、郡家に駅家が併設される場合もあることから、現状では両者を特定することは難しい。郡家あるいは駅家とした場合、建物が多数存在し、総柱建物も認められることから、郡家での中心的な施設である郡庁ではなく、正倉、館、厨等の施設の一部であったと思われる。また、駅家の駅館院あるいは官舎群の一部であったと思われる。これは事務に関する遺物（硯、刀子等）が少なく、食膳具や貯蔵甕が多数出土している点でも裏付けられる。

(4) 遺跡の推定範囲（第41図・第42図）

植松・地尻遺跡の南に地尻Ⅲ遺跡が存在する。この遺跡は奈良・平安時代の住居址が多数発見された集落跡であるが、複数の溝が発見されている。M-7号溝は幅約5mもある大溝である。この大溝は現在の地割に沿って伸びていると思われ、植松・地尻遺跡の柱穴列の延びる方向とほぼ一致する。このような大溝は施設の区画溝と考えられ、この区画溝と柱穴列の間が約100mあることから、南北約100mの規模をもつ施設が存在したと想定される。区画の東西方向については不明であるが、南北の区画に直交する西側の道路、東側の細地の地割りが東西区画の範囲である可能性が高い。しかし、郡家と考えた場合、郡家は複数の施設の集合体で構成され広範囲にわたるものとされるため、今回発見された区画範囲外にも多数の施設が存在した可能性が推測される。この区画の東には地尻Ⅱ遺跡が存在し、奈良時代の集落跡が発見されている。この遺跡では出土遺物の中に畿内系の土器、硯等があり、公的施設に関係した集落が存在したものと考えられる。

(5) 植松・地尻遺跡と関連官衙遺跡

古代碓氷郡で確認されている公的施設と考えられる建物群は、植松・地尻遺跡の西にある鍛冶ヶ嶺遺跡で発見されている（第41図）。鍛冶ヶ嶺遺跡では長軸方向がL字状に配置される大形掘立柱建物址4棟、土坑が確認された。建物の重複と拡張はなく、8世紀代の建物群と考えられている。建物は全て側柱建物であり、柱穴は方形で一边が約1mと大型である。この遺跡も植松・地尻遺跡と同じ野後郷の西侧に比定される地域に存在し、遺跡の南北には東山道駿路が推定されている。鍛冶ヶ嶺遺跡の性格については、遺跡の全体像が不明なため特定できないが、植松・地尻遺跡と同様の性格として居宅あるいは何らかの公的施設として考えられる。郡家あるいは駅家と推定するためには、さらに検討する必要があるが、植松・地尻遺跡の性格を検討する上で注目すべき遺跡である。また、松井田町坂本にある原遺跡では、梁行3間、桁行11間の身舎に三面の底が付く大形掘立柱建物址が発見されている。この建物の柱穴は「布掘り」とされる特殊な掘方である。建物の規模からして公的施設の可能性が高く、遺跡のある地域が坂本郷に比定され東山道駿路が通過することから、遺跡が坂本駅家の可能性が考えられている。

また、磯部郷にある大王寺地区遺跡群でも、建物の配置に一定の方向性が認められる掘立柱建物群が発見され、何らかの公的施設の性格を建物群が確認されている。荒神平・吹上遺跡では古代の可能性がある桁行5間以上の縦柱建物で柱穴から礎石へと建て替えられた建物が確認されてる。

上野国における郡家あるいは駅家に関係する遺跡及び関連遺跡（寺院等）は、上西原遺跡（勢多郡）、十三宝塚遺跡（佐位郡）、入谷遺跡（新田郡）、天良七堂遺跡（新田郡）、大八木屋敷遺跡（群馬郡）等で確認されている。なお、上野国府については前橋市元経社町周辺が推定され、掘立柱建物址、区画溝、工房址、関連集落等が発見されているが、現在でも国府の範囲、国府の位置が特定できていない。

3 古代碓氷郡の歴史的背景（第43図）

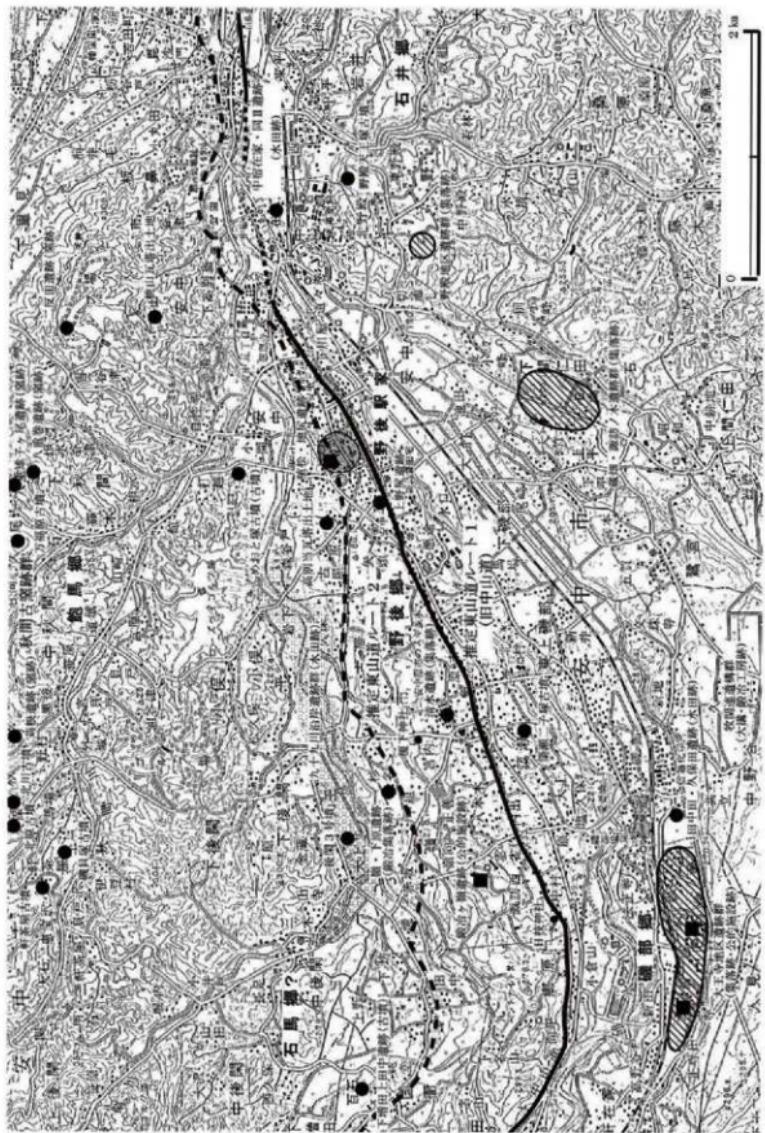
古代の碓氷郡には『倭名類聚抄』によると「飽馬・石馬・坂本・磯部・石井・野後・驛家・浮因」の8郷があったことが知られている。また、東山道駿路に設置された「坂本駅家・野後駅家」も存在する。なお、平安時代後期の「上野国交替実録帳」には、上野国14郡の郡家の状況が記載され、郡家の実態を検討する上での基礎資料となっているが、碓氷郡の項については記載が不明となっている。

郡家の場所については、坂本郷あるいは野後郷と推定されていたが、植松・地尻遺跡の発見より、野後郷に存在した可能性が高いことが判明した。しかし、本遺跡が8世紀代には衰退すること、「上毛野坂本朝臣」氏の存在から、その後、駅家が坂本郷へ移転した可能性も考えられる。

古代碓氷郡を中心とした上野国西部は、「物部氏」に由来する「石上部（君）」氏が分布する地域であったと言われ、その後、「石上部（君）」は「上毛野坂本君」の姓となり、「上毛野坂本朝臣」に改姓する。この氏族は中央との関係が深いことでも知られており、上野国でも著名な氏族である。この氏族が治めたと考えられる碓氷郡には、郡の格付けが下郡にもかかわらず、東山道駿路の駅家が2カ所設置され、「碓氷の坂（関）」が存在することから、軍事的、政治的に交通の要衝であった地域として捉えられる。これは碓氷郡が最も都（中央）に近いといった地理的な要因も関係すると考えられる。

市内を中心として、東山道駿路と各郷の在り方をみると次のような特徴が挙げられる。

1. 東山道駿路には旧中山道とするルート1と松井田町国衙付近を通過し、九十九川の右岸に沿うルート2の2つのルートが推定されている。しかし、発掘調査等で遺構が発見されていない以上、



第13図 古代灌水部と開通道路

どちらが確実なルートであるかは言えない。現状ではこの2つのルートが存在していたものと想定される。

2. 鮑馬郷には窯業跡が多数分布する地域であるとともに、切石積石室を特徴とする7世紀後半の古墳が分布する。野後郷には郡家あるいは駅家と推定される植松・地尻遺跡が存在し、北には石室構造が特殊なめおと塚古墳が存在し、遺跡との関連性が注目される。また、公的施設である鍛冶ヶ嶺遺跡と鍛冶集落である嶺・下原遺跡が存在する。磯部郷には中心的な集落である大王寺地区遺跡群があり、その周辺で大規模な「牧」の経営が行われている。

4 「評」と刻書された須恵器について

「評」と刻書された須恵器は、HT-7号掘立柱建物址の大形柱穴から出土した。「評」の文字は須恵器蓋の内面中央にあり、焼成前に先端が尖る串状の工具で刻書されている。「評」の字の上下に文字があったかについては、破片であるため現状では確認できないが、上に「確日」と刻書されていた可能性も考えられる。

この蓋は摘みが宝珠形をするのが特徴で、共伴する土器群から7世紀後半（植松・地尻遺跡II期）に推定される。また、胎土の特徴から秋間古窯跡群で生産されたものと考えられる。本遺跡の文字資料はこの遺物が唯一であり、墨書き土器も確認されなかった。

「評」については、大宝令（701年）以前に設置された地方行政区画である「国-評-里（五十戸）」に区分された「郡」の前身である「評」を意味するものと推測される。「評」制については、大化改新後、孝德朝の頃より、在地の有力豪族（国造）の支配体制から国家による地方支配を押し進めるために施行された行政組織で、国府より早く設置された。「評」が全国一齊に設置されたのは「常陸國風土記」等によれば大化5年（649年）とされており、これ以降、全国規模で「評」の分割と再編が行われたと考えられている。この「評」については、日本書紀にある革新の詔の中に「評」ではなく「郡」とあることから、その存在を疑問視する「郡評論争」が繰り広げられた。しかし、藤原宮の発掘調査によって「評」の文字が書かれた木簡が出土したことによって、革新の詔にある「郡」は後に潤色されたものであり、「評」が郡以前に存在していたことが証明された。これまで上毛野地域でも「評」制が施行されていたことは、飛鳥京・藤原京を中心とする都城から出土した木簡の中で「確日評（確水郡）」、「車評（群馬郡）」、「佐為評（佐位郡）」、「大荒木評（邑楽郡）」が知られている。上毛野地域で「評」の存在が確認されたのは初めてであり、確水郡では、郡制以前に「確日評」として「評」制が施行されていたことが明らかとなった。

さらにこの刻書された須恵器の型式学的年代が7世紀後半（650年～675年頃）に位置づけられ、「評」制が全国規模で施行される年代とほぼ一致することも明らかとなった。古代の文字資料として、高崎市山名町に所在する「山ノ上碑」の碑文にある「辛巳歲（681年）」と記されている年代より古く、上毛野地域に関係する県内最古の考古文字資料である可能性が考えられる。

参考文献

- 市内の遺跡については主に各遺跡の発掘調査報告書及び『安中市史』第4巻を参考にしたので、ここでは紙面の都合上、報告書名は割愛した。また、参考文献は主要なものに限った。
- 前沢和之 1978 「上野国交替実跡帳」都衙項についての覚書』『群馬県史研究』第7巻 群馬県史編さん委員会
- 群馬県教育委員会 1983 『歴史の道調査報告書 東山道』
- 松井田町史編さん委員会 1985 『松井田町誌』 松井田町
- 板口 一・三浦京子 1986 「奈良・平安時代の土器編年』『群馬県史研究』第24号 群馬県史編さん委員会
- 群馬県史編さん委員会 1991 『群馬県史』通史編2
- 千田茂雄 1991 『地尻遺跡・地尻II遺跡』安中市教育委員会
- 吉村武彦 1991 『日本の歴史3 古代王權の展開』集英社
- 大江正行 1992 『史跡十三宝塚遺跡』群馬県教育委員会・(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 戸沢光則・笛山晴生編 1992 『新版古代の日本8 関東』角川書店
- 山中敏史 1994 『古代地方官衙遺跡の研究』塙書房
- 若狭 肇 1996 『群馬県地域』『YAY!』弥生土器を語る会
- 群馬県埋蔵文化財調査センター・(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1997 『最新情報展 出土した古代の土器 展示レポート』
- 群馬県埋蔵文化財調査センター・(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1998 『最新情報展 古墳時代の土器 展示レポート2』
- 西川修一編 1999 『公開セミナー 古代の大型建物跡一役所か邸宅か—記録集』(財)かながわ考古学財団
- 松田 猛 1999 『上西原遺跡』群馬県教育委員会
- 高崎市史編さん委員会 2000 『新編高崎市史』資料編2原始古代Ⅱ
- 森田 稔 2000 『日本古代の聚落と交通』岩田書院
- 小池浩平他 2001 『古代のみち』群馬県立歴史博物館
- 千田茂雄 2001 『鎧治ヶ嶺遺跡』安中市教育委員会
- 大工原 豊・若狭 敦・千田茂雄・右鳥和夫・外山政子・爪爪久純・間口功一他 2001 『安中市史』 第4巻原始古代中世資料編
- 井上慎也 2002 「植松地尻遺跡で発見された古代建物群と刻畫土器』『群馬文化』271 群馬県地域文化研究協議会
- 岡部町教育委員会 2002 『古代の役所—武藏国横沢郡家の発掘調査から—』
- (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2002 『熊野遺跡(A・C・D区)』
- 井上慎也 2003 「植松地尻遺跡で発見された碓水郡の役所と「評」の刻畫土器』『安中市史』第2巻通史編
- 大工原 豊・若狭 敦・右鳥和夫・間口功一他 2003 『安中市史』第2巻通史編
- 田中広明 2003 『地方の豪族と古代の官人』柏書房
- 山中敏史編 2003 『古代の官衙遺跡 I 道構編』独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所
- 高崎市史編さん委員会 2004 『新編高崎市史』通史編1原始古代
- 高島英之 2004 「上野国』『日本古代道路事典』八木書店
- 山中敏史編 2004 『古代の官衙遺跡 II 遺物・遺跡編』独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所

写 真 図 版

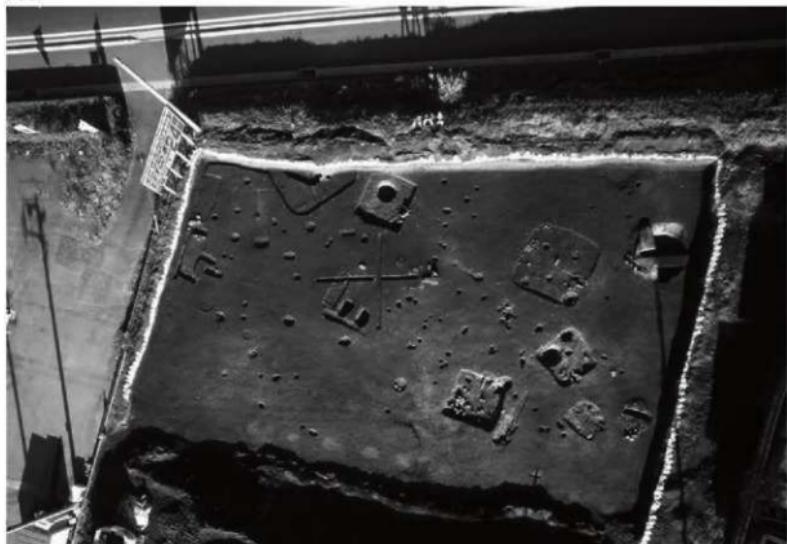


植松・地尻遺跡から上野国府方面を望む



植松・地尻遺跡 全景

図版2



調査区北側全景



調査区南側全景



Y-1号住居址 遗物出土状况



Y-1号住居址 瓷出土状况



H-1号住居址



H-1号住居址 遗物出土状况



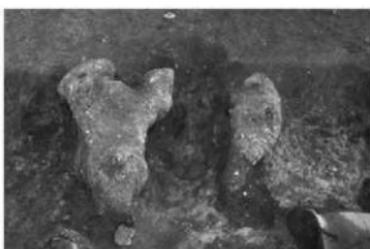
H-1号住居址 瓷



H-2号住居址

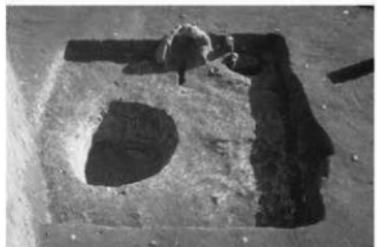


H-2号住居址 遗物出土状况



H-2号住居址 瓷

图版 4



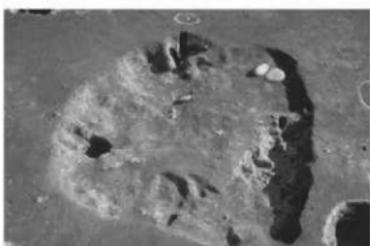
H-3号住居址



H-3号住居址 遗物出土状况



H-3号住居址 磨



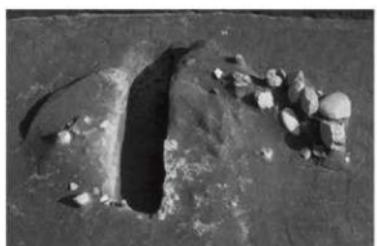
H-4号住居址



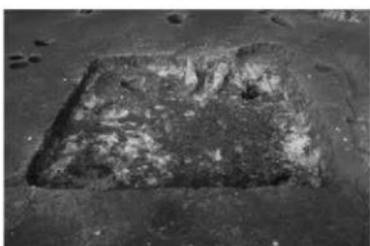
H-4号住居址 遗物出土状况



H-4号住居址 磨



H-5号住居址



H-6号住居址



H-6号住居址 遺物出土状況



H-6号住居址 坑



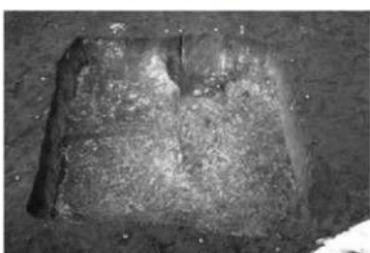
H-7・10号住居址



H-8号住居址



H-9号住居址



H-11号住居址

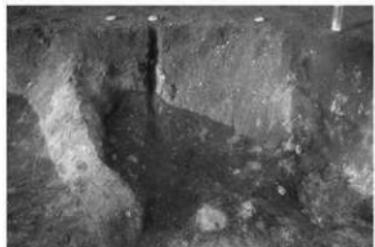


H-11号住居址 土層堆積状況



H-11号住居址 遺物出土状況

图版 6



H-11号住居址 窑



H-12号住居址



H-12号住居址 土层堆积状况



H-12号住居址 遗物出土状况



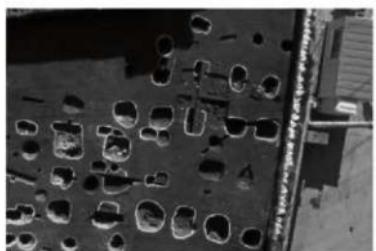
据立柱建筑物群



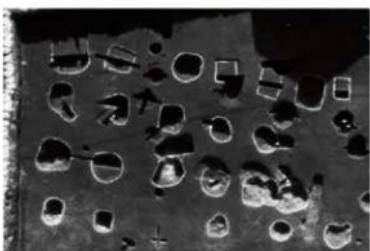
据立柱建物址確認状況



据立柱建物址と住居址の関係



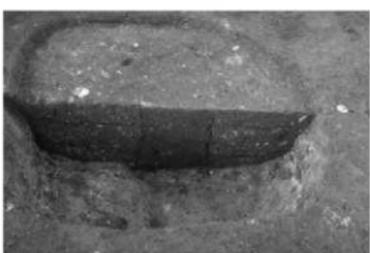
HT-1号据立柱建物址



HT-2・3号据立柱建物址



P-51号柱穴土層断面 (HT-1)



P-52号柱穴土層断面 (HT-1)

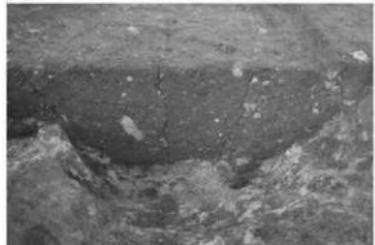


P-69号柱穴 (HT-1)



P-37号柱穴土層断面 (HT-2)

图版8



P-45号柱穴土层断面 (HT-2)



P-94号柱穴土层断面 (HT-2)



P-21号柱穴土层断面 (HT-3)



P-42号柱穴土层断面 (HT-3)



P-105号柱穴 (HT-3)



P-111号柱穴土层断面 (HT-3)



P-139号柱穴 (HT-3)



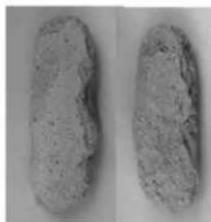
P-81号柱穴土层断面



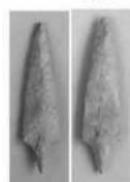
D-29号土器



2トレンチ



打削石斧



有舌尖頭器



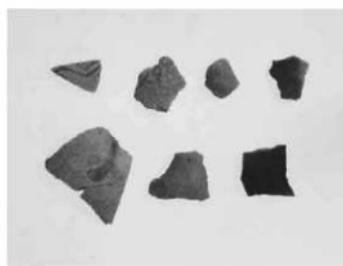
Y-1号住 瓢



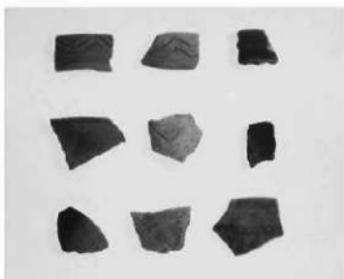
Y-1号住 盆



Y-1号住



Y-1号住 出出土器



グリッド 出出土器

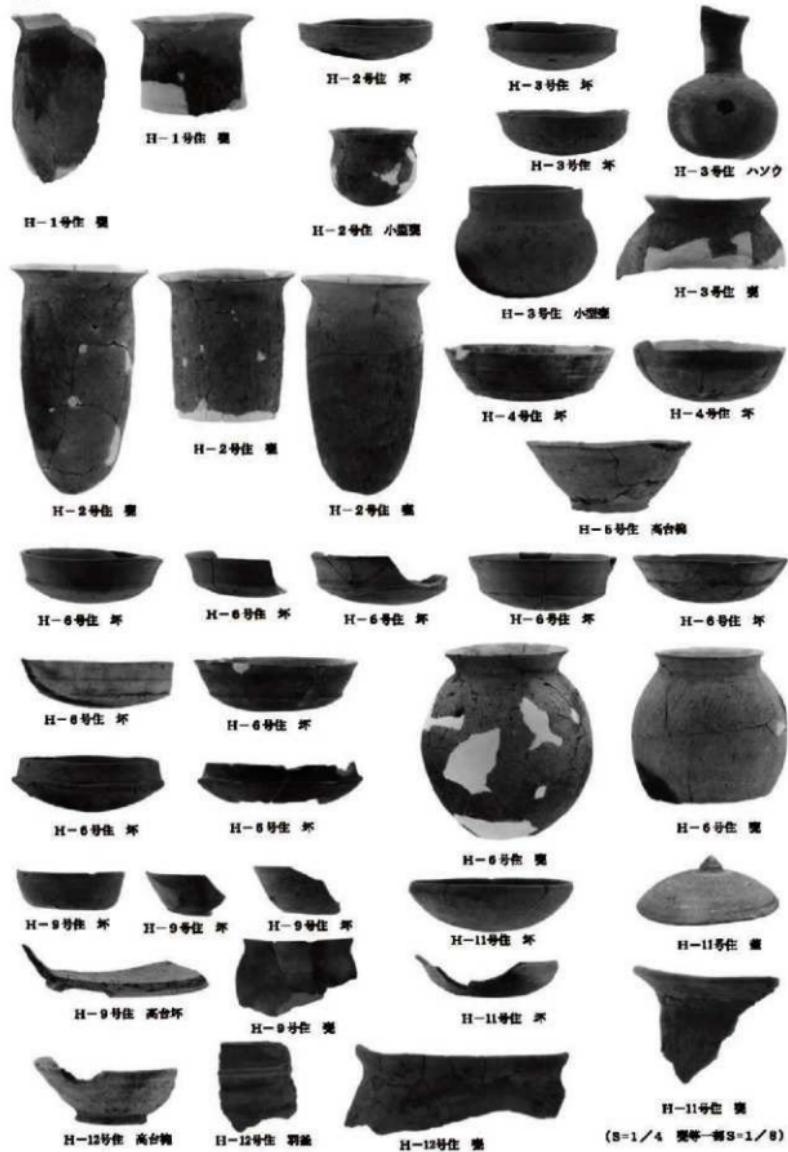


グリッド 出出土器

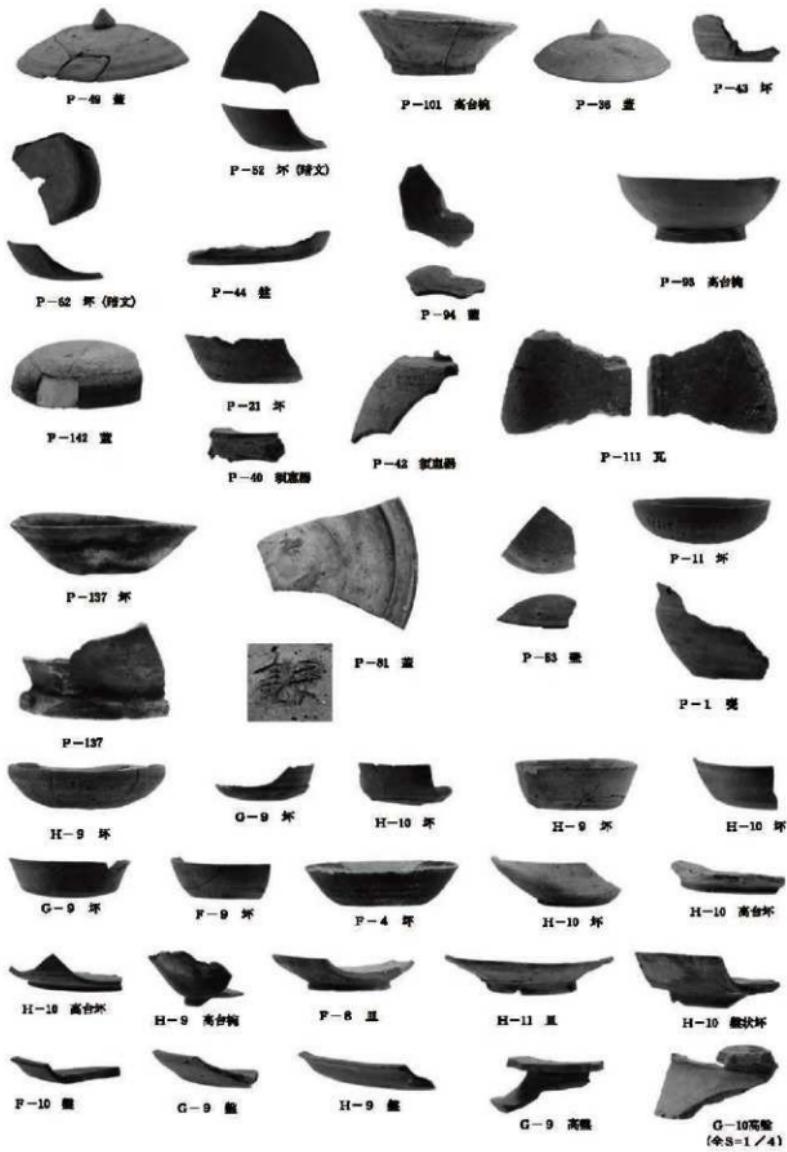


磨製石鏃

図版10



図版11



図版12



発掘調査報告書 抄録

ふりがな	うえまつ・ちじりいせき
書名	植松・地尻遺跡
副書名	店舗建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ番号	
編著者名	井上慎也・深町 真
編集機関	安中市埋蔵文化財発掘調査団
編集機関所在地	379-0192 群馬県安中市安中一丁目23-13 (安中市教育委員会内)
発行年	西暦2006年(平成17年)3月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
植松・地尻遺跡	安中市安中二丁目 宇都松・地尻	102113	D-18	36°19'30"	138°53'31"	2001.11.01 ~ 2001.12.26	750m ²	店舗建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
植松・地尻遺跡	集落 官衙	興文中期 弥生中期 古墳後期 古墳終末～奈良・平安	土坑1 住居址1 住居址7 住居址5 掘立柱建物址7 柱穴列2 土坑	興文土器・石器(有舌尖頭器) 弥生土器・磨製石器・打製石斧 土師器・須恵器・石製品 土師器・須恵器・瓦・鍍銅品(迷方・ドングリ形)・鉄製品・土製品	中期後半竪見町式土器群 古代達水郡の官衙遺構 区画施設をもつ大型掘立柱建物群 「評」と刻書された須恵器盤出土

植松・地尻遺跡

-店舗建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-

発行日 平成17年3月31日

編集・発行 安中市埋蔵文化財発掘調査団
群馬県安中市安中一丁目23番13号
(安中市教育委員会内)

印 刷 荒瀬印刷株式会社
群馬県高崎市上小塙町733